研　究　紀　要

第31号

平成27・28・29年度研究

共に生きる力を育む教育の実践

～「つながる力」に着目した授業作り～

平成30年2月

宇都宮大学教育学部附属特別支援学校

目　次

はじめに

Ⅰ　研究の概要
１　研究主題…… 1
２　研究主題設定の理由…… 1
３　研究目的…… 3
４　研究内容及び方法…… 3
５　研究計画…… 3
６　研究組織…… 4
７　研究経過…… 5
（１）「つながる力」に関する内容の明確化…… 5
（２）「つながる力」に着目した授業作り…… 7
８　研究の全体構造図…… 12
資料１　「つながる力」の段階表…… 13
資料２　題材計画…… 14
資料３　学習指導略案…… 15
資料４　「つながる力」を育む授業評価表…… 16
資料５　「つながる力」に関する児童生徒評価表Ⅰ・Ⅱ…… 17
資料６　本校の教育課程について…… 18

Ⅱ　小学部研究
１　小学部研究主題…… 19
２　小学部研究主題設定の理由…… 19
３　研究目的…… 19
４　研究内容及び方法…… 19
５　研究経過…… 20
（１）１年次…… 20
（２）２年次…… 21
（３）３年次…… 22
６　小学部研究のまとめ…… 36
（１）各実践から見いだせる有効な取組…… 36
（２）児童や教員の変容…… 37
（３）考察…… 38

Ⅲ　中学部研究
１　中学部研究主題…… 39
２　中学部研究主題設定の理由…… 39
３　研究目的…… 39
４　研究内容及び方法…… 39
５　研究経過…… 40
（１）１年次…… 40
（２）２年次…… 41
（３）３年次…… 42
６　中学部研究のまとめ…… 56
（１）各実践から見いだせる有効な取組…… 56
（２）児童や教員の変容…… 57
（３）考察…… 58

Ⅳ　高等部研究
１　高等部研究主題…… 59
２　高等部研究主題設定の理由…… 59
３　研究目的…… 59
４　研究内容及び方法…… 59
５　研究経過…… 60
（１）１年次…… 60
（２）２年次…… 61
（３）３年次…… 62
６　高等部研究のまとめ…… 76
（１）各実践から見いだせる有効な取組…… 76
（２）児童や教員の変容…… 77
（３）考察…… 78

Ⅴ　研究のまとめ…… 79

参考文献

おわりに

研究同人

はじめに

校　長　　松　島　　さくら子

寒さ厳しき中でも，木々の芽が膨らみはじめ少しずつ春が近付いてくる思いがいたします。私ごとではありますが，一昨年４月本校にまいりましてから２年が経とうとしております。障害を有する児童生徒たちの教育に関わる機会を得られ，子どもたちの成長の歩みに思いを致し，深い感慨を覚えておりますとともに，これからの特別支援教育について考え学ぶ貴重な時間を過ごしております。

本校は，特別支援学校としての役割として，「児童生徒が個々の実態に応じた生きる力，働く力を身に付けられるようにする」･「地域社会に対して，障害のある児童生徒の理解・啓発を促進する」，附属学校としての役割として，「将来の教師として，指導実践力のある人材育成をする」･「大学と一体となった実践研究を推進し，公立学校等に広く公開・提案する」という設置目的を掲げ，教職員が一体となって教育実践研究に取り組んでおります。

そこで本校では「共に生きる力を育む教育の実践～『つながる力』に着目した授業作り」を研究主題として，平成 27 年度より３か年の計画で研究実践に取り組み，本年度が最終年度となります。知的障害を有する児童生徒が，豊かな社会生活を送ることができるようになるためにはどのような力を育む必要があるのかという観点から，「つながる力」を緒に，これまでの成果や課題を踏まえながら教員一人一人がそれぞれにテーマを掲げた授業実践を積み重ねてきました。

小学部は体育・音楽・生活学習において「ここちよく相手と関わろうとする力を育む授業作り」とし，遊びの要素を取り入れた授業実践とその授業評価を行いました。中学部は，「互いを認めて仲間と関わり合う力を育む授業作り」とし，生活学習・体育・音楽において「つながる力」を育てるための視点を加えた授業作りに取り組みました。高等部は，「自信をもって，社会に踏み出す力を育む授業作り」とし，主に生活学習にて，社会とつながることを意識した授業実践を行なってきました。

第 24 回公開研究会では，各学部での授業公開に次ぎ，全体会においてこれまでの成果から見えてきた「つながる力」を育むために有効な学習内容や指導方法について提案をいたします。授業を語る会では，ポスターセッションにて本校授業者とご参会いただきます皆様方と意見交換させていただくことで，今後の教育研究をより一層充実させていくことができればと存じます。そしてシンポジウムでは，研究協力者である宇都宮大学教育学部･教育学研究科の特別支援教育分野４名の先生方に本研究の総括をしていただきます。

３か年にわたり本研究に取り組み，課題解決へ向けて歩む学び合いを継続し，成果を発信することができるのも，ご指導いただきました先生方，本研究をお支えいただいたすべての皆様のお陰と心より感謝申し上げます。

Ⅰ　研究の概要

1　研究主題

共に生きる力を育む教育の実践
～「つながる力」に着目した授業作り～

2　研究主題設定の理由

（１）社会的動向から

障害者に関する初めての国際条約である「障害者の権利に関する条約」（以下，権利条約）が平成 18 年 12 月に採択され，我が国も批准に向けて様々な施策や法令の整備が進められてきた。教育の分野においては，平成 24 年７月に，中央教育審議会初等中等教育分科会において「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（以下，分科会報告）が取りまとめられ，権利条約で提唱されたインクルーシブ教育システムが我が国の教育施策にも明確に位置付けられた。分科会報告では，共生社会について，「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が，積極的に参加・貢献していくことができる社会」，「誰もが相互に人格と個性を尊重し合い，人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」と定義し，共生社会を目指すことは我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題であるとしている。また，インクルーシブ教育システムについては，同じ場で共に学ぶことを追究するとともに，個々の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して，自立と社会参加を見据えて，その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる，多様で柔軟な仕組みを整備することが重要であるとしている。

これらのことから，インクルーシブ教育システムにおける多様な学びの場の一つである特別支援学校は，児童生徒が共生社会の一員として主体的に参加・貢献する力を育む方策を追究することや児童生徒一人一人の多様な教育的ニーズに，より細やかに，より柔軟に応じられる学校を目指すことを社会から求められていると言えるだろう。

（２）本校の学校教育目標及び児童生徒の実態から

本校は，「子ども一人一人の発達・特性及びニーズに応じた教育を行い，心身の調和的発達を図ることにより，一人一人が主体的に豊かな社会生活を送ることができるようにする。」という教育目標を掲げている。中でも，**「豊かな社会生活」を送る**ということについては，これまで何度も議論がなされてきたが，平成 21 年度からの研究において，**「一人一人が，自分のもてる力を伸ばし，更にその力を十分に発揮することにより，主体的に家庭生活・地域生活及び社会生活に参加し，生き生きと生活できること」と定義付け**をした。これらは，前述の共生社会の定義やインクルーシブ教育システムの理念と重なる部分が多く，本校において日々の教育活動を展開していくことは，社会の中で力強く生きていく力を育てることであると言えるだろう。

本校の児童生徒は素直で明るく，何事にも根気強く取り組むことができる子どもたちである。また，人との関わりを好み，その楽しさや喜びを知っている児童生徒も多い。それらの良さを，学校生活を越え，家庭生活，更には地域生活，社会生活においても発揮し，自分らしく，より主体的に参加していく力へと発展させていきたい。

私たちの生活は，他者との関わり合いの中で成立しており，円滑な人間関係は社会への参加を後押しするものになるだろう。このような観点から，**自分を取り巻く様々な人々と関わり合い，より良い関係を築きながら生活する力＝「共に生きる力」**の育成は不可欠であると考えた。

（３）これまでの研究から

本校では，平成 19 年度からの２か年の研究（研究主題：将来の自立を目指した教育内容とその実践）及び，平成 21 年からの２か年の研究（研究主題：ＩＣＦを活用した個別の教育支援計画の在り方～豊かな社会生活を送るために～）において，ＩＣＦの考え方を取り入れ，学習内容の整理・見直しと児童生徒の特性やニーズに応じた指導・支援の検討をした。ＩＣＦを活用して児童生徒一人一人のニーズを把握し，長期的な視点に基づいた支援を行うことを目的とした個別の教育支援計画を作成することを通して，児童生徒の特性やニーズに応じた指導・支援の充実を図ることができた。

平成 23 年度からの４か年の研究では，「子ども一人一人が輝く学校作り～本人・社会のニーズに応じたキャリア教育と教育環境～」という主題の下，キャリア教育の視点を取り入れ，豊かな社会生活を送るための能力や態度を育成する学校の在り方について検討した。この研究では，**キャリア教育の視点から，育てたい「三つの力」として「土台となる力」，「つながる力」，「前に踏み出す力」を設定**し，本校独自のキャリア教育全体計画に基づいた教育活動を展開する基礎を整えることができた。また，**「三つの力」を育成するためには，児童生徒の自信や自己肯定感，自己有用感といった内面を育むことが不可欠であり，スキルと内面の両方からのアプローチが大切である**という共通理解が図られたことも大きな成果の一つであった。今後は，これらの成果を踏まえた実践を積み重ねながら，評価・改善をしていく段階にある。一方で，この「三つの力」に関わる学習内容は多岐に渡るため，具体的な学習内容について系統的，体系的に計画し，実行することの難しさもあったことから，実践を積み重ねるにあたっては，焦点化して取り組んでいく必要がある。以上のことから，本研究では，**「共に生きる力」に関連が深いと思われる「つながる力」に着目した授業作りに取り組む**ことにした。なお，「三つの力」については，表Ｉ－１のとおり定義付けしている。

表Ｉ－1 「三つの力」の定義

	土台となる力	**つながる力**	前に踏み出す力
定義	・基本的生活習慣の確立及びそれを維持しようとする力 ・地域で生活していくために必要な力	**・意欲的に他者に働きかけようとする力** **・肯定的に自己を理解し，人間関係を円滑にするために必要な力**	・課題に対処し，挑戦しようとする力 ・自分の生活や人生を豊かに創造する力
要素	食事，排泄，着替え，身だしなみ，清潔，整理整頓，金銭，交通機関の利用，危険回避(安全の確保)，生活リズム，生活設計　など	**意思表示，挨拶，返事，応答，報告，指示の理解，自己理解，自己統制，他者との協調　など**	選択，意欲(見通し)，課題発見，目標設定，計画立案，評価，改善，役割の理解，学ぶこと・働くことの意義の理解など

本校の研究の歩みは，「教育内容についての研究」の歩みであったとも言える。それは，知的障害のある児童生徒を教育する特別支援学校においては，教育の根本が「何を」，「どのように」指導するかという点に求められるからである。本研究においても，**「つながる力」とは具体的にどのような内容か**，また，児童生徒が**「つながる力」を身に付けていくためにはどのような指導計画，指導体制，指導方法があるのか**を明らかにしていきたい。

３　研究目的

本校において指導すべき「つながる力」の内容を明らかにするとともに，児童生徒がそれらを身に付けられるようにするための効果的な授業作りの在り方について授業実践を通して明らかにする。

４　研究内容及び方法

（１）「つながる力」に関する内容の明確化

・「つながる力」の段階表の作成
・「つながる力」に関する指導内容の整理，見直し
・年間指導計画等の整理，見直し

（２）「つながる力」に着目した授業作り

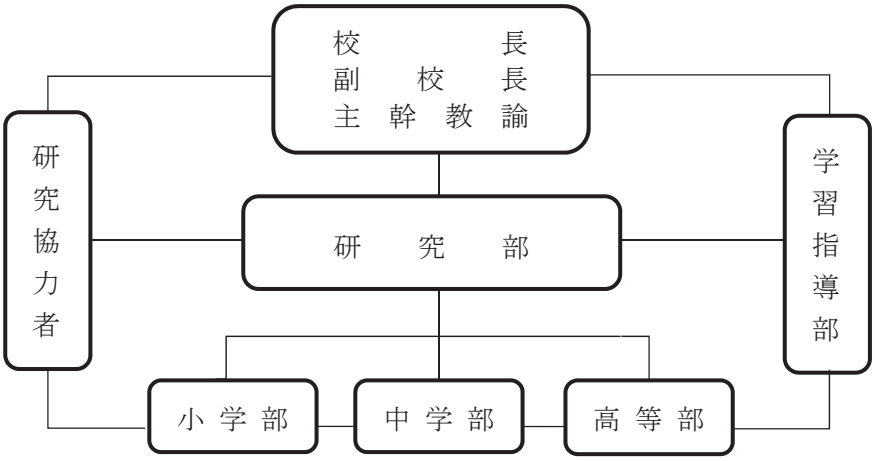
・各部における授業実践を基にした，PDCA サイクルによる授業作り
・授業評価の蓄積及び児童生徒の変容による授業作りの評価

５　研究計画

<table>
<tr><th></th><th>「つながる力」に関わる内容の明確化</th><th>「つながる力」に着目した授業作り</th></tr>
<tr><td>１年次
Ｈ27</td><td>・「豊かな社会生活」,「共に生きる力」,「つながる力」の検討
・「つながる力」の段階表一次案の作成
・校内研修</td><td>・「つながる力」に着目した授業の分析，課題の明確化
・授業作りの方法の検討
・授業作りの実践
・授業研究会の実施
・指導計画書様式の見直し</td></tr>
<tr><td>２年次
Ｈ28</td><td>・「つながる力」の段階表二次案の作成
・年間指導計画等の見直し
（授業評価のフィードバック）</td><td rowspan="2">・授業評価，授業改善のための具体的方策の検討（評価表様式の作成）
・授業作りの実践
・授業研究会の実施
・評価表を用いた授業評価，改善
・「つながる力」に関する児童生徒の実態把握，目指す姿の設定，方針･手立ての検討
・児童生徒の成長や変容の記録及び評価，考察
・授業作りのまとめ</td></tr>
<tr><td>３年次
Ｈ29</td><td>・「つながる力」の段階表最終案の作成
・年間指導計画等の見直し
（授業評価のフィードバック）
・「つながる力」を育てるために有効な学習内容，指導方法等のまとめ</td></tr>
</table>

６　研究組織（３年次）

（１）構成



（２）各部研究主題及び研究協力者

小学部	研究主題	ここちよく相手と関わろうとする力を育む授業作り
	研究協力者	宇都宮大学准教授（教育学部）　石川　由美子　氏 宇都宮大学准教授（教育学研究科）　司城　紀代美　氏
中学部	研究主題	互いを認めて仲間と関わり合う力を育む授業作り
	研究協力者	宇都宮大学准教授（教育学部）　岡澤　慎一　氏
高等部	研究主題	自信をもって，社会に踏み出す力を育む授業作り
	研究協力者	宇都宮大学教授（教育学部）　池本　喜代正　氏

7　研究経過

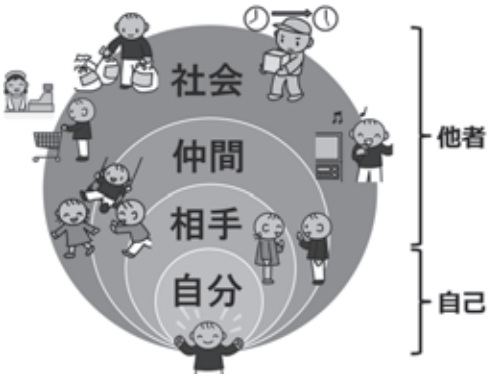
（1）「つながる力」に関する内容の明確化

ア「つながる力」とは何か

・意欲的に他者に働きかけようとする力
・肯定的に自己を理解し，人間関係を円滑にするために必要な力

「つながる力」については，前研究において上記のような定義付けをしているが，この「つながる力」に着目した本研究を進めるにあたり，本校の児童生徒にどのような「つながる力」を身に付けさせたいのかという点から再度検討し，具体的な内容の明確化を図った。

人間関係，すなわち自分以外の他者との関わりは，[**自分**]と[**相手**]という一対一の関係から始まり，複数または集団へと広がる過程で[**仲間**]との関わりが生まれ，一番大きな単位の他者としての[**社会**]へと広がっていく(図Ⅰ－１)。



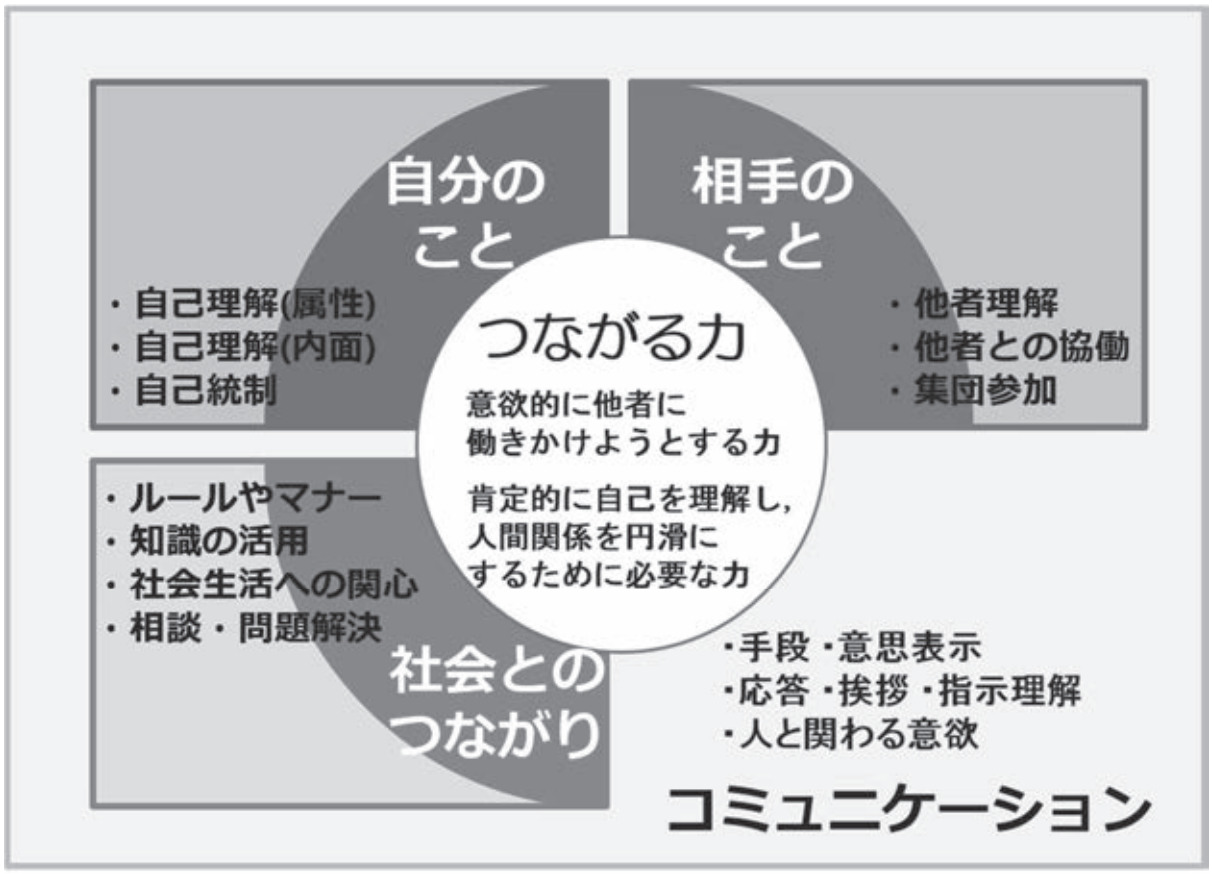
図Ⅰ－1　人間関係の広がり

「つながる力」の定義にある，**意欲的に他者に働きかけようとする力とは，これらの人間関係をより広げていく推進力となり得るもの**である。その広がりに伴って，次第に集団の中の自分の位置付けが意識されるようになり，**[自分＝自己]の育ちが，他者である[相手]，[仲間]，[社会]との関係性を深めていく**ということに注目した。そこで，**肯定的に自己を理解することや社会の一員として生活するための知識や行動を身に付けることは，人間関係を円滑にするための基盤**として必要不可欠なものと考えた。

以上のような捉えを踏まえ，「つながる力」は，**[自分のこと]，[相手のこと]，[社会とのつながり]，[コミュニケーション]**の四つの区分と各区分に含まれる全 16 の要素で構成した(表Ⅰ－２，図Ⅰ－２)。

表Ⅰ－2「つながる力」の構成（4区分 16 要素）

区　分	要　　素	ね　　ら　　い
自分のこと	自己理解(属性) 自己理解(内面) 自己統制	肯定的に自己を理解し，感情や行動をコントロールすること
相手のこと	他者理解 他者との協働 集団参加	他者を受け入れ，協力・協働して主体的に参加すること
社会との つながり	ルールやマナー 知識の活用 社会生活への関心 相談･問題解決	社会の中で，円滑な人間関係を築く基盤を形成すること
コミュニ ケーション	手段　意思表示 応答　挨拶 指示理解 人と関わる意欲	相互にやり取りをしながら，意欲的に他者と関わること



図Ⅰ－2「つながる力」の構成図

「つながる力」に迫るために４区分 16 要素で整理をしたが，これらの区分や要素はそれぞれが独立するものではなく，互いに関連し合うものであると捉えた。例えば，**【自己理解】**とは，閉じられた自己の中でのみ理解が進むのではなく，**他者との関わりを通して自己への気付きが促され，理解が深まっていく**。そして，**自己の育ちが更なる他者への気付きを促し，【他者理解】が深まるとともに，【他者との協働】や【集団参加】へとつながっていく**のである。また，**[コミュニケーション]の区分は，他の三つの区分に含まれる要素をつなぎ，支えるものであり，そのツールとしての機能もある**と捉えた。

このように，「つながる力」とは，様々な区分や要素が絡み合い，複雑に作用し合って育っていくという点にも留意して実践を進めた。

イ　「つながる力」の段階表

４区分 16 項目に整理した「つながる力」について，小学部入学から高等部卒業までの 12 年間で指導すべき内容を精選し，６段階で表した，「つながる力」の段階表を作成した(13 ページ，資料１以下，段階表)。

この段階表は，**「つながる力」を身に付けていく成長の道筋を示すモデル**であり，授業作りを進めるにあたっては，**具体的な指導内容を設定するための指標**となるものである。また，**児童生徒の実態把握のための資料**としても活用することも意図して作成した。段階については，特別支援学校学習指導要領解説を参考にして６段階に区分した上で，最終的に目指す姿を設定し，発達や成長をスモールステップで示した。

作成の過程では，様々な意見交換がなされ，試行錯誤を重ねながら練り上げられていった。教員によって捉え方は様々であり，意見のすり合わせには多くの時間を要したが，この過程そのものが，「つながる力」についての理解を深めることとなり，その後の授業作りに大いに役立った。

また，段階表の作成と授業作りを同時並行的に進めてきたため，授業作りの過程において生まれた様々な気付きや課題等も段階表の内容に反映することができた。特に，授業作りにおいて，教員は「あれもできるようになってほしい」，「こんな力も必要なはずだ」と多くを盛り込もうとしてしまいがちであったが，**学校生活の限られた時間の中では，何を教えるかという点を明確にし，ねらいを絞って指導していく必要がある**ことに気付き，段階表の内容もより精選することとした。段階表をできる限りシンプルなものにすることを追究していくことこそが，「つながる力」の内容を明確にしていくことに他ならないということを念頭に置いて，修正を加えながら整理し，作成した。

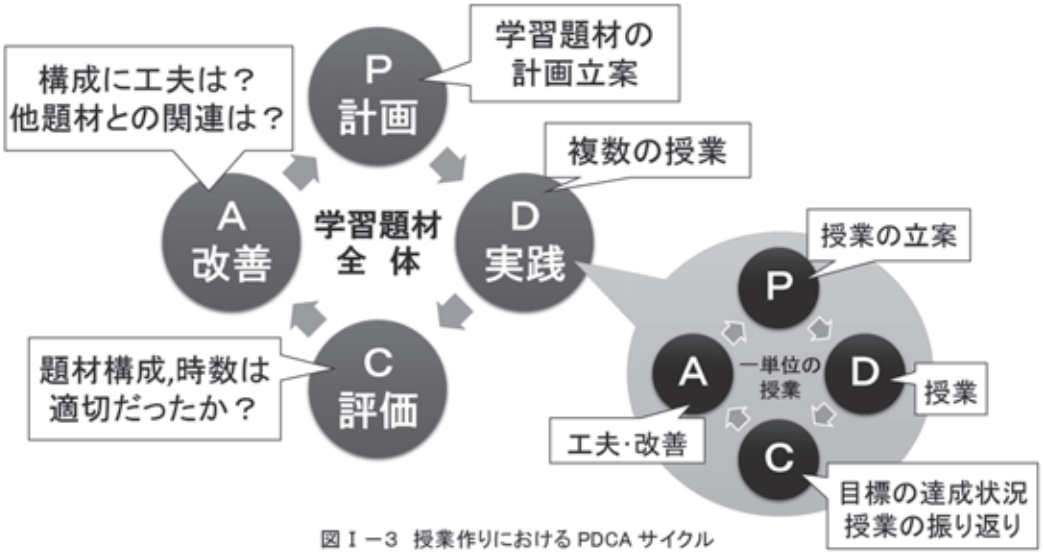
表Ⅰ－3 各段階の設定

第１段階	教師の直接的な援助を受けながら，様々な体験をすることで，基本的な行動の一つ一つを着実に身に付けていく段階
第２段階	教師からの言葉かけによる援助や教師の動作や動きの模倣を通して，基本的な行動を身に付けていく段階
第３段階	主体的に活動に取り組み，社会生活につながる行動を身に付けていく段階
第４段階	社会生活や将来の職業生活の基礎となる力を身に付けていく段階
第５段階	卒業後の家庭生活・社会生活・職業生活などを考慮した基礎的な内容を学習し，力を伸ばしていく段階
第６段階	卒業後の家庭生活・社会生活・職業生活などを考慮した発展的内容を学習し，それらを活かして生活していく段階

（２）「つながる力」に着目した授業作り

ア　PDCA サイクルでの授業作り

「つながる力」を育むという視点で授業を見直し，「何を」，「どう構成して」，「どのような手立てで」教えるかについて授業作りを通して明らかにするために，計画→授業実践→授業評価→改善といった授業作りの手順，すなわち，PDCA サイクル(図Ⅰ－３)を一つ一つ丁寧に追うことを重視した。一単位時間の授業における目標設定やそれを達成するための具体的な指導方法（指導のスキルやテクニック，障害に応じた配慮など）の在り方だけではなく，複数の授業によって構成される学習題材の在り方をも含めた大きな枠組みで取り組むことで，最終的には教育課程の在り方に迫ることを目指した。



図Ⅰ－3 授業作りにおける PDCA サイクル

また，このサイクルを効果的に運用するために，指導計画書の様式を見直したり，評価表を新たに作成したりして，授業作りの環境を整えた(表Ⅰ－４)。

表Ⅰ－4 授業作りに関連する資料

資　料	目的・用途	資料No.
題材計画	学習題材全体に対する，「つながる力」を育む視点の位置付け	資料２
学習指導略案	一単位時間の授業における「つながる力」を育む視点の明確化	資料３
授業評価表	「つながる力」を育む観点での授業評価及び改善の方向付け	資料４
児童生徒評価表Ⅰ	「つながる力」に関する実態把握及び指導方針･手立ての設定	資料５
児童生徒評価表Ⅱ	「つながる力」を発揮する姿の評価及び考察	資料５

イ　授業作りの基本方針

授業作りを進めるにあたっては，前研究において得られた「大切にしたい授業作りの視点」を本研究においても取り入れた。

【大切にしたい授業作りの視点】
①　児童生徒の内面に着目すること
②　「分かる･できる･考える」授業を展開すること
③　自分自身の学びや成長を実感できること

行動には必ず心理的な背景がある。**行動を支えている思いや願い，意欲といった内面に着目し，それらをより豊かに育てていくことで，目指すべき姿を引き出すことができる**と考えた。学びの結果として表れる行動そのものだけでなく，学びの過程や心情の変化といった内面の変容やその変容が見られた理由や背景をも含めて，児童生徒一人一人の姿を様々な面から丁寧に捉えていくことを，教員の基本的な姿勢とした。

その上で，児童生徒の内面を育てていくためには，児童生徒一人一人にとって**「分かる･できる」授業が展開されることが重要**であると考えた。「分かった･できた」経験が十分に積み上げられていくと，「分からない･できない」場面に遭遇した際に，「どうすればよいだろう，こうすればできるかもしれない，よしやってみよう！」と考えて行動することへとつながっていく。**「考える」，「思考する」，「課題を解決する」といった経験も，児童生徒の内面を育てるための重要なポイント**と捉えた。

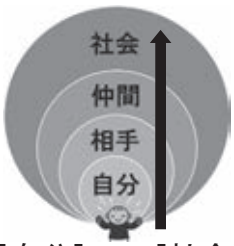
また，頑張っている自分，成長している自分を実感できることは，自分を適切に評価することであり，**自信や自己肯定感，自己有用感を高めることにつながる**ということが，前研究において明らかとなった。加えて，**自分自身の頑張ったという実感とそれに対する他者からの承認･称賛が合致することで，自信が意欲となり，目指すべき姿へとつながっていく**と考えた。これらの基本方針を踏まえて，各学部段階の「つながる力」を育てる授業作りを積み重ねることとした。

ウ　授業作りの実際

（ア）１・２年次の取組

授業作りを進めるにあたって，まずは，各学部段階における「つながる力」の捉えを明確にすることから始めた。その上で，人間関係の広がり（５ページ，図Ｉ－１）を基に，各学部段階で必要と思われる「他者」との関わりの在り方に焦点を当てた研究主題を設定した。

１・２年次は対象をいくつかの学習題材に絞り，授業そのものの成果を上げることに加えて，授業作りのサイクルを一つ一つ丁寧に追うことを重視した。１年次は，「Ｐ：計画」の部分に力を入れて取り組み，「つながる力」の内容を授業にどのように位置付けるかについて題材計画や授業計画の立案を通して検討した。２年次は，「Ｃ：評価」及び「Ａ：改善」に力を入れ，授業評価表を用いて分析的に授業を評価し，確実な改善を積み重ねてきた。

	小　学　部	中　学　部	高　等　部
他者との関わりの段階	 ［自分］　［相手］ 関わり合いの基礎を身に付ける段階	 ［自分］　［仲間］ 集団の中で学び合う段階	 ［自分］　［社会］ 社会参加のための力を身に付ける段階
研究主題	**ここちよく相手と関わろうとする力を育む授業作り**	**互いを認めて仲間と関わり合う力を育む授業作り**	**自信をもって，社会に踏み出す力を育む授業作り**
主な内容（１年次）	「相手のこと」に着目した題材を新設し，遊びを通して相手への関心を育て，一緒に活動する意欲を育む実践 〈なかま〉 みんなであそぼう	肯定的な自己の捉えから，相手の良さの気付きへと導くことを目指した，自己評価・他者評価の導入 〈生活学習〉 おもてなし会をしよう レクリエーションをしよう	実生活に直結する学習内容の整理・見直しを行い，知識を身に付け，社会と豊かに関わる力を育む実践 〈生活学習〉 くらし分野（主権）
主な内容（２年次）	一人一人の発達段階を的確に捉え，遊びを中心とした内容を通して友達や教師との関わりを広げ，深める取組 〈生活学習〉 友達と遊ぼう，楽しく遊ぼう，仲良く遊ぼう	〈作業〉の授業に「つながる力」の視点を取り入れ，互いの良さを認め合い，高め合う関係を育む実践 〈作業〉 互いの班を知ろう・体験しよう	実生活に直結する内容を「くらし分野」として整理し，知識を身に付け，社会と豊かに関わる力を育む実践 〈生活学習〉 くらし分野（金融）

（イ）３年次の取組

３年次は，１・２年次の成果や課題，前述した「大切にしたい授業作りの視点」を踏まえて，「授業作りの方針」を各学部で設定し，教員一人一人がテーマを掲げて授業作りを積み重ねてきた。それぞれの方針や実践の詳細については各ページを参照していただきたい。

小　学　部　　授業作りの方針　（P22～参照）

①相手と関わろうとする意欲を高める授業作り
②相手と関わるための基本的な態度を養う授業作り
③教育環境を三つの視点で捉えた授業作り

No.	実　践　テ　ー　マ	関連する授業	対　象	ページ
1	友達と一緒に楽しめる体育の授業作り	体　　育	１・２年	P24
2	教員や友達との関わりを感じられる授業作り	音　　楽	１・２年	P26
3	友達や教員との活動を楽しめる授業作り ～生活学習の「遊び」を中心に～	生活学習	３・４年	P28
4	鑑賞活動を通して友達を感じ， 受け入れることのできる授業作り	音　　楽	３・４年	P30
5	みんなと一緒に表現することを楽しめる授業作り	音　　楽	５・６年	P32
6	集団での遊びに進んで参加できる姿を目指した授業作り	生活学習	５・６年	P34

中　学　部　　授業作りの方針　（P42～参照）

①自分の良さや仲間の良さに気付くことができる授業
②仲間から認められることに喜びを感じられる授業
③意欲をもって仲間と学び合うことができる授業

No.	実　践　テ　ー　マ	関連する授業	対　象	ページ
1	一人一人の気付きや思いを大切にし， 友達と学び合う態度を育む授業作り	生活学習	１年	P44
2	二人組での制作活動を通して 友達との関わりを深められる授業	生活学習	１年	P46
3	自分の役割を果たしながら仲間を意識できる授業作り	生活学習	２年	P48
4	互いの良さを伝え合い，関わりを広げる授業作り	生活学習	３年	P50
5	「つながる力」の視点を加えた体育の授業 ～準備運動を中心に～	体　　育	１～３年	P52
6	仲間と一緒につくることを楽しむ音楽の授業	音　　楽	１～３年	P54

高　等　部　　授業作りの方針				(P62～参照)
①実際の生活場面で活用できるような現実度の高い知識や技能を扱うこと ②知識や技能を学ぶことの楽しさや意義を実感できるようにすること ③他者と協働したり，他者に意思表示をしたりする経験を積めるようにすること ④学習集団の編成を工夫すること				
No.	実　践　テ　ー　マ	関連する授業	対　象	ページ
1	働くこととお金のつながりに 興味･関心をもって活動する力を育む授業作り	生活学習 （くらし/金融）	１～３年 Bグループ	P64
2	金銭を使うことに興味･関心をもち， 計画的に使う力を育む授業作り	生活学習 （くらし/金融）	１･２年 Aグループ	P66
3	金銭の使い方に考えをもち， 計画的にお金を使う力を育む授業作り	生活学習 （くらし/金融）	３　年 Aグループ	P68
4	情報機器の使用に関心をもち， 生活の中で活用する力を育む授業作り	生活学習 （くらし/情報）	１～３年 Aグループ	P70
5	話し合い活動を通して 「適切な行動」を考える力を育む授業作り	生活学習 （いきる/性教育）	１～３年 Aグループ	P72
6	写真を活用し，行事に主体的に参加する態度を育む授業作り	生活学習 （行　事）	３　年	P74

写真Ｉ－１　ワークショップ型の授業検討会

それぞれの授業は相互に直接参観もしくは記録ビデオによる観察を行い，授業評価を実施した。授業を「つながる力」を育むという観点で評価し，確実に改善につなげるため，そのツールとして授業評価表（16ページ，資料４）を活用した。

評価の観点は，「学習内容」，「指導・支援の手立て」，「学習集団全体の様子」，「個人の様子」の４点を設定し，それぞれの観点における具体的な評価項目や，毎時の授業で評価するか，複数の授業によって構成される学習題材全体を評価するかといった評価対象や評価時期については，各学部の授業作りのサイクルに合わせて柔軟に活用できることを重視し，各学部に委ねた。

授業検討会では，集計された授業評価表を学部内の教員で共有し，特に改善策については意見やアイデアを出し合うなどして検討を重ねた。さらに，改善した授業についても同様にして評価･改善を行い，改善結果の確認や更なる改善点の検討を行うなどして，授業作りのPDCAサイクルを確実に回し，より良い授業を目指した。

このようにして評価・改善を積み重ねた結果として，「つながる力」を育てるために有効な学習内容，学習構成，具体的な手立て等の共通項を見いだすことができた。その詳細については，各章のまとめ（Ｐ36～，Ｐ56～，Ｐ76～）及びＶ章（Ｐ79～）を参照いただきたい。

研究の全体構造図

豊かな社会生活

「一人一人が，自分の持てる力を伸ばし，更にその力を十分に発揮することにより，主体的に家庭生活・地域生活及び社会生活に参加し，活き活きと生活できること」

学校教育目標

子ども一人一人の発達・特性及びニーズに応じた教育を行い，心身の調和的発達を図ることにより，一人一人が主体的に豊かな社会生活を送ることができるようにする。

共に生きる力を育む教育の実践

～「つながる力」に着目した授業作り～

本校において指導すべき「つながる力」の内容を明らかにするとともに，児童生徒がそれらを身に付けられるようにするための効果的な授業作りの在り方について授業実践を通して明らかにする。

主題設定の理由

《社会的動向》
- 共生社会の形成
- インクルーシブ教育システムの構築
- 多様な学びの場としての特別支援学校の役割

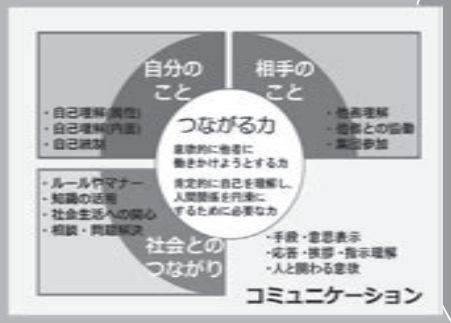
《これまでの研究》
- ICF を活用した個別の教育的ニーズに応じた指導支援の充実
- キャリア教育を通して育てたい「三つの力」の設定
  （土台となる力・**つながる力**・前に踏み出す力）

【小学部研究主題】 P19～
ここちよく相手と関わろうとする力を育む授業作り

【中学部研究主題】 P39～
互いを認めて仲間と関わり合う力を育む授業作り

【高等部研究主題】 P59～
自信をもって，社会に踏み出す力を育む授業作り

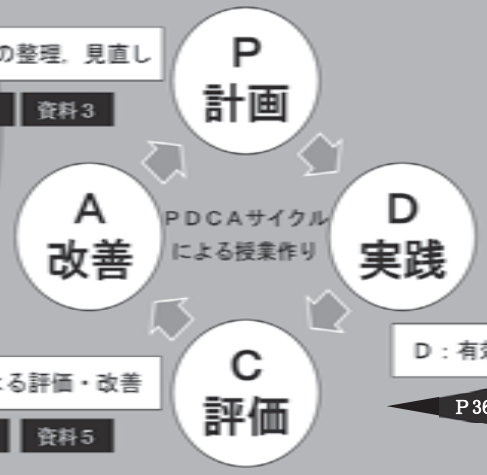
「つながる力」に関する内容の明確化



「つながる力」の構成 P5

「つながる力」の段階表の作成 P6 資料1

「つながる力」に着目した授業作り



P：指導計画・授業案の整理，見直し
P8 資料2 資料3

C・A：授業評価表による評価・改善
P9 資料4 資料5

D：有効な指導・支援の見いだし
P36 P56 P76 P79

前研究で得られた「大切にしたい授業作りの視点」 P8

- ○児童生徒の内面に着目すること
- ○「分かる・できる・考える」授業を展開すること
- ○自分自身の学びや成長を実感できること

資　料　1

「つながる力」の段階表

区分		要素		1	2	3	4	5	6	目指す将来の姿
				教師の直接的な援助を受けながら，様々な体験をすることで，基本的な行動の一つ一つを着実に身に付けていく段階	教師からの言葉かけによる援助や，教師の動作や動きの模倣を通して，基本的な行動を身に付けていく段階	主体的に活動に取り組み，社会生活につながる行動を身に付けていく段階	社会生活や将来の職業生活の基礎となる力を身に付けていく段階	卒業後の家庭生活・社会生活・職業生活などを考慮した基礎的な内容を学習し，力を伸ばしていく段階	卒業後の家庭生活・社会生活・職業生活などを考慮した発展的な内容を学習し，それらを活かして生活していく段階	
つながる力	自分のこと A	Ⅰ	自己理解〈属性〉	自分の持ち物が分かる	自分の性別や学年が分かる	自分の所属する集団が分かる（学部，学級，学習グループ等）	家庭生活における属性が分かる（住まい，家族，住所・電話番号）	社会生活における属性が分かる（所属等）	自分の属性について相手に伝える	自分の属性についてよく理解し，必要に応じて相手に伝える
		Ⅱ	自己理解〈内面〉	自分のやりたいことが分かる	自分の好きなことが分かる	自分の得意なことや苦手なことが分かる	自分の良さが分かる	自分の長所と短所が分かる	自分の課題を肯定的に捉え，対処の仕方を考えて行動する	自分の特性が分かり，前向きに対処しながら生活する
		Ⅲ	自己統制	自分の快・不快の感情に気付き，表出する	不快な感情を大人とのやり取りで解消する	不快な感情を我慢する	自分の感情に折り合いをつけて行動する	自分の感情のコントロール方法が分かる	感情をコントロールして行動する	自分なりの方法で，感情や行動をコントロールをしながら生活する
	相手のこと B	Ⅰ	他者理解	他者の存在に関心をもつ	他者と感情を共有する	様子や表情から，相手の気持ちに気付く	他者の良さや頑張りを認める	自分と他者の様々な違いに気付く	他者の気持ちを推し量って行動する	自分と他者との違いを認め，他者の気持ちを尊重しながら生活する
		Ⅱ	他者との協働	大人と一緒に取り組む	大人を介して，友達と一緒に取り組む	友達と一緒に取り組む	仲間で協力して取り組む	目的達成のために分担された仕事に取り組む	仲間と話し合いながら，分担・協力して取り組む	目標や目的を共有し，分担，協力して取り組む
		Ⅲ	集団参加	他者と場を共有する	集団での活動を楽しむ	集団での活動に積極的に参加する	集団の中での自分の役割が分かる	集団の中での自分の役割を率先して果たす	自分の立場や役割を理解して，集団に参加する	自分の立場や役割を理解して，集団の中で主体的に活動する
	社会とのつながり C	Ⅰ	ルールやマナー	大人との約束を守って活動する	簡単なルールを理解して活動する	集団の決まりの中で生活する	生活上のルールがあることが分かり，それを守ろうとする	生活上のマナーがあることが分かり，それを守ろうとする	ルールやマナーを守ることの意味や必要性を理解し，行動する	ルールやマナーを守って生活し，周囲の人と良い関係を築く
		Ⅱ	知識の活用	様々なことに興味をもって取り組む	経験したことのある活動に積極的に取り組む	慣れない活動に対しても，経験を活かして挑戦する	経験したことや学んだことを活かして生活する	学んだことを別の場面でも活かして生活する	学んだことを身に付けて生活する	学んだことを自分の力として身に付け，それを活かして，生活をより良くしようとする
		Ⅲ	社会生活への関心	身の回りのできごとに関心をもつ	校内や校外の様子に関心をもつ	身近な店舗や公共施設等を利用し，そのはたらきに関心をもつ	身の回りの様々な情報に関心をもつ	社会の事象に関心をもち，見聞きしたことを話す	社会の事象に関心をもち，自分なりの意見をもつ	社会の事象に関心をもち，自分の意見をもって参加する
		Ⅳ	相談問題解決	大人からの手助けを受け入れる	身近な大人に手助けを求める	分からないことを大人に尋ねる	困っていることを相手に伝え，一緒に解決する	困ったときの相談先や連絡先が分かる	問題を解決するための様々な方法（報告・連絡・相談）が分かる	目的に合った方法を選択して問題を解決する
	コミュニケーション D	Ⅰ	手段	自分なりのコミュニケーションの手段をもつ	相手に伝わるコミュニケーション手段をもつ	いくつかの手段を用いて相手と関わる	必要に応じて情報機器を使って，相手と関わる	状況に応じた手段を選択して，相手と関わる	情報機器の利便性・危険性を理解して活用する	情報機器を状況に応じて適切に活用して相手と関わる
		Ⅱ	意思表示	快・不快の感情を表す	要求や拒否などの意思を伝える	自分の意思を伝える	自分の意思を相手に分かるように伝える	自分の意見を整理して相手に伝える	相手の意見を聞きながら，自分の意見を説明する	相手の意見を尊重しながら，自分の意見を正しく伝える
		Ⅲ	応答	呼びかけに応じる	名前を呼ばれたら返事をする	相手に伝わるように返事をする	簡単な質問に答える	質問に対して適切な言葉で答える	状況に応じた言葉や態度で応答する	状況及び自分と相手の関係性に応じて，適切な言葉や態度で応答する
		Ⅳ	挨拶	挨拶に応じる	言葉やしぐさで挨拶をする	その場に合った，簡単な日常の挨拶をする	自分から挨拶をする	状況に応じた挨拶を考えて行う	自分と相手の関係性に応じた挨拶を考えて行う	状況及び自分と相手の関係性に応じて，適切な言葉や態度で挨拶する
		Ⅴ	指示理解	身近な人からの発信に関心をもつ	身近な人からの指示の大まかな内容が分かる	いくつかの指示を理解して行動する	全体への指示を理解して行動する	指示の内容を正確に理解して行動する	指示の内容を理解し，自分で考えて行動する	指示の内容を理解したうえで自分で判断して行動する
		Ⅵ	人と関わる意欲	身近な人に関心をもつ	身近な人との関わりを楽しむ	自分から相手に関わろうとする	集団の中で，様々な人と意欲的に関わる	様々な集団の中で，様々な人と意欲的に関わろうとする	社会の中で様々な人と意欲的に関わろうとする	社会の中で様々な人と意欲的に関わり合いながら生活する

資　料　2

題　材　計　画　（例）

支援領域名：生活支援	学習の形態名：生活学習（くらし・情報）	
題材名：パソコンや携帯電話を使おう	総時数：４時間	高等部１～３年

題材設定の理由	近年，情報化が急激に進み，生徒たちもパソコンや携帯電話等の情報機器を使う機会が増えてきている。一方で，使用のマナーやインターネット上のルールを知らないが故に，トラブルに巻き込まれてしまったり，トラブルを引き起こしてしまったりするケースも少なからず起きている。これらの情報機器は，正しく活用することができれば，日常生活の利便性が高まるだけでなく，生活を彩るための選択肢の一つとなり得る。ルールやマナーを身に付け，情報機器を正しく活用する力を育てることは，今後更に高度化する情報社会の中で，より良く生きるために必要と考える。 指導にあたっては，聞き取り調査等により生徒の実態把握を十分にした上で，指導内容を精選し，必要に応じてグループ別学習を取り入れるなどの工夫をする。また，実際に情報機器を使った内容を取り入れることで，体験的に学べるようにするとともに，学んだことを実生活で活かそうとする態度を育てたい。さらに，ルールやマナーについては，生徒同士の意見交換を通して，なぜ守らなければならないかを考え，自分で判断する力も養いたい。
題材目標	（１）パソコンや携帯電話に関心をもち，利用しようとすることができる。 （２）パソコンや携帯電話の使い方が分かり，実際に活用することができる。 （３）パソコンや携帯電話を活用するにあたり，ルールやマナーがあることが分かり，それらを守って正しく活用することができる。

	学習活動	指導のポイント	教材教具等
1 2	【パソコンや携帯電話を使う時のルールやマナーについて考えよう】 ・○×クイズ ・話し合い活動	・実生活で起こる様々な場面を取り上げたクイズを通して，正しい使い方や危険性について具体的なイメージをもって考えられるようにする。 ●友達の意見を聞き，自分の考えを確かめたり，深めたりすることができるようにする。 ●ルールやマナーの理解とともに，「相手や周囲の人の気持ちを考える」，「困ったときは相談する」をキーワードとしてより具体的な対処方法についても考えられるようにする。	・事前調査の結果 ・自分の携帯電話 ・情報機器 （携帯電話，スマートフォン，タブレットPC，パソコン等） ・ゲストティーチャーの招聘，講話 ・ワークシート ・スライド
3 4	【パソコンや携帯電話を使ってみよう】 ・実際に情報機器を使って，課題を解決する。 〈課題の例〉 「必要な情報を得る方法」，「検索の仕方」，「印刷の仕方」，「情報の整理と活用，取捨選択」，「写真や動画の保存と整理の仕方」，「作品作り」等	・実際の情報機器を使用し，より具体的な活用方法を学べるようにする。 ・生徒一人一人の利用状況や理解度に応じたグループ学習を取り入れ，それぞれに適度な課題を設定する。 ●課題解決を通して，友達と協力して取り組む態度を育てる。	・情報機器 （携帯電話，スマートフォン，タブレットPC，パソコン，電子黒板，プリンター，デジタルカメラ等） ・使用ソフト及びアプリケーション （ワード，エクセル，メール，カメラ，メモ，電卓，動画，音楽，ゲーム，LINE 等）

●：「つながる力」との関連

資　料　3

学習指導略案（例）

日時：平成29年〇月△日　0:00～0:00　場所：◇◇室　指導者：〇〇〇〇（T1）　〇〇〇〇（T2）

学習の形態	生活学習〈くらし分野/情報〉	学習グループ	高等部１～３年Ａグループ
題材	パソコンや携帯電話を使おう		〈総時数４時間〉
本時	パソコンや携帯電話のルールやマナーについて考えよう		〈２／４時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・パソコンや携帯電話を使う際のルールやマナーを守る意味を理解して使おうとすることができる。 ・パソコンや携帯電話の使用について自分なりの意見をもつことができる。	◆自分の意見をもち，友達や教師に伝える姿 意思表示 ◆友達の意見を聞き，自分の意見との違いに気付く姿 他者理解 ◆話し合いを通して，自分の考えをより深めていく姿 ルールやマナー

学習活動の展開	〇指導上の留意点　●「つながる力」との関連
1　挨拶 2　学習内容の確認	
3　〇×クイズ ・スライドを見て，パソコンや携帯電話についてのクイズに答える。 ・自分の意見を発表したり，友達の意見を聞いたりする。	〇ワークシートとスライドを効果的に活用し，興味・関心や学習意欲を高める。 ●クイズの答え合わせや友達や教員との対話をとおして，ルールやマナーについての理解を深められるようにする。 ルールやマナー ●発表の場面では，温かい雰囲気作りに努め，自分の意見が尊重されることの心地よさを十分に味わえるようにする。また，友達の意見を肯定的に受け止めることができるよう促す。 意思表示　他者理解
4　まとめ，振り返り ・クイズをとおして学んだことをワークシートに書いてまとめる。 【押さえたい内容】 ・決まりを守る ・相手の気持ちを考える ・ネットトラブルに気をつける ・分からないときは相談する ・本時の感想を発表する。	〇自分でまとめることが難しい生徒には，スライドを適宜呈示しながら，教師と一緒に内容を確認していけるようにする。 〇押さえたい内容についてひとつずつ確認し，更なる定着を図るとともに，実生活で活かしていけるよう促す。 〇本時で学んだことや感想を全員で共有できるようにし，授業以外の場面でも生徒同士が話題にできるようにする。
5　次時について 6　挨拶	

資　料　4

「つながる力」を育む授業評価表(記入例)

評価日　平成 29 年〇月△日　**評価者**　XXXX

授業日	平成 29 年〇月△日	対象	高等部1～3年　情報Aグループ
題目	「パソコンや携帯電話の ルールやマナーについて考えよう」	題材	「パソコンや携帯電話を使おう」

つながる力	区分／要素	目指す姿
	コミュニケーション／意思表示	・自分の意見をもち，友達や教師に伝える姿
	相手のこと／他者理解	・友達の意見を聞き，自分の意見との違いに気付く姿
	社会とのつながり／ルールやマナー	・話し合いを通して，自分の考えをより深めていく姿

	評　　価	改　善　策　等
授業について	【学習内容について】 ◆〇×クイズは，考えを深めるという点で適切だったか？ ・〇×クイズは，分かりやすく，取り組みやすい活動であった。〇×を問う場面では，その正誤よりも，友達がどちらであるか，自分と同じ答えか，違う答えかについて非常に興味をもっている様子が見られた。 ・〇×クイズが盛り上がり，まとめの時間が十分にとれなかった。	題材設定，題材目標，時数，本時の目標，学習活動の展開…等 ・ゲーム性のある活動は，生徒の意欲喚起につながる。今回は，楽しみながら学ぶ良さだけでなく，自然に他者を意識する場面を生み出すことができたという点がよかった。 ・本時は2/4時間目であった。2時間扱いにできるとよいが，ゲームの内容を精選することも必要だろう。
	【指導・支援の手立てについて】 ◆自分の意見をもつ，相手に伝えるための手立て ・自分が「なぜ」そう思ったか，友達の意見を「どう」思うか，という発問に対し，正しく意味をとれなかった生徒が少なからずいた。 ・生徒の机をコの字型に配置した。互いの顔が見えてよいかと思われたが，生徒によっては目を伏せるなど居心地悪そうにする様子もあった。生徒間の関係性や相性等も考慮できるとさらによかったのではないか。 ・板書については，さらに検討が必要では…？	環境調整，学習集団全体に対する手立て…等 ・抽象的な発問をどのようにしていくか，検討が必要。考えるということのプロセスを丁寧に追うという経験を多く積むことができるとよいか？ ・安心感をもって接することのできる相手やモデルとなる相手との位置関係を考慮した座席配置を考えていく。 ・板書計画を見直す。(見やすさ，分かりやすさ等)
児童生徒の姿	【学習集団全体】 ・非常に意欲的に，積極的に学習する様子が見られたが，意見を発表する生徒は限定されがちであった。	活動中の様子，意欲，集団の雰囲気，前後関係の特記事項…等 ・自分の意見を口頭で発表できることがすべてではなく，それぞれの手段で表明できることを大切にしたい。また，自分の考えをまとめる力も必要であり，そのプロセスをどのように教えるか必要な支援について検討する。
	【個人】 ・生徒Ａは，他の生徒の意見を聞いて，自分の意見が少しずつ変化していった。普段は，頑なに意思を押し通そうとする姿がよく見られる生徒Ａだが，話し合いを通し，自分と向き合い，友達と向き合えた瞬間だった。	一人一人の様子，発言，個人のねらいに対する手立て…等 ・話し合い活動を設定したことは生徒Ａに有効だった。今回は，生徒Ａの意見が他の意見と大きく違っていたこともあり，その違いに自ずと気付くことができていたが，違いに気付くための手立てをよく練っておくとよかった。

資　料　5

「つながる力」に関する児童生徒評価表Ⅰ（記入例）

学部・学年	○学部△年	作成日	平成 29 年□月×日

氏名	実　態	ねがい・期待する姿（関連する項目） 方針・手立て
児童A	・行動は活発で積極的 ・自分本位な判断で行動しがち ・発語があり，指示理解力あり ・相手の様子を見て考える力を付け，場に合った言動ができることにつなげたい	・教師の指さしや視線等を見て，何かを自分に伝えようとしていることや，何を伝えようとしているか分かるようになってほしい。 （B－Ⅰ他者の様子や表情を見て，相手の気持ちに気付く）
		・型はめ・絵合わせ学習等において，自分のもつ選択肢の中から，相手が要求または指示するものに合わせる学習を積み重ね，相手の意図を意識する習慣を形成する。 ・直接指示を極力減らし，促しやきっかけとなる質問等を工夫するとともに指さしや表情，視線等ですべき行動等に気付けるようにする。
生徒B	・自己肯定感が低く，大人に頼る傾向が強い。 ・本来もっている力を十分に発揮できないままでいる。	自分の得意なことが分かるようになってほしい。 （A－Ⅱ自分の得意なことが分かる）
		・大人に頼らず，自分の力で学習に取り組めるような場面を意図的に設定したり，環境を工夫したりすることで，できたという成功体験を増やしていく。 ・係活動など一人で取り組めたときには，十分に称賛する。

「つながる力」に関する児童生徒評価表Ⅱ（記入例）

学部・学年	○学部△年	評価日	平成 29 年◇月☆日

氏名	「つながる力」を発揮する姿	考　察
児童A	・教師が無言で指さした物と同じ物を選んで合わせることができた。 ・教師が視線を向けた物に気付いて，同じ物を選んで合わせることができた。 ・相手の表情や視線の動きを見ることが増えてきた。 ・教師の行動を見て，自分から模倣しようとすることが増えてきた。	・相手の様子に注目するようになってきたことは，相手に関心をもち始めた表れであり，相手の意図を考えることにつながるものと思われる ・相手の様子に意味があることに気付き，そこに注目すればよいことが理解できつつあると思われる。 ・相手のことを見て，考えることの定着・習慣化のためには，相手の様子を見て行動したことが正しかったということを本児自身が実感できる認め方・伝え方が適切であることが重要である。
生徒B	・係活動など，毎日取り組んでいる活動はほぼ一人でできるようになった。 ・難しい課題に対して，教師が手伝おうとすると，「自分でやる」といって挑戦するようになった。 ・得意なことを聞かれると，「○○ができます」と良い表情で答えるようになった。	・自分の力でできる経験を多くしてきたことによって，自信がついてきたと言えるだろう。 ・「得意なことが分かる」かどうかは，単純な認知の問題ではなく，日々の行動や感情と結びつきながら，相互に向上していくものであると感じた。

資　料　6

本校の教育課程について

本校では，教育内容を【発達・学習支援】・【生活支援】・【就労支援】の三つの支援領域で構成した独自の教育課程を編成している。次章からの各学部の実践では，学習の形態を〈　　〉で表記した。

学習の形態		学部	学　習　の　概　要
発達・学習支援	おはよう	小	登校時の覚醒水準の調整を図り，情緒の安定や注意の集中を促して，一日の学校生活を送る上での基盤づくりを援助する学習の形態。この指導では，主に「自立活動」の内容が中心となる。登校後すぐの時間帯に揺れ遊具や固定遊具等を効果的に活用した活動を中心に行う。
	うごき	小	基礎的な感覚・運動機能を高め，知覚や認知力の向上を図る学習の形態。この指導では，「自立活動」の「身体の動き」の区分にある項目を中心に，他の区分の項目と関連付けながら個々の児童の指導目標や指導内容を設定する。集団での活動を特設して行うことにより，対人関係・コミュニケーション・見通す認知等の向上を図ることも併せてねらいとしている。
	体育	小 中 高	教科「保健体育」の内容の内，「体育」の内容を中心に据え，健康の保持増進の基盤となる体力の向上を図ることに重点を置く。この指導では，現在及び将来の生活における運動習慣を身に付けるために必要な興味関心，態度の育成を目指している。 ※「保健」の内容（性に関する指導等）については，「生活学習」に設定。
	チャレンジ	小 中 高	日常生活で用いられる言葉や数量等に関する事柄や個別の発達課題に応じた事柄を学習する学習の形態。この指導では，「国語」や「算数・数学」の基礎的・基本的な内容とともに，「自立活動」の内容を含めて設定する。個々の児童生徒の教育的ニーズに応じた指導を通して，実生活に活かせる力を身に付けられるようにする。
生活支援	日常生活学習	小 中 高	日常生活に必要な基本的生活習慣の確立を図り，落ち着いて生活する態度を育てるとともに，意欲的に集団生活に参加しようとする態度を育てていく学習の形態。この指導では，「日常生活の指導」の主旨に児童生徒の主体的な学習活動を重視するという観点を加えて「日常生活学習」としている。
	生活学習	小 中 高	実生活に関わる課題をテーマとして，体験的な活動を通して，家庭生活や社会生活に必要な知識・技能についての習得を図るとともに，実践的な態度を育てていく学習の形態。この指導では，「生活単元学習」の主旨を踏まえながら，「遊びの指導」（小）や「総合的な学習の時間」の主旨も含めて，地域生活や家庭生活に必要な基礎的・基本的能力や態度を系統的・発展的に身に付けられるようにする。
	なかま	小	より大きな集団での活動に慣れ，人との関わりや集団参加に必要な能力や態度を育てていく学習の形態。この指導では，「特別活動」及び「自立活動」の内容が含まれており，学部全体での集会や簡単なダンス・ゲームなどの活動を中心に，年間を通して設定している。
	音楽	小 中	教科「音楽」の内容の内，音楽活動を楽しむことを通して，音楽の基礎的な能力を養いながら，様々な音楽に関する興味・関心を高め，生活の中で音楽を楽しめるような態度と習慣を育てていく。
	余暇の時間	高	労働と余暇のバランスがとれたライフスタイルを形成し，豊かな人生を歩むことができるよう，余暇を活用する能力を育てていく学習の形態。この指導では，「総合的な学習の時間」に相当する内容とともに，余暇としての観点で「音楽」「体育」「図工・美術」に関する内容も含めている。生徒の興味関心に基づいたグループ編成をして，実際の体験を重視した活動を設定している。
就労支援	進路	高	高等部卒業後の社会生活・職業生活の在り方や，個々の具体的な進路選択・決定に関する教育内容を体系化・系統化した学習の形態。この指導では，生徒が自らの在り方や生き方を考え，自分の将来像に見通しをもてるようにするとともに，社会人としてたくましく柔軟に問題を解決していく力を育てていく。
	作業	中 高	実際的な作業活動を中心に行うことにより，職業生活に必要な基礎的・基本的な知識と技能の習得及び，働く意欲や勤労を重んじる態度を培い，職業生活における自立を図る力を育てていく学習の形態。この指導では，中学部で２種目（もの作り），高等部で４種目（もの作り２，サービス系２）の作業種目を設定している。

※「自立活動」「総合的な学習の時間」については，学校教育全般をとおして組織的・計画的に指導する。

Ⅱ　小学部研究

1　小学部研究主題

ここちよく相手と関わろうとする力を育む授業作り

2　小学部研究主題設定の理由

小学部では，平成 23 年度からの４か年の研究で，「自分らしさを発揮し，自ら取り組もうとする力を育む授業作り」という主題の下で，教育活動をキャリア教育の視点で捉え直し，より良い指導・支援の在り方や教育環境についての研究を行った。キャリア教育の視点を取り入れながら，題材のつながりや学習内容の整理，見直しを行い，指導・支援に一貫性と系統性をもたせた結果，児童一人一人が好ましい経験を積み上げ，主体的，意欲的な姿が見られるようになってきた。

前研究において「つながる力」については，**スキルの獲得だけではなく，相手に関わろうとする意欲を高めていくことが重要**と考え，まずは，教員が児童の行動の意味を丁寧に読み取り，共感することを基本的な姿勢として，学校生活全般で実践を続けてきた。しかし，「つながる力」を育てていくためには，具体的な学習内容の更なる検討が必要であった。

本校児童の実態としては，素直で明るく，教員との関わりを好むといったことが挙げられる。特に相手との関わり方について焦点を当ててみると，相手と積極的に関わりをもとうとするが，一方的になったり，友達や教員からの働きかけを待っていたりする児童もいる等の課題も見受けられる。

小学部段階は，意欲的に相手に働きかけながら円滑な人間関係を形成していくための，**関わり合いの基礎を築く大切な時期**である。そこで本校小学部では，関わろうとする意欲を高めるためには，関わり合いの中で，自分も相手も「快」の体験を積み重ねていけることが不可欠であると考え，「つながる力」を，「ここちよく相手と関わろうとする力」と捉え，育てていきたいと考えた。この「ここちよく相手と関わろうとする力」を育むため，児童にとって身近な学部の友達や教員との関わり合いに着目した学習活動を設定し，その中で**相手への気付きや関心をもつことを大切にし，互いにここちよい気持ちを味わいながら，相手とのより良い関わり合い**を目指していきたい。

以上のことから，本主題を設定した。

3　研究目的

「つながる力」に着目し，一人一人の児童がここちよく相手と関わろうとする意欲や態度を育むために必要な，学習内容及びより良い学習活動や支援の在り方について明らかにする。

4　研究内容及び方法

年次	研究内容	研究方法
1年次	小学部における「つながる力」の整理・分析	・「つながる力」に含まれる要素について整理・分析を行い，小学部段階で育てたい「つながる力」を明確にする。 ・小学部における「つながる力」を育むため，これまで実施した〈なかま〉の題材の指導略案をもとに，それぞれの学習活動を小学部で検討した要素で分析する。
	「つながる力」に着目した授業作り	・分析結果に基づいて学習活動を検討し，実践する。 ・授業研究会を実施し，今後の授業作りに向けた課題を確認する。

2年次	「遊びを中心とした内容」における授業実践及び授業評価	・各学級の〈生活学習〉における「遊びを中心とした内容」に，生活年齢や児童及び学級の実態を考慮した系統性のある題材を新設し，授業実践をする。 ・「つながる力」について「自分のこと」,「相手のこと」を中心に児童の姿を見取り，学級や個人の「つながる力」の高まりについて確認し，授業評価・改善に役立てる。 ・各学級で行った遊びを〈なかま〉の活動に組み込むことで，より大きな集団の中で「つながる力」の育成を図る。
3年次	様々な学習の形態における「つながる力」を育むための授業実践及び授業評価	・授業作りの方針に基づいて様々な学習の形態において，各教員がテーマを決め,「つながる力」を育むための授業作りをする。 ・教育環境を「物的環境・人的環境・社会環境」の三つの視点に分け，授業立案，実践，評価，改善を行う。 ・授業評価表を活用しながら評価・検討を行い，授業の工夫・改善に役立てる。

5　研究経過

（1）１年次

１年次の研究では，小学部段階で育てたい「つながる力」とは具体的にどのようなことかを児童の実態も考慮しながら検討した。

遠城寺式乳幼児分析発達検査の結果等を用いて本校児童の実態を分析すると,「発語」,「言語理解」の領域に対し,「対人関係」の領域の課題が浮き彫りとなった。さらに,「発語」の領域の結果より，児童同士の関わり合いの中で一方的な関わり方になってしまう様子や，友達や教員からの働きかけを待つ様子との関連が考えられた。これらのことから，小学部段階では**相手に関心をもつこと**や**関わろうとする意欲**といった，相手との関わり合いの基礎を確かに築いていくことが不可欠であると考えた。その上で，**相手に対して思いやりをもった関わりを目指す**ことを「ここちよく相手と関わろうとする力を育む」と表現し，関わり合いの中で相手への気付きや関心をもつこと，学習活動の中で「ここちよい」気持ちを味わえる関わりの経験を積み上げていくことが重要であると考えた。そこで,「つながる力」の４区分のうち**「自分のこと」**,**「相手のこと」**について着目していくこととした。さらに，相手との関わりには**「基本的信頼関係・安心感」**,**「関わろうとする意欲」**,**「関わるための基本的な態度」**が大切であり，教員がこの三つのポイントを前提に授業作りをすることが重要であると考えた。

期待する姿
・相手に関心をもつ ・相手に関わろうとする意欲をもつ ・相手に対して思いやりをもった関わりをする

⇒

小学部で目指したい「つながる力」

ここちよく相手と関わろうとする力

授業作りでは，人との関わり方や集団参加に必要な能力・態度を育むために位置付けられた本校小学部独自の学習の形態である〈なかま〉の題材や指導略案をもとに，実際の学習活動を**「自分のこと」**,**「相手のこと」で分析**した。その結果，１年次は「相手のこと」に着目し，〈なかま〉に新たな題材「みんなであそぼう」を計画した。**授業実践では，「他者理解」と「他者との協働」という観点をそれぞれの学習活動の中に盛り込んだ。**１年次の成果と課題は次ページのとおりである。

成果	・「つながる力」に関連した児童の実態，学習活動で大切にしたい要素，身に付けたい力について整理･分析し，小学部段階での目指す姿を明確にすることができた。 ・授業作りの過程を通して,「基本的信頼関係・安心感」,「関わろうとする意欲」,「関わるための基本的な態度」という三つのポイントを押さえることの大切さを確認できた。 ・児童の主体性や意欲を引き出すための人的・物的環境の工夫を図った授業実践をすることができた。特に，教員が一緒に楽しく活動することで，児童が教員をモデルとしながら人と「関わるための基本的な態度」を養うことや，気持ちを共有することができた。 ・授業実践を通して，指導・支援にあたりながらも，児童の主体性を見守る教員の姿勢の大切さに気付くことができた。
課題	・児童の実態と生活年齢を考慮した系統性のある授業作りと，学部で視点をそろえた一貫性のある指導・支援を検討する。 ・「つながる力」に着目した授業の効果的な評価方法を検討し，授業の更なる充実を図る。

（２）２年次

１年次の研究では，児童の実態や〈なかま〉の分析に基づいた授業実践に取り組んだ結果，「つながる力」を高めていくためには，**児童の実態と生活年齢を考慮した系統性のある授業作り**と，「つながる力」に着目した授業の**効果的な評価方法の検討**が必要であると捉えた。そこで２年次は，学級単位の小さな集団での学びと学部単位の大きな集団での学びを「つながる力」の視点で整理し，関連付けて実践した。

まず〈生活学習〉の「遊びを中心とした内容」に，生活年齢及び児童や学級の実態を考慮した系統性のある題材を新設し，実践した。本校小学部の〈生活学習〉は，「遊びを中心とした内容」と，「生活上の課題や行事に関連した内容」で構成されており，「遊びを中心とした内容」は，自由遊びやゲームなど，児童が興味・関心をもちやすい内容である。また，児童や各学級の実態に合わせて様々な学習活動を設定しやすい内容でもある。この〈生活学習〉での**題材を児童や学級の実態に応じて新設し，各学級で実践していく**ことで，児童自身が遊びを楽しみながらも他者の様子に目を向けることや関心がもてるようになることを目指した。また，**そこで育んだ「つながる力」を学部単位の大きな集団でも活用して，相手との関わりを広げていくことを目指し**，上記の題材に取り入れた遊びを，〈なかま〉の学習活動にも組み入れ，実践した。

授業作りでは，１年次に引き続き，段階表の「つながる力」の４区分のうち「自分のこと」,「相手のこと」について着目した。また，「つながる力」を育むために，「基本的信頼関係・安心感」,「関わろうとする意欲」,「関わるための基本的な態度」の三つのポイントを押さえた授業作りに継続して取り組んだ。

授業を効果的に評価するために，授業評価表に加え，「つながる力」の段階表も用い，二つの尺度での評価を実施し，児童の変容を丁寧に追いながら，授業改善に活かした。

２年次の成果と課題は次のページのとおりである。

成果	・児童の実態や活動への興味などを考慮した授業作りを行うことができた。また，授業実践を通して，**具体物を介して児童同士の関わりを促す**ことは，どの学級においても有効な手立てであることが示唆された。 ・**〈生活学習〉における実践を〈なかま〉と関連付けた**ことにより，**学級の中での学びをより大きな集団での活動に発展させることができた。**また，〈なかま〉での実践を通して，異学年から得た刺激を学級集団での意欲の高まりに結びつけ，生活場面で活かすことができるようになってきた児童や，友達との関わりの中で笑顔が増えた児童が認められるようになった。 ・授業評価表を活用し学習内容や指導の手立てについて具体的に評価することで，改善策が明確になり，次の授業へと活かすことができた。 ・「つながる力」の評価として段階表を用いることで，児童一人一人の成長を捉えることができた。さらに，教員同士で情報交換を行ったことで，児童の変容を多面的に捉えることができ，客観的な視点の大切さに気付き，児童の成長を見守るなどの教員の意識の変化が見られた。
課題	・児童同士が関わり合う中で，「ここちよい」関わりの経験を積み上げていけるよう，展開や環境設定の工夫を考える必要がある。 ・一人一人の目指す「つながる姿」に近付けるために，教員の支援の在り方について，役割，立ち位置，頻度，方法などを具体的に検討したい。

（３）３年次

１・２年次の取組から，小学部段階では，相手に関心をもって関わろうとする意欲を高めていくことが重要で，そのためには，実際に相手と関わり合う経験を丁寧に積み上げていくことが必要であることが分かってきた。そこで，３年次は小学部における授業作りの方針を以下のように設定し，授業作りの実践を様々な学習場面で行うことにした。

①相手と関わろうとする意欲を高める授業作り
②相手と関わるための基本的な態度を育む授業作り
③教育環境を三つの視点で捉えた授業作り

① 相手と関わろうとする意欲を高める授業作り

１・２年次の実践では，教員や友達と場を共有し，楽しく活動する中で，「〇〇さんは何してるのかな」，「楽しそうだな」という気付きや，「私もやってみたいな」，「一緒に遊びたい」という意欲を引き出すことができ，その高まりが実際に相手と関わる姿につながっていった。相手と関わるためには，まず，身近な相手に関心をもち，相手と関わってみようという意欲を引き出し，高めていくことが大切であると考え設定した。

② 相手と関わるための基本的な態度を育む授業作り

児童の相手と関わろうとする意欲を実際に関わりをもつことにつなげるためには，相手との望ましい関わり方を育むことも大切であると考え設定した。相手と関わろうとする意欲が芽生えても，関わり方が分からなければ，一歩を踏み出すことができない。また，一方的な関わり方をし

てしまうと，相手との望ましい関係が成立しにくくなる。そのためにも**友達には「優しく」接したり，相手からの呼びかけに自分なりに応えたりするなどの望ましい態度での関わり方を育んでいくこと**で，児童同士がここちよさを感じられると考え設定した。

③教育環境を三つの視点で捉えた授業作り

「つながる力」を育むための授業を具体的な視点で捉えるために，教育環境を**物的環境・人的環境・社会環境**の三つに分け，それらの視点を授業作りに活かすこととした。前研究を参考に作成した「教育環境一覧表」（表Ⅱ－１）を活用することで，教育環境を三つの視点から具体的に捉えることができるとともに，授業における環境調整のポイントを明確にして，的を絞った指導をすることができると考えた。また，授業後の評価においても，このポイントを中心に検討することで，より効果的な改善策を導き出せると考えた。なお，実践に当たっては，引き続き「自分のこと」と「相手のこと」の二つの区分に着目した。

表Ⅱ－１　教育環境一覧表（抜粋）

	具体例
物的環境	授業する場，物の配置，使用する物（教材・教具）など
人的環境	教員の指導，支援の方法，情報の示し方，情報提供の量，教員間の連携など
社会環境	題材の配列，時数，展開方法，一単位時間の時間配分など

以上の三つの方針をもとに教員一人一人が授業作りを進めていくこととした。評価においては，２年次に活用した**授業評価表を三つの教育環境に分けて記入できるようにする**とともに，**授業者があらかじめ評価項目を記入しておく**ことで，より効果的に評価できるよう改良を加えたものを作成し，活用した（表Ⅱ－２）。

授業検討会では，直接参観や記録ビデオの観察による評価に対して，授業者が考察を加え，改善の方向性を提案した。それをもとに全員で協議し，有効な手立てを見いだしたり，改善の具体策を探ったりした。このように，学部教員全員での評価・改善を丁寧に行うことで，授業作りのPDCAサイクルを確実に回し，学部全体の授業力向上もねらえると考え，取り組んだ。

次ページより，小学部での六つの実践について報告する。

表Ⅱ－２　授業評価表（抜粋）

授業	平成 29 年 10 月 12 日（木）	対象	小学部１・２年生
題目	みんなで楽しく歌おう，打楽器を打ち鳴らそう	題材	歌おう・踊ろう
テーマ	友達や先生と関わりを感じられる授業		
つながる力	区分／要素		目指す姿
	相手のこと/他者との協働 相手のこと/集団参加		・教員や友達と一緒に活動に取り組むことができる。 ・集団での活動に慣れて，楽しむことができる。
	評　　価		改　善　策
授業について	【物的環境について】 ・季節の歌の際に，手遊びを取り入れて興味を引いたり，実物のどんぐりの感触や転がる様子を体感したりすることで，Ｃの興味・関心に関する適性はどうだったか。		評価してほしい観点をあらかじめ記入
	【人的環境について】 ・T1 とＣ一人一人との距離が近いという反省から，以前よりＴとＣの距離を取ったり，T2T3 の位置をＣの後ろからＣの表情が見える位置に変更したりしたことについて，「つながる力」の観点からはどうだったか。		
	【社会環境について】 ・題材の順番をホワイトボードで提示することで，Ｃに見通しをもたせるとよいという反省から，小ホワイトボードに呈示をしたが，小ホワイトボードを呈示する位置や文字やイラストについてどうであったか。また，以前より見通しがもてるようになっていたか。		

物的環境

人的環境

社会環境

実践Ⅱ－１　友達と一緒に楽しめる〈体育〉の授業作り

１　実践のねらい

学校という集団での経験が少ない小学部１・２年生は，「相手」とのつながりの面から，身近な他者である教員と一緒に学級の友達との活動を楽しむ段階である。そのため，児童自身が楽しめる活動を通して，友達を意識したり友達への関心を高めたりしていく経験を積み重ねていくことが重要である。

〈体育〉の本題材「押したり引いたりしよう」は，全身を使って押す･引くという簡単で分かりやすい動作を繰り返すことから，使用する教材・教具を工夫することで，友達と一緒に活動する経験を積むことができると考えた。そこで，活動意欲を高めるための工夫と友達と一緒に活動する場面設定を行い，友達とともに楽しめる授業実践を行うこととした。

２　実践例

学習の形態	体　　育	学習グループ	小学部１・２年
題材	押したり引いたりしよう		〈総時数１０時間〉
本時	友達と押したり引いたりしよう		〈６／１０時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・重い物を押したり引いたりし続ける筋力の向上を図る。 ・一緒に活動する相手が分かり，押したり引いたりすることができる。	◆友達と一緒に活動したり，応援したりする姿 他者理解　他者との協働　集団参加

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
1　挨拶 2　学習内容の確認	○本時の学習内容を，絵カード等を用いて確認するとともに，活動の見通しを持って取り組めるようにする。 ○活動内容を呈示する際，友達と一緒に「がんばる」ことを伝える。
3　ウォーミングアップ ・ラジオ体操 ・歩く走る	○示範の動作が分かるよう，児童の実態に応じた言葉かけも合わせて行う。また，「歩く」「走る」の切り替えができるよう音楽に合わせて合図する。
4　「二人組で押したり引いたりしよう」 ・フラフープ引き	●一緒に活動する友達と握手をして，相手が誰か分かるようにする。　他者理解　他者との協働 ○児童の実態を踏まえた組み合わせにし，安全性に配慮するとともに，活動に対する意欲が落ちないよう留意する。
5　「みんなで押したり引いたりしよう」 ・大きなクッションマットを押す	●一緒に活動する際は掛け声をかけるなど，友達と一緒に活動することが意識できるようにする。また，待機している児童は応援するなど，間接的に参加できるようにする。 集団参加
・片付け（道具の片付け）	○自分たちで使ったものは，自分たちで片付けることも大切であることを伝える。友達と協力したり，自分から片付けに取り組んだりしている児童がいた場合には称賛する。
7　振り返り 8　挨拶	●友達と一緒に取り組んで，どのような気持ちであったか聞くことで，児童が自分の思いを表現することや，友達の思いを聞いて一緒に取り組んで良かったという思いを高められるようにする。　他者理解

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）児童の「できる」「やりたい」気持ちを引き出す工夫

・児童の興味・関心を高めるために，日頃の遊びの様子や発言，好きなものなどを参考にして授業を組み立てる。本題材では，教材・教具をアニメのキャラクターに見立て，キャラクターをやっつける設定で押す活動に取り組む。

・児童がどのような活動に取り組めるか，毎時の活動内容について段階を踏んで検討し，児童の達成目標を明確にして取り組む。また，児童にとって何をどこまで取り組んだら終了かが分かるように，カラーコーンやテープ等で視覚的な支援をする。

キャラクターに見立てた
クッションマット

（２）「友達と一緒に」を意識した取組

・教員対児童でフラフープの引き合いをする，友達と交互にスクーターボードを引くなど，友達と一緒に取り組む活動を設定する。

・友達と握手を交わしたり，同じ色のリストバンドを付けたりするなどして，一緒に活動する相手への意識を高める。

・毎回教員がペアを発表するだけでなく，くじ引きを取り入れるなどして，誰と行うかといった期待感を高める。

・振り返り場面では，教員が誰と一緒に活動したか質問し，友達を意識できるようにしたり，一緒に活動した友達にシールを貼ったりするなど，より友達への意識が高まるようにする。

一緒に活動した友達に
振り返りシールを貼る姿

４　実践のまとめ

（１）児童生徒の姿

・教材･教具をキャラクターに見立てると，興味・関心が格段に高まり，自分から進んで活動に取り組む様子が見られ，中には友達の手を引いて一緒に活動する児童も見られた。

・友達の活動している様子を見て，教員と一緒に応援していた児童の中には，友達に対する関心が高まり，次第に自分から声を出して応援するようになってきた。

・授業の振り返りでは，一緒に取り組んで楽しかったというような内容の発言や，その発言を受け一緒に取り組んだ児童がほほ笑む様子が見られた。一緒に活動したここちよさを共有するようなやりとりがあった。

（２）まとめ

教材・教具をキャラクターに見立てたことで，児童の想像力を膨らませることができ，敵をやっつけるといったイメージをもちながら楽しく活動するきっかけを作ることができた。また，床にカラーテープを貼って体操を行う位置を示したり，ペアの友達が分かるよう同じ色のリストバンドを用いたり，振り返りには絵カードと児童の写真を使用したりと，児童が見て分かる工夫をすることや，同じ手順で繰り返し取り組めるように展開を工夫することで，見通しをもって自分から活動することができた。

児童の姿からは，友達と一緒に楽しく活動する場面を増やすことで，他者への意識が少しずつ高まってきた様子がうかがえた。また，児童が活動を理解し，自分から「やりたい」「やってみたい」という思いが行動として表れてきている姿が見られた。このような経験の積み重ねが主体的な行動へとつながっていくと考えられる。

実践Ⅱ－２　教員や友達との関わりを感じられる授業作り

１　実践のねらい

小学部１・２年生は，教員や友達，少人数での集団活動に関心をもったり，実際に一緒に取り組んだりする段階である。休み時間は，一人で好きなことをしている児童や気が向いた時に教員や友達に関わる児童，おもちゃや場所を譲り合いながら友達と仲良く遊ぶ児童など，様々な姿がある。〈音楽〉の授業で映像や音楽を流すと，食い入るように画面を見たり，にこにことほほ笑んだり踊ったりする姿が見られ，児童たちが音楽を身近に感じる姿が見られている。

そこで，〈音楽〉の授業を通して，教員や友達との関わりを感じながら，楽しく活動する態度を育成できないかと考え，歌唱や器楽など様々な音楽活動の中に相手と関わる活動を取り入れて，一人では味わうことのできない，相手と関わるここちよさを十分味わえるよう，児童たちの表情や発語に注目しながら実践を行うことにした。

２　実践例

学習の形態	音　　楽	学習グループ	小学部１・２年
題材	歌おう踊ろう		〈総時数 15 時間〉
本時	みんなで楽しく歌おう，打楽器を鳴らそう		〈10／15 時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・教員や友達と一緒に歌を歌い，音楽を楽しむことができる。 ・音楽やリズムに合わせて，打楽器を鳴らす面白さを味わうことができる。	◆教員や友達と一緒に，活動に取り組む姿　他者との協働 ◆集団での活動に慣れて，自分なりに楽しむ姿　集団参加

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
1　歌「はじまるよ」 2　学習内容の確認	○和やかな表情で授業を始めることで，楽しい雰囲気を作れるようにする。
3　歌「大きな栗の木の下で」「どんぐりころころ」 ・全員で手遊び歌をする。 4　器楽「おもちゃのチャチャチャ」 ・打楽器を鳴らす。 5　鑑賞「カノン」	○教員や友達と一緒に手遊び歌をして，楽しく活動できるようにする。 ●教員や友達と一緒に，楽しみながら活動できるような雰囲気作りをする。　他者との協働 ○教員の示範や言葉かけにより，打楽器を打つタイミングが分かるようにする。 ●打楽器によって音が違う，面白いと感じられるよう，様々な打楽器を準備して児童の興味を高めるとともに，自分の音と友達の音の違いから，友達への関心を引き出すようにする。　集団参加 ○クールダウンができるよう，曲の速度や音量を調節し，気持ちを落ち着かせるようにする。
6　振り返り ・ホワイトボードを見て振り返る。 7　挨拶	○ホワイトボードに書かれた本時の活動を呈示し，自分や友達の楽しかった活動を振り返ることができるようにする。

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）音楽を通して友達や教員と関わりやすくするための取組

自然とペアになって踊る児童の姿

・教員や友達と同じ動作ができるよう曲の速度を調整することで，合わせる楽しさや面白さを感じられるようにする。

・隣の友達と向かい合う，手をつなぐ，一緒に踊るなどのペア活動を取り入れて，相手と一緒に心地よく音楽を感じられる構成にする。

・打楽器によって音が違う，面白いと感じられるよう，様々な打楽器を準備し，自分の音と友達の音の違いから，友達への関心を引き出すようにする。また，友達が貸してほしい時に，「貸して」「いいよ」と言えるために必要な言葉かけを，個に応じて支援する。

（２）児童のつながる力を引き出すための工夫

児童が教員につぶやきを伝えにくる場面

・おもちゃやどんぐり，焼き芋などの実物を活用することで，児童同士が自然と関わりたくなるような仕掛けや楽しい雰囲気作りをする。

・児童のつぶやきや自発的な行動を教員が拾って授業に活かす意識をもち，発展的に授業を展開できるようにする。

４　実践のまとめ

（１）児童の姿

・手遊び歌や器楽，身体表現などで，教員の示範をしっかり見て同じ動作ができるよう速度を遅くし，タイミングが合ってきたところで元の速度に戻すようにしたことで，初めのうちは教員や友達と同じタイミングで歌ったり踊ったり楽器を鳴らしたりすることが難しかった児童も，徐々に合わせることができるようになり，楽しみながら活動に参加する姿が見られるようになった。皆と合わせることが難しい児童も，楽しんで活動している友達を笑顔で眺めており，友達と気持ちを共有して自分なりの方法で参加していることを見取ることができた。

・児童のつぶやきや主体的な言動を拾い，活かす態勢に切り替えたことで，自分の思いを教員に言葉で伝えたり，体で表現したりするなどして一人一人が活き活きと授業に臨むようになり，結果として友達や教員と楽しく関わる姿が見られるようになった。

・児童の言動を授業に活かす場面を多く設けたことで，児童が自信をもてるようになり，自分から友達と関わろうとする児童が増えてきた。自分の言動が認められたことで関わることの楽しさやうれしさが芽生え，学校生活の様々な場面でも友達に関わる姿が多く見られるようになった。

（２）まとめ

小学部１組の〈音楽〉は，「つながる力」を育む視点を無理なく取り入れられた実践だと考えられる。音楽を通して児童自らが相手と関わろうとする姿が見られた時に，教員がその可能性をどのように導くか，姿としては表出されない児童の思いをどう引き出すかなど，教員が児童のつぶやきや思いを拾い，受け止め，活かす意識をもって向き合うことで，学校生活全般での人との関わりが様々な方向に発展し広がっていくのだと，実践を通して改めて気付くことができた。今後，児童の「つながる力」をさらに引き出すために，教員同士がその意識を共有して日々の指導に当たり，教員が児童一人一人の特性をしっかりと把握し，現段階における適切な支援をしつつ，関わる楽しさを味わえるような経験を増やしていけるよう，日々支援の工夫・改善に努めていきたい。

実践Ⅱ－３　友達や教員との活動を楽しめる授業作り
～〈生活学習〉の「遊び」を中心に～

１　実践のねらい

小学部３・４年生は，自分のやりたいことや好きなことが分かり，自分なりの楽しみ方で活動に取り組み，他者との関わり方を学んでいく段階である。休み時間に誰かがキーボードで遊んでいれば，興味をもち，近寄って一緒に遊ぶ姿が見られるなど，物を介して友達と関わる場面も見られるようになってきた。このことから，興味をもった物を介して遊びの場を共有する中で，同じ遊びに興味をもった友達に気付き，「友達と遊ぶとなんだか楽しいな」,「友達と一緒ならできるぞ」などの思いを重ねて，自ら関わることができるようになっていくことが期待できると考えた。

〈生活学習〉の「作って遊ぼう」，「楽しく遊ぼう」の題材では，物を介した活動を設定することが容易である。制作場面や遊びの場面を設定することで友達との自然なやりとりが生まれ，活動を楽しみながら，関わる力を育てていきたい。自分も友達も楽しくなる活動を通して，人と関わり合うことの楽しさを味わうことができる授業の実践を行うこととした。

２　実践例

学習の形態	生活学習	学習グループ	小学部３・４年
題材	楽しく遊ぼう		〈総時数 10 時間〉
本時	ダンボールランドで遊ぼう		〈５／10 時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・みんなで作ったダンボールランドで，友達とやりとりしながら遊ぶことができる。	◆友達と遊び場を共有しながら，楽しんで活動する姿　集団参加 ◆友達とやりとりしながら活動する姿　他者との協働

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
1　挨拶 2　学習内容の確認	○前時の活動の様子を写真で振り返り，活動の見通しをもてるようにする。学習の流れをホワイトボードに書いて知らせる。
3　遊び方の確認をする。 4　ダンボールで作った家・トンネル・キャタピラーを協力して組み立てたり，並べたりする。 5　ダンボールランドで遊ぶ。 6　友達と握手する。	●児童の自主性を尊重し，できるだけ見守る。その際，活動に興味をもたない，または，興味はあるけど入るきっかけがつかめない児童には，一緒に楽しめるように，ダンボールの中から誘うなど言葉かけをする。　集団参加　他者との協働 ●遊びを十分楽しめるように時間を確保する。　集団参加 ○顔を見たり言葉をかけたりしながら，握手をしている児童を称賛する。
7　振り返り ・活動場面を思い出しながら，気持ちを発表する。 8　片付け 9　挨拶	○支援の必要な児童には気持ちを表したペープサートから，自分に合った気持ちを選べるようにする。 ●友達と協力して片付けるように促す。　他者との協働

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

◎友達との関わりが生まれる場や物の設定

二人で入れるキャタピラー

・制作場面で，かざりのシールやセロテープを一緒に使うなど，ペアになった友達と道具や材料を共有することで，分け合う，譲り合うなどのやりとりが生まれるようにする。

・二人組で遊べる場を設定することで，互いに誘い合う場面を作る。

・教員に支援を求めてきたときには,友達に「紙を貼るから押さえて」，「一緒にやろう」などと声をかけてみるように促したり,実際に教員がモデルとなったりする等，児童の実態に合わせて適宜支援する。

ボールを穴に落として

・友達と関わり合う場面を保障するために,遊びの時間を十分に確保する。

・自然な関わり合いを生み出すために，ダンボールに穴を開けておくなど，遊ぶ場の中に児童が興味をもちそうな仕掛けを作る。

・片付けの際，一人一つの役割（道具やごみを集める等）を与えることで，友達全員に関われるようにする。

・意欲は十分あるが言葉で思いを伝えることが難しい児童には，伝わる満足感が味わえるようにするために，やりとりのパターンが分かりやすい役割（チケット売り等）を作る。

二人で飾り付け

４　実践のまとめ

（１）児童の姿

・ペアでの活動場面では，作った物を見せ合ったり，遊びに誘ったりする姿が見られた。

・ペアでゲームに参加することで相手を意識し，結果発表ではペアになった友達の顔を見たり，積極的に手を取ったりしていた。

・友達の名前を呼ぶことが少ない児童も,机を運ぶ際自ら「○○さんどうぞ」と言うようになった。

・自ら関わることが難しい児童にダンボールランドのチケットを売る役割を作ったが，他の児童も興味をもち，役割を交代しながら,関わり合って遊ぶ姿が見られた。

・一人一人が自分の楽しみ方で楽しんでいる場面もあった。

・繰り返し遊ぶうち，ダンボールに開けた穴からボールを落とし，ダンボールの中の友達に「取って」とお願いするなど遊びに発展性が見られた。

（２）まとめ

共通の場・物で遊んだり，制作したりすることで，児童同士の自然な関わりが生まれ，友達と一緒に活動する姿が増えてきた。さらにやりとりを深めていくためには，児童の興味が持続するような場の設定や素材を追求したり，遊ぶ場面ではできるだけパターン化や約束事は避け，自由度の高い活動にし，その中でやりとりが生まれそうな様々な仕掛けを作ったりしていくなど,まだ工夫の余地がある。一方で,小学部３・４年の段階では，自由度を高めていくと自分一人の遊びや制作に没頭してしまう傾向が見られ，やりとりの深まりには場や物といった環境設定だけでは限界があった。教員が一緒に楽しみ，関わり合って遊ぶモデルを示すなど，児童同士をつなぐ役割を意識したい。教員主導にならず，児童の主体の活動の中で教員がどれだけ裏方に徹し，かつ関わり合いの手本を見せられるかが今後の課題である。

実践Ⅱ－4　鑑賞活動を通して友達を感じ，受け入れることのできる授業作り

1　実践のねらい

小学部３・４年生は，身近な他者である友達や教員と感情を共有しながら，集団での活動を楽しむ段階であり，学校生活の様々な場面で，友達と一緒に笑い合ったり，関わりを楽しんだりする姿が見られる。このような日々の関わり合いを通して，友達や教員は自分とは異なる存在であると漠然と理解し，少しずつ自我が育っていく段階でもある。その途上では，自己と他者の境界がはっきりせずにトラブルになることも多々あり，自己と他者の違いを認め，受け入れる力を育てていきたいと考えた。

〈音楽〉の授業は，本学級の児童にとって大好きな学習の一つであり，流れる曲に耳を傾けて自然と身体を動かしたり，楽器に興味をもって自由に打ち鳴らしたりするなど，思い思いの方法で楽しく活動する様子が見られる。そこで，児童同士が奏でる音を聴き合う「鑑賞活動」を工夫することで，リズムの模倣を通してリズム感を養いながら，自分がもつ思いや感覚などとは異なるものの存在を感じ取り，受け入れる経験を増やしていけるのではないかと考え，実践した。

2　実践例

学習の形態	音　楽	学習グループ	小学部３・４年
題材	リズムを感じよう		〈総時間数６時間〉
本時	まねしてみよう		〈５／６時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・音をよく聴き，リズムを模倣することができる。 ・リズムに合わせて歌ったり，身体を動かしたりすることができる。	◆友達の鳴らす音を通して，友達の存在に気付く姿 他者理解

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
1　挨拶 2　学習内容の確認	
3　歌唱「やおやのおみせ」 ・リズムに合わせて，手拍子をしたり，野菜の名前を言ったりする。	○必要に応じて絵カードも活用し，全員が楽しく取り組めるようにする。また，「おかしやさん」や「おもちゃやさん」にアレンジし，遊びの要素も取り入れながら繰り返し行う。
4　器楽・鑑賞「まねしてみよう」 ・順番に自分の好きなリズムでタンバリンを叩く。 ・友達の鳴らすリズムを聞き，まねをして演奏する。	●誰のまねをすればよいか分かりやすくするために，発表者は皆の前に出る。また，友達が前に出たら，自分の音を出さないことを約束にする。他者理解 ○「○○さん(発表者)のまねまねどうぞ！」とタイミングよく合図を出し，リズムへの意識を高める。
5　表現「オーラリー」 ・曲に合わせて，スカーフを揺らす。 ・スカーフの揺れを味わう。	○曲調に合った，ゆったりとした気分を味わえるような雰囲気作りをする。　【以下省略】

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

◎児童同士が奏でる音を聴き合う「鑑賞活動」を授業に取り入れる際の留意点

・この活動は，楽器への興味･関心やリズム感との関係が深いため，リズム遊びを取り入れたり，様々なリズムパターンを学ぶ機会を設けたりと，それぞれと関連付けて授業を組み立てる。

・聴き取りやすく，たたきやすいリズムを教員が示範し，児童が参考にできるようにする。また，テンポのよい掛け声や合図を行い，リズムへの意識を高め，楽器を鳴らす意欲につなげる。

・リズムを無視して自由に楽器を鳴らす児童においては，教員が聴き取りやすいリズムに誘導することも必要である。

・発表者として友達が前に出てきたら，自分の楽器の音を鳴らさず聴くことを約束とし，友達への意識を高めると共に聴く態度を育てる。

・音が残りにくく，聴き取りやすい楽器（タンバリン，太鼓など）を使用する。

みんなでリズム遊びゲーム

ぼくのリズムを聴いてね

４　実践のまとめ

（１）児童の姿

・当初は，多くの児童が自由に楽器を鳴らすことの楽しさや音色そのものへの興味･関心に傾きがちであったが，実践を重ねるにつれて，友達の鳴らす音やリズムへの興味へと移っていった。

・友達にまねしてもらえる楽しさや喜びを感じ始め，友達が聴き取りやすく，鳴らしやすいリズムで楽器を鳴らそうとする児童が出てきた。

・友達のリズムをまねることで，同じリズムが重なることに関心をもつ児童が増えてきた。

・友達が前に出て発表しているときは，音を鳴らさず友達のリズムを聴き取ろうと友達の音に注意を向けて聴いたり，友達に注目したりする姿が見られようになった。

・友達がまねできないようなリズムをあえて考え，鳴らす児童も見られた。

（２）まとめ

まねしてもらう側は，一人で自由に楽器を鳴らすことも楽しいが，友達に自分の鳴らしたリズムをまねしてもらうことも楽しいという経験を積むことで，友達がまねできるリズムで鳴らそうという思いが生まれた。同時に，まねする側にもまた，一人で自由に楽器を鳴らすことも楽しいが，音が重なる楽しさを経験する中で，まねしてみようという思いが生まれた。本実践を通し，児童それぞれが友達の存在を感じることができた。

また，友達がまねできないリズムを鳴らそうとする児童の姿は，他者の存在に気付くことで，自己の存在をはっきりと感じられるようになった表れと考える。児童の様子からは，まねをされたくないと思う反面，まねしてほしいという心理的葛藤や，友達にまねされたら負けと捉え，勝ちたいという気持ちが見て取れた。今回は教員がその思いを受け止めつつ，聴き取りやすいリズムへと誘導したが，今後はそのような発達段階の児童も考慮し，自由な自分なりの表現を尊重することとリズム感を養うこととを両立させながら，友達を受け入れ，楽しむことのできる授業を展開していきたい。

実践Ⅱ－５　みんなと一緒に表現することを楽しめる授業作り

１　実践のねらい

小学部５・６年生は，友達と一緒に活動に取り組んだり，集団での活動に積極的に参加したりするなど，集団への意識や主体性が伸びていく段階である。また，児童にとって音楽は，生活との関わりが深く，気に入っている歌手やＣＭの歌を口ずさんだり，曲がかかると踊り出したりするなど，身近でここちよいものとして存在している。

そこで，友達や教員と一緒に歌ったり，身体表現したり，楽器を演奏したりする活動を通して，友達との関わりを広げ，深め，みんなと一緒に表現することを楽しいと感じることができるなどの「つながる力」に迫りたいと考え，実践を行うこととした。

２　実践例

学習の形態	音　　楽	学習グループ	小学部５・６年
題材	歌おう・踊ろう		〈総時数７時間〉
本時	音楽に合わせて歌おう・踊ろう		〈６／７時間〉

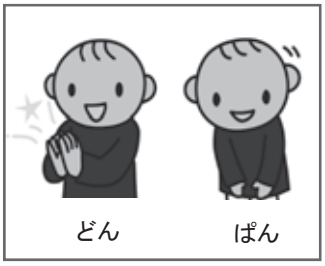
本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・友達や教員と一緒に歌ったり，身体表現したり，タイミングを合わせて音を鳴らしたりすることの楽しさを感じることができる。	◆歌に合わせて身体表現したり，友達や教員と一緒に音を鳴らしたりすることができる。 集団参加

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
１　挨拶 ２　学習内容の確認	
３　歌唱「ドドドの歌」，「ドドドの歌２」 ・教員が示した条件に合わせながら歌う。 ①普通の声　②大きな声　③小さな声 ④ゆっくり　⑤速く ４　鑑賞「ドンパン節」 ５　歌唱・表現「ドンパン節」 ①示範の歌に合わせて歌う。 ②歌に合わせて身体表現する。 ドン→手をたたく　　パン→腿をたたく ③歌に合わせて，友達や教員と一緒に身体表現する。 ６　器楽「ミュージックベル」 Ｃペンタトニック（ドレミソラド） ①教員が鳴らした音を聴く ②一人ずつ鳴らす。 ③二・三人の組になって鳴らす。	○伴奏に合わせて声を出すことができるよう，Ｔ２が個別に関わる。 ○それぞれの条件を意識することや，友達と一緒に行う楽しさに気付くことができるよう，適宜，言葉かけをする。 ○児童が「ドン，ドン，パン，パン」の部分を確認しながら聴くことができるよう，歌詞カードを呈示する。 ○手や腿を打つところを意識できるよう，歌詞カードを見ながら，歌ったり，身体表現したりできるようにする。 ○児童の様子によっては，友達と向かい合って手をたたくなど，一緒に活動するよう促す。 ●集団での活動を楽しめるよう，楽しい雰囲気を作ると共に，Ｔ２が個別に関わり，適宜，支援する。 集団参加 ○それぞれの音を聴いてから，鳴らしたいベルを選ぶようにする。 ○音がぶつかり合わず，響きを味わいやすいよう，Ｃペンタトニック音階（ドレミソラド）で行う。 ●タイミングを合わせて音を鳴らすことができるよう，練習時間を設ける。 他者との協働
７　振り返り ８　挨拶	

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）一人一人の表現力を培う取組

・児童が進んで表現できるよう，授業で扱う曲は，リズムや歌詞を覚え易いものにする。
・授業の初めに発声練習を行うことで，表現するための下地を作る。
・表現する際の簡単な表現の仕方を，ホワイトボードに呈示し，児童が確認しやすいようにする。
・児童が表現しやすくなるよう,音楽と言葉と身体の動きを連動させる。



簡単な表現の仕方

（２）みんなと一緒に表現するための工夫

・身体表現や器楽の活動において，二人組や三人組を作り,「せえの。」などの合図に合わせて表現する。
・支援を要する児童には,個別に合図を出したり,リズム譜や鍵盤を指差したりするなどの手がかりを伝える。
・友達と向かい合い，お互いの手を打つなど，相手を意識することができる活動を設定する。

合図に合わせて
ミュージックベルを鳴らす

４　実践のまとめ

（１）児童の姿

・伴奏や合図に合わせて友達や教員と一緒に歌ったり，身体表現したり，楽器を鳴らしたりすることができるようになった。
・様々な歌い方や，身体表現の仕方，楽器の鳴らし方を学び，経験を重ねたことで,いろいろな表現方法を楽しむ児童が増えた。
・みんなと一緒に表現する楽しさへの実感には，個人差があり，みんなと一緒に音楽の時間を共有していることで楽しみを感じている児童や，一緒に手を合わせて音を鳴らしたり，踊ったりすることで楽しさを感じている児童など，様々であった。

（２）まとめ

〈音楽〉の授業は，みんなで同じ曲を聴き，身体表現したり，歌ったり，奏でたりすることで，音を媒介として友達や教員と関わり合うなど,「つながる力」を育む有効な機会であったと考える。

本実践では，声を出したり，楽器を扱ったりする機会を多く設けたことで，リズムや音程，歌詞，声量，楽器の扱い方などを覚え，児童が活動に参加しやすい状態になり，進んで表現しようとする姿が見られた。また，教員の合図で一斉に歌ったり，皆のタイミングを合わせて楽器を鳴らしたり，音を止めたりする活動を通して，友達と息を合わせることの楽しさや面白さを感じられるようにするとともに，音の重なりや響きなど，友達と一緒に表現することで味わえる音楽の美しさ等にも触れられるようにすることで，みんなと一緒に表現することの楽しさを味わえるようにしてきた。

「みんなと一緒に表現する楽しさ」の実感には個人差がある。今後は，始まりや終わりを意識し，様々な楽器を用いて一つの曲を演奏するための手立てや，児童の実態に即した選曲など，支援や指導の工夫を行い，「みんなで一緒に表現することは楽しい」と児童一人一人がそれぞれに実感できるように，授業の改善を図っていきたい。

実践Ⅱ－６　集団での遊びに進んで参加できる姿を目指した授業作り

１　実践のねらい

小学部５・６年生は，集団での活動に積極的に参加したり，その中で友達と一緒に活動したりと，自分から相手と関わる経験を積んでいく段階である。これまでの学校生活での様々な経験から，興味・関心の幅が広がり，意欲的に学習に取り組めるようになったり，自分のやるべきことを理解して係活動に自分から取り組めるようになったり等，成長が感じられる。一方で，集団の活動においては，自分の活動に精一杯で，友達と関わり合いながら取り組むことに意識が向かない場面も見られる。

そこで，得点を競い合うゲーム活動を通して，ペアの友達と協力することや，当番活動や準備・片付けといった役割を通して，一緒に遊ぶ楽しさだけでなく，協力するよさや関わり合うここちよさを味わう経験を積み上げ，集団での活動への意欲を引き出し，主体的に相手と関わる姿へとつなげられるようにしたいと考えた。

２　実践例

学習の形態	生活学習	学習グループ	小学部５・６年
題材	仲良く遊ぼう		〈総時数 12 時間〉
本時	風船運びゲームをしよう		〈10／12 時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・きまりのある遊びを通して，友達と関わり合いながら，工夫して遊ぶことができる。 ・役割を意識したり，協力したりする等友達と仲良く関わり合うことができる。	◆集団での活動を，友達と一緒に楽しむ姿　集団参加 ◆遊びや役割の仕方を理解し，友達と一緒に活動に進んで取り組む姿　他者との協働

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
1　挨拶 2　学習内容の確認 3　準備	
4　ゲーム内容の確認 ・ゲームのルールを確認する。 ・ゲーム（ペアと当番）を確認する。 ・当番は，「合図」，「得点書き」を行う。 5　風船運びゲームで遊ぶ ・ペアで活動する。 ・３回戦行う ①移動 ②ゲーム ③数える ④結果発表 ⑤風船を戻す 6　振り返り	○活動するペアや，活動場所を理解しやすくするために，道具や活動場所を色分けする。 ○当番活動の見通しがもてるよう，活動内容をホワイトボードに順番に呈示しておく。 ●友達と一緒に活動できるようにペアで風船を運ぶ道具を用意したり風船の数を数える場面を設定したりする。　集団参加 ●ペアや当番は児童の実態に合わせて決めておく。　集団参加 ●風船を運ぶ際，友達とペースを合わせたり，かけ声をかけ合ったりしながら一緒に取り組むように伝える。　他者との協働 ●友達と言葉をかけ合ったり，協力して活動したりしている児童には，称賛し，全体に紹介する。　他者との協働
7　片付け 8　挨拶	

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）集団での遊びに進んで取り組めるための工夫

・児童が遊びそのものに興味をもち，楽しく遊ぶことができるように，操作しやすい道具や分かりやすい活動場所，単純なルールの設定等をする。
・遊ぶ時間を十分確保できるように展開を工夫し，一度に多くの児童が遊べる場を設定する。
・ペアやチームでの対戦型の要素を取り入れる。

ペアでの遊び

（２）友達と一緒に取り組むための工夫

・自分の役割に取り組めるように,一人一人の実態に合わせた活動の場や，視覚的な支援等を用意する。
・児童の実態を考慮しながら，児童の関わりを広げることを意識したペアやチームを編成する。
・「よいしょよいしょ」や「ゆっくり合わせて」など，児童が集団やペアを意識できるような言葉かけをする。
・準備と片付けも全員で取り組むような場面設定をする。
・互いに関わり合いがもてるように，教員が一緒に活動し，仲介しながら繰り返し取り組ませる。

一緒に取り組む児童の姿

４　実践のまとめ

（１）児童の姿

・友達と一緒に楽しく遊んだり，進んで片付けたりする姿が見られた。
・友達に言葉をかけたり，手を引いたりする姿や，友達の促しに応じて一緒に活動する姿など，互いに関わり合う様子が見られた。一方で，友達の呼びかけに反応せず，自分の思いで動いてしまう様子も見られた。
・友達を待ってあげたり，ペースに合わせて一緒に動いたり，相手の気持ちを考えながら活動していた。
・友達と一緒に活動を繰り返していくことで，新たな友達に関わろうとする様子が見られた。

（２）まとめ

集団での遊びを操作しやすい道具を使い，分かりやすい活動場面や単純なルールを設定したことで，児童は遊びそのものに夢中になって取り組むことができた。その中で，友達に声をかけたり，手を引いたり，友達の促しに応じたりしながら，互いに関わり合いながらゲームを楽しむことができた。更に，一人一人の実態に応じた分かりやすい呈示方法で，役割や準備，片付けを知らせるなど，児童にとって「わかる」，「できる」場や活動を設定することで，協力するよさを味わうことにもつながった。一方で遊びに夢中になり，自分の思いで活動を進めてしまう様子も見られたことから，夢中で遊べることの良さを活かしつつも，「つながる力」に着目した遊びや仕掛けの工夫を再検討していく必要もある。今回の実践を通して相手と関わろうとする気持ちが芽生え，友達と一緒にゲームを楽しんだり，役割を果たしたりする経験を積むことができたと考える。この経験をさらに積み上げ，友達との関わりを広げ，深めていけるよう授業の工夫・改善を今後も継続して取り組んでいきたい。

６　研究のまとめ

３年次は，１・２年次の取組を踏まえた授業作りの方針をもとに，様々な学習の形態で授業実践を重ねてきた。これまでの実践から見えてきた成果について，児童や教員の姿を踏まえて考察し，３年間のまとめとして示す。

（１）各実践から見いだせる有効な取組

ア　夢中になって取り組める学習内容及び活動設定の工夫

小学部段階の児童にとって魅力的で，活動したくなる授業にするために，まずは，**児童の興味・関心を引き出せる学習内容や学習活動を設定**した。〈体育〉の押す活動において，「キャラクターに見立てたマットをやっつけろ」という**ストーリー性のある内容**を設定したり，〈音楽〉の授業では，様々な楽器をたくさん用意し，それを自由に選択して演奏する場面を設定したりすることで，児童は自発的に学習活動に取り組むことができた。

また，ドンパン節や風船運びゲームなど，**シンプルな活動内容**を取り入れたことも，児童にとって分かりやすく，取り組みやすいものとなった。

さらに，**活動に面白味を感じられる工夫**も取り入れた「ダンボールランドを作ろう」では，児童が自分の思いを自由に表現しながら，制作したり，遊んだりすることができた。〈音楽〉のやおやゲームでは，ゲーム性や遊びの要素を取り入れたことで，楽しみながら活動に参加できた。また，教員対児童のフラフープ引きや，風船運びゲームなど，対戦型や競争型の活動を設定したことで授業への活動意欲を高めることができた。これらの工夫により，夢中になって活動する姿や，学習活動に進んで参加する姿を引き出すことができた。

イ　相手と関わろうとする意欲を高める授業展開の工夫

相手に関心をもち，関わろうとする意欲を高めるために，**具体物を介した活動**を取り入れた。例えば，ダンボールランドを作る際に，はさみやテープなどの道具を貸し借りしながら制作したり，制作物で「一緒に遊びたい」と友達を誘ったり，制作物を「先生や友達に見せたい」と実際に見せに行こうとしたりする姿も見られた。また，ハンドベルを「せーの」で合わせて友達と音を鳴らす活動や，友達のリズムを「まねしてみよう」の活動など，楽器を介して「一緒に合わせたい」，「まねしてみたい」といった意欲をもつことができた。

風船運びゲームやスクーターボードを引く活動など，**ペアやグループでの活動を工夫して設定した**ことも，相手を意識し，一緒に関わろうとする意欲を高めることに有効だった。児童の実態や相性を考慮してペアやグループを組むことで，相手を意識しながら活動することができた。また，目的に応じて柔軟にペアやグループを変えたことで，他の児童への関心を引き出し，一緒にやってみようという意欲を引き出すことができた。

ウ　相手と関わりをもてるようにするための教員の支援

児童が自分から相手と関わりをもてるようにするために，まずは丁寧な見取りを行い，児童の内面に着目してきた。友達を言葉で誘ったり，**一緒に遊んだりといった行動として表れる姿だけでなく，友達を見つめる様子や様々な表情，細かなしぐさなどの表出も意識して丁寧に見取る**ことを心掛けた。また，児童が相手を意識したつぶやきや行動を見逃さないように，立ち位置や支援に当たる児童などについて，**教員間で事前に共通理解**を図った。このような丁寧な

見取りのもと，児童の関わりをもとうとしている気持ちや踏み出す際の不安な気持ちを受容した上で，相手との関わりを促したり，教員が実際に関わって見せたりといった一人一人に合った細やかな支援を行ってきた。そして児童が安心感をもって一歩踏み出し，実際に相手と関わる姿が見られた際に，承認や称賛などの言葉かけをすることで，児童は自分の行動に自信をもち，相手と関わろうとする意欲をさらに高めたり，関わりを広げたりすることにつなげていくことができたと考える。これらのことから，相手と関わりをもつためには，**児童の内面を見取る力**と内面を重視するからこそできる**適切なタイミングでの支援（自分の言動が「認めてもらえた」と児童自身が「実感」できるような関わり等）が大切**だということが分かった。

（２）児童や教員の変容

ア　児童の姿

児童は，教員や友達と一緒に活動に取り組む中で，相手に関心をもつだけでなく，自分の興味や思いに気付き，その思いを相手に伝えたり，相手の思いに応じたりするなど，**自分でできる表出の仕方を通して相手との関わりをもち**，少しずつ広げたり，深めたりしてきた。

初めは楽器を鳴らすことに夢中になっていた児童が，楽器を鳴らしている友達に関心を向けるようになったり，自分で作った制作物を一人で楽しむだけでなく，友達に見せたり遊んだりする児童の姿が見られた。また，ゲームを始める際に，遅れている友達に気が付き「行こう」と声をかけたり，手を引いて連れて行ったりと優しく接する姿も見られるようなってきた。さらに，休み時間には，クラスの友達だけでなく，別のクラスの友達を誘って外で一緒に遊ぶ姿や，遊び道具を貸し借りしながら交代で友達と遊ぶ姿など，**授業で育んできた関わりが学校生活の様々な場面でも見られるようになってきた。**

イ　教員の姿

今回，「つながる力」を育むための授業作りに取り組んできたことで，**教員は児童の様子を行動だけでなく，表情の変化や小さなしぐさなど，細かな表出も大切に見取ろうとする意識が高まってきた。**児童の実態や特性から，相手に関心を向けることが少ないと思われる児童であっても，丁寧に見取ることで，活動している相手をじっと見ていたり，相手との活動の中でほほ笑んでいたりと，その児童なりの表出をしていることに気付けるようになり，どの児童も「つながる力」が育ってきていることを実感できるようになった。また，授業に臨むに当たり，教員間の事前の情報交換を細かく綿密に行おうとする意識も高まった。教員同士が役割や立ち位置など適切な支援の方法を考え，共通理解しておくことで，児童の変化を見取り，適切な支援を行うことができ，そのことで，児童が相手に関心をもったり，関わり合ったりする姿が増えていくきっかけになった。

さらに，授業中のみならず，**学校生活の様々な場面で，児童の「つながる力」を意識するようになった。**休み時間での遊びや会話の中で，互いに関わりをもとうとする姿に気付けるようになり，児童の主体性を尊重して見守ったり，必要に応じて仲介役を担ったりするようになった。こうした教員の意識の変化は，児童同士の関わりを増やしていくのに効果的であった。

（３）考察

「つながる力」に着目した授業作りを様々な学習の形態で行ってきた結果，どの授業においても，児童の「つながる力」を育む指導・支援を実践することができた。また，授業作りにおいては，教育環境を三つに分けて考えるという視点を用いたことで，具体的な手立てを考えることができるようになり，授業作りに好循環をもたらした。そして，最終的に有効な手立てとそれぞれの環境との関連を整理することができた（表Ⅱ－３）。

表Ⅱ－３　有効な取組と教育環境

夢中になって取り組める学習内容及び学習活動
・児童の興味・関心を引き出す学習活動や教材　社会　物的
・ストーリー性のあるシンプルな活動内容　社会
・面白みを感じられる活動の工夫　社会
相手と関わろうとする意欲を高める授業展開の工夫
・具体物を介した活動の設定　物的　社会
・ペアやグループでの活動の設定　社会
相手と関わりをもてるようにするための教員の支援
・児童の様子の丁寧な見取り　人的
・適切なタイミングでの言葉かけ　人的

学習題材や学習活動などの社会環境を設定し，**教材・教具などの物的環境を活用**していくことで，児童同士が関わり合う機会を作り出し，相手に関心をもったり，相手と関わったりする意欲を高めていくことができた。そして，**教員による適切なタイミングでの促しや称賛などの支援（人的環境）が入る**ことで，実際に相手と一緒に活動に取り組んだり，互いにやり取りしたりするなどの関わり合う姿を引き出すことができたと考えられる。

授業作りをしていく際には，それぞれの教育環境を適切に関連付けて設定することが大切であるが，小学部段階において「つながる力」を育むためには，特に教員の支援や関わり，そして，教員の存在自体などの**人的環境が大きく関わっているものであり**，**大切な要素である**と言えるだろう。授業作りを通してこの点に気付くことができたことで，日常の学校生活の中においても「つながる力」の視点を大切にし，一人一人の姿を丁寧に見取りながら，支援や指導を重ねることができ，多くの関わりを生み出す結果となったと考えられる。そして，**関わりの積み重ねが**，**相手と関わることへの自信となり**，**同じ相手との関わりを深めたり**，**別の相手や仲間へと関わりを広げたりすることにつながった**と言えるだろう。

小学部における「つながる力」に着目した授業作りを通して，児童は「やってみたい」，「関わってみたい」という意欲をもち，実際にやってみたり，関わってみたりと経験をし，また，その姿を教員が適切に評価，支援することで，児童一人一人の心に「自分一人も楽しいけど，誰かと一緒にも楽しかった」という思いを積み重ねることができた。この思いが「ここちよく相手と関わろうとする力」に結びついたのではないかと考える。それでも，自分からさらに関わりをもてるようにする有効な取組を検討する余地はあるだろう。児童の関わりを引き出し，「つながる力」を育んでいく有効な場面や取組を今後も検討し，授業作りに取り組んでいきたい。

Ⅲ　中学部研究

1　中学部研究主題

互いを認めて仲間と関わり合う力を育む授業作り

2　中学部研究主題設定の理由

中学部では，平成23年度からの４か年にわたり「自分の良さに気付き，目標をもって取り組める力を育む授業作り」と題した研究に取り組み，生徒が**達成感**をもち，**自己肯定感を高めていける**ような授業や学習環境，評価の在り方を検討してきた。その結果，生徒たちは「頑張った，できた」という経験により達成感を得たり，周囲から称賛を受けたりしたことで自信を付け，より意欲的に学校生活を送るようになった。また，**友達の様子を見て自分の行動に目を向け，友達の良いところを取り入れるなどの変容**が見られてきた。

中学部段階は，小学部で培われた他者への関心が更に高まり，人間関係が広がる時期である。学部全体での活動が多いことから，**集団の中の自分を意識する機会**が増える。そうした成長や環境の変化に伴い，教員との関わりが多かった生徒が友達と遊ぶようになったり，接点の少なかった生徒同士の関わりが増えたりするなど，それぞれの実態に応じて友達と一緒に過ごすことに楽しみを見いだしつつある。しかし，関わり方がよく分からないために友達に話しかけられずにいたり，一方的な働き掛けになったりするなどの課題も見られる。

そこで，前研究で取り組んだ，友達と学び合う関係作りを継続し，更に発展させたいと考えた。本校の研究主題に掲げられた「つながる力」を，中学部では**「互いを認めて仲間と関わり合う力」**と捉え，友達との関わりの中で**相手の良さに気付き，互いに高め合う集団作り**を目指したい。その中で自分の役割を進んで果たし，協力して活動する経験を積むことで，**身近な他者**（中学部に所属する生徒。以下「仲間」とする）**から認められる喜びを体感できる**ようにしたい。また，身近な相手と関わる態度やスキル，相互理解の姿勢などを身に付けることで，自信をもって様々な相手と関係が築けるようになると考える。そのような力を学習活動の中で効果的に伸ばしていきたいと考え，本主題を設定した。

3　研究目的

「つながる力」に着目し，生徒が互いの良さや頑張りを認め，仲間と関わり合いながら活動できる力を育むために必要な学習内容や，より良い学習環境，支援の在り方を明らかにする。

4　研究内容及び方法

年次	研究内容	研究方法
1年次	中学部における「つながる力」の整理・分析	・「つながる力」に含まれる要素について整理，分析を行い，中学部段階で育てたい「つながる力」を明確にする。
	「つながる力」に着目した授業作り	・「つながる力」の整理，分析で確認した共通理解事項を基に，授業を計画し，実践する。 ・授業研究会を実施し，今後の授業作りに向けた課題を確認する。

2年次	〈作業〉における「つながる力」を育むための視点を加えた授業作り	・「つながる力」の段階表で生徒の実態を把握する。 ・〈作業〉のねらいである「自分自身の作業の取り組み方を向上させ，働く意欲を培う」ことに「つながる力」の視点を加えて，題材計画及び年間指導計画を見直す。 ・授業評価表を活用して，期待する姿や手立てなどが適切であったかなどの検討を積み重ね，授業改善を図る。
3年次	様々な学習の形態における「つながる力」を育むための授業実践及び授業評価	・「つながる力」を育む上で有効な指導・支援方法の在り方について協議し，授業作りの方針としてまとめる。 ・授業作りの方針に基づいて様々な学習の形態において各教員がテーマを決め,「つながる力」を育むための授業作り及び授業実践をする。 ・授業実践後の授業検討会を通して授業評価を行い，授業改善を図り，さらに実践を積み重ねる。

5　研究経過

（1）１年次

１年次の研究では，中学部で目指したい「つながる力」について協議した。**「他者と適切に関わる力」を出発点**として，整理・分析を重ねた結果，**相互理解や協力の姿勢も併せて育てていくことが大切**であるということの認識を共有した。それを踏まえ，生徒が集団の中で自分の役割を果たすことや協力することを繰り返し学習することで，互いの良さや頑張る姿に気付き，**学び合って成長できる関係**になることを期待する姿として考え，中学部で目指したい「つながる力」を**「互いを認めて仲間と関わり合う力」**と捉えた。

期待する姿
・自分の個性を発揮する ・仲間の個性を認める ・それぞれのできることに取り組む ・集団の中で協力して活動する

⇒

中学部で目指したい「つながる力」

互いを認めて仲間と関わり合う力

授業作りを進めるに当たり，生徒が仲間の良いところや頑張りに目を向けられるようにするためには，一人一人が**充実感や達成感を味わい，気持ちが満たされることが重要**と考えた。そこで，自分の頑張りを十分に意識できるようにし，周囲からも**認められる場面を作る**こと，**仲間の頑張りにも気付ける**ようにすることに留意して授業を行った。学部行事の事後学習において自己評価の方法を工夫するとともに，他者評価を得る場として，全体で振り返りの時間を設定した。その中で，「○○さんが上手だった」等の仲間の良さに触れた発言もあり，友達に認めてもらうことを通して，多くの生徒が自分の頑張りを実感することができた。

また，互いの良さや頑張りを認め合うためには，それぞれが自分の力を発揮し，主体的に活動に参加できることも重要と考え，自分の役割を果たすこと，友達と協力することを目指した授業を行った。レクリエーション活動におけるペアや係分担，振り返り時の発問の工夫により，同じグループの友達に進んで声を掛けて一緒に行動したり，「○○さんと一緒に頑張った」等の仲間を意識した発言が聞かれたりした。

１年次の成果と課題は次のページのとおりである。

成果	・中学部で目指したい「つながる力」を詳しく検討したことで，目指す生徒像のイメージを共有することができた。 ・ワークシートの形式や映像の呈示の仕方の工夫により，自己理解が深まった。 **・他者評価を得る場として生徒一人一人が注目される場面を設定したことで，自分の頑張りを認められた喜びを多くの生徒が実感することができた。** ・協力が必要な活動の経験を通して，仲間を意識した行動が見られたり，仲間の頑張る姿に気付いたりするようになってきた。 ・授業の中で期待する姿や授業の評価の観点を検討し，共通理解を図って授業することができた。
課題	・仲間の良さや頑張りに気付くことができるように作業学習を積み重ねていくことで， 互いに認め合える学習集団を目指していく。 ・授業作りの取組で実践した指導・支援の工夫を，別の学習の形態にも広げていく。

（２）２年次

２年次の研究では，〈作業〉において「つながる力」の指導の視点で授業作りを行った。〈作業〉の中の活動を「つながる力」と関連付けて見たときに，**友達や先輩の作業の様子を見て**工程や道具の扱い方を覚えたり，**互いの取組を称賛し合って**自信を付けたり，**班員全員で協力して**生産性を向上させたりする場面は，「自己理解」，「他者理解」，「他者との協働」の三つの要素と関連することが分かる。そこで，〈作業〉において「つながる力」を育成するに当たっては，「職業生活に必要な基礎的な能力や態度」である「作業活動への集中力・持続力，挨拶，返事，報告，道具・材料の扱い，安全に働く態度，責任感，働く意欲」を養うといった**〈作業〉本来のねらいを達成しつつ，互いの良さに気付き，認め合える態度を育てるための指導**の視点を加えることとした。具体的には，友達や先輩の作業の様子を見学したり，作業班で協力して活動したりするなどの学習場面を設定し，〈作業〉の年間指導計画を再構成した。

新しく加えた題材の概要は以下のとおりである。

題材名　**「互いの班を知ろう・体験しよう」**

〈題材目標〉
（１）自分の作業の取組について振り返り，良い点や課題となる点について気付くことができる。
（２）友達や先輩の良い取組に気付き，自分の取組の参考にしようとすることができる。
（３）目標達成（課題解決）に向けて意欲的に取り組み，技能・態度の向上を図ることができる。
（４）互いの作業班の活動を見たり体験したりして，二つの作業班の活動内容を知ることができる。
（５）二つの作業班が合同で活動することで，協力し合うことの大切さについて気付くことができる。

◆目指す「つながる」姿及び【関連する要素】
・自分の良さと課題に気付く姿　【自己理解（内面）】
・互いに良い点を認め合い見習おうとする力　【他者理解】
・協力してグループ活動に取り組む姿　【他者との協働】

題目	実施時期	主な学習活動
友達の作業から学ぼう	第１回 校内実習終了後 ２学期開始から 約１か月経過後	・友達や先輩の作業の様子を見て，良い取組や参考になる取組を見つける。 ・友達や先輩の良い点を参考にして，自分の取組を振り返ったり目標達成のために役立てたりする。
製品販売を成功させよう	学校祭前後	・二つの作業班合同で，学校祭の製品販売会（準備， 販売，片付け，反省・評価）を行う。
もう一つの作業班で 体験しよう	１年間のまとめや次年度への目標を考える時期	・所属以外の作業班の活動を見学したり，体験したりする。（先輩や友達から学ぶ，後輩や友達にアドバイスする，という学習場面を設定する。）

授業実践を重ねる中で，友達や先輩の良いところに注目した生徒は，作業が思うようにうまくいかないときに良い取組をしている友達や先輩にどうすればよいか聞いている様子が見られた。また，手本となった生徒はより丁寧に，且つ，正確に作業しようとする姿が見られた。このことから，**生徒が互いに認め合うことを通して，自己の取組を振り返り，改善・向上させようとする意欲や態度の高まりを示した**と考えられ，**〈作業〉の授業に「つながる力」の視点を加えることは，〈作業〉本来のねらいにも迫ることができ，効果的である**ことが分かった。

また，PDCA サイクルに基づき，授業評価表を活用して授業改善を行った。それにより，授業の中で見られた成果を２回目の実践で活かすことができたり，教材の有効性を客観的に評価できたりした。

２年次の成果と課題は以下のとおりである。

成果	・〈作業〉においても，「互いに認め合う」関係性を構築することが可能であり，〈作業〉本来のねらいの達成にも有効であった。 ・PDCA サイクルに基づいた授業作りは，生徒の様子や変容を多面的に捉えることができ，手立てを工夫・改善していくことができた。 ・「つながる力」の視点を加えた指導の重要性を教員が再認識することにより，積極的に実践しようとする意識が高まった。
課題	・様々な実態の生徒に対する効果的な指導方法を，授業作りを通して追求していく。 ・PDCA サイクルに基づいた授業作りをさらに進め，「互いに認め合い，関わり合う態度の育成」における有効な指導・支援の在り方を見いだしていく。

（３）３年次

中学部では，１・２年次の研究の結果，〈生活学習〉や〈作業〉において「つながる力」の視点を加えた授業実践は，授業本来の目的を達成するのにも非常に効果的であることが確認できた。これらを踏まえ，今年度はこれまでの実践を活かしながら**様々な学習の形態に実践の場を広げていく**こととした。また，これまで「自己理解」や「他者理解」に着目して授業を実践し，自分の良さや相手の良さを認めることで「関わり合う力」が育まれることも分かってきている。３年次は「自己理解」や「他者理解」という視点に加え，集団と関わる「集団参加」や協力して活動する「他者との協働」という視点も加えて実践することにした。

中学部における授業作りの方針は以下のとおりである。

①自分の良さや仲間の良さに気付くことができる授業
②仲間から認められることに喜びを感じられる授業
③意欲をもって仲間と学び合う授業

①自分の良さや仲間の良さに気付くことができる授業

互いを認めるためには，**自分や仲間の良さに気付き，自分や相手のことを理解しよう**という気持ちが育まれることが大切なのではないかと考え，設定した。授業の中で自分の活動を振り返ったり，相手の活動を見つめたりする中で，**自分や相手の存在を意識**できるようにしたい。

１・２年次の実践では授業の中で自分の取組を振り返る自己評価や仲間に自分の取組を評価してもらう他者評価を行い，生徒たちは自分の良さや相手の良さに気付き，伝え合うことができる

ようになってきた。自分の良さに気付き，それが仲間から認められることで自己理解が深まり自己肯定感も高まってきている。そこで，今年度の授業においても，自分や相手の良さに気付くことで自分や相手への関心を高めたり，理解を深めたりするようにしたいと考え，**「自己理解」や「他者理解」の要素を授業の根幹に据え**ながら，授業を組み立てていくこととした。

②仲間から認められることに喜びを感じられる授業

認め，認められるという生徒同士の関係性を築き，高めていくためには**認められたことを実感でき，喜びを感じられることが大切**なのではないかと考えた。そのため，授業の中では**役割を果たしたり，協力したりする場面も意図的に設ける**こととした。生徒が役割を果たし，活動を仲間に認めてもらえることで，自分の活動が仲間の活動の一部であったことを意識するとともに，認められたことを実感し，喜びを感じて仲間との関わりを深めていくことにつながると考えた。また，協力して活動したり，一緒に活動したりすることは，自分の役割だけではなく**仲間の役割にも目を向ける**ことになり，**仲間の良さを見つけて認めることにつながる**と考える。

③意欲をもって仲間と学び合うことのできる授業

生徒が仲間と学び合う場面において，**学習活動に主体的に参加**できるようになって欲しいと考えた。そのため，授業においては生徒たちにとって**分かる・できる状況**を作り，主体的に参加しようという気持ちを育むこととした。仲間との活動において，活動が生徒の興味・関心に基づいていたり，見通しがもてたり，発言を十分にくみ取ってもらえるような状況であったりすることで，生徒たちは活動に意欲的に取り組むことができ，**自分の意見を仲間に伝えたり，仲間の意見を聞いたりしようという気持ちを育む**ことができると考えた。仲間の様々な思いを知ることで，仲間の存在に気付き，関わろうとする気持ちを育むことができると考え設定した。

以上の三つの方針をもとに教員一人一人が授業を作り，実践を進めていくこととした。授業を実践するにあたってはそれぞれがテーマを決め，授業ごとに**授業研究会を開いて検討を重ねる**こととした。授業研究を進めるにあたって，授業者が焦点化したところをポイントとして授業評価表に記し，参観者は**ポイントを絞って授業を評価**した。

授業検討会では「互いに認め合い，関わり合う態度の育成」のための授業内容の検討を行い，生徒の気付きや行動から感じ取れる成長について教員同士が意見交換しながら，授業を改善していった。これにより，授業者は自分の授業について，多面的・多角的に振り返って次の授業に活かすことができ，授業力を向上させることになった。同時に，参観者は授業者では気付きにくい生徒の細かな言動を捉える経験を積み，生徒を見取る力を向上させることになった。

次のページから中学部の六つの実践について報告する。

実践Ⅲ－１　一人一人の気付きや思いを大切にし，友達と学び合う態度を育む授業作り

１　実践のねらい

本学級の生徒は，活動をともにする中で，少しずつ互いのことを意識し，友達の良さに気付き始めている様子が見られる。その一方で，感情の調整が難しい等，関わり合いに課題も見られる。

学級の中で，安心して自分を表現することができ，それぞれの良さに気付き合いながら関わり合う姿がさらに広がっていくことを期待している。そして，それは学習場面においても，生徒同士が主体的に学び合う姿にもつながっていくと考える。野菜の観察という学習を通して，より多くのことを学ぶとともに，友達との関わりも広がっていくことを願い，本実践テーマを設定した。

２　実践例

学習の形態	生活学習	学習グループ	中学部１年
題材	野菜の観察をしよう		〈総時数６時間〉
本時	友達と一緒に野菜の観察をしよう		〈３／６時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・野菜（ミニトマト，ポップコーン，枝豆）を観察する中で，生長の変化に気付き，観察したことを記録することができる。 ・自分の調べたこと等を，友達の前で発表することができる。	◆自分の好きなことや得意なことが分かり，それを生かして主体的に活動する姿　自己理解 ◆友達と一緒に調べたり，前で発表したりする等して，集団での活動に参加する姿　他者との協働

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
１　挨拶 ２　学習内容の確認 ・二人組を作り，植物の高さや葉の形を調べることを確認する。 ・調べたい野菜を選ぶ。その希望等を基に，二人組を作る。	●生徒のやってみたいという思いが表現できるように，調べたい野菜や，自分の取り組む観察ノートの種類を選ぶ機会を設ける。　自己理解 ●どう二人組を作るのか，二人組でどうやって高さを調べるのか等，うまくいくような方法のヒントを，場面に応じて伝えていく。　他者との協働
３　野菜の観察をする。 ・二人組で紙の付いた物差しを使い，野菜の高さを調べる。一人は物差しを持つ。もう一人は高さを確認してシールを貼る。 ・各自で観察ノートを書く。 ①葉の形選び（葉の形を見て，正しいものに○を付ける。） ②絵を描く，塗り絵（角度の異なる２種類のモノクロ写真から１枚選び，色を塗る。） ③気付きを記入する。もしくは感想を選択する。	●生徒自身ができること，得意なことを意識して，それを生かして主体的に学ぶことができるように学習活動を設定する。観察ノートについては，実態に応じて取り組みやすいように複数のパターンを用意する。　自己理解 ●二人組で高さを調べたり，近くに座って同じ野菜を観察したりする中で，友達と一緒に学習に取り組めるような場面を設定する。　他者との協働 ○時間があれば，水やりや写真撮影（野菜，友達の頑張っているところ）を行う。
４　観察したことを発表する。 ・二人組で前に出て，気付いたことや感想を発表する。	●観察した内容，その時の様子，二人組で協力する態度等，良かったところを称賛することで，学習の気付きを共有できるようにする。　集団参加

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）集団の中での主体的な学びにつなげていくための工夫

・本人の「やってみたい」,「好き」といった思いを大切にする。
　３種類の野菜の中から，観察したいものを自ら選ぶ場面を設定する。
・本人の思いを受け止めながら，二人組や三人組を作っていく過程を大切にする。
・一人一人の得意なことを活かして学習活動を設定する。
　また，学習への参加機会も十分に確保できるよう配慮する。

二人組で観察している場面

（２）友達と気付きを共有できるための場面設定の工夫

・物差しを使って野菜の高さを調べる学習活動では，物差しを持つ人と高さを確認してシールを貼る人というように，役割分担することが必要な状況を設定する。
・野菜を観察する学習活動では，二人が隣合わせで座り，お互いの観察ノートを見合いながら取り組む場面を設定することで，友達が考えていること等への気付きを促す。

葉の感触を伝えている場面

・発表の際には，野菜の高さや葉の感触等を，みんなに伝える場面を設ける。それぞれの野菜の特徴や高さ，葉の形や感触等といった違いについて，気付きが共有できるように配慮する。

４　実践のまとめ

（１）生徒の姿

・一人一人の思いを受け止める支援と，見通しをもって十分に活動できる学習環境の設定があることで，主体的に活動することができた。
・二人組等の活動を積み重ねていく中で，少しずつ友達のことが分かってきた。それに応じて，互いに声をかけ合う様子が少しずつ増えてきた。
・友達と気付きを共有しながら学習したことで，友達が気付いたことや関心をもって観察したポイント等に触れることができた。友達と一緒に学び合うことで，一人で学ぶよりも，多くのことを知ることができた。

（２）まとめ

一人一人の思いを受け止める教師側の態度や，好きなことや得意なことを生かした学習活動の展開等に配慮することで，集団の中であっても，自分を表現することが少しずつできるようになっていった。主体的に活動できる環境があることで，相互に発信し合う関わり合いを，それぞれの関係性において少しずつ作り出すことができた。今後も，集団の中で二人組や三人組等といった学習形態を取り入れ，互いの良さや特徴を理解し合ったり，自分と友達の考えていることの違いに気付いて受け入れたりすることで，友達との関わりの中で自分の力を発揮し，互いの良さや気付きを共有し，高め合える学習場面を大切にして積み重ねていきたい。

実践Ⅲ－２　二人組での制作活動を通して友達との関わりを深められる授業

１　実践のねらい

中学部になり，本校小学部で一緒に学んできた３人に，異なる小学校から新しい仲間３人が加わった。新しい仲間との関わりが少しずつ見られるようになってきているが，自分から関わりをもとうとすることが少ない生徒も見られる。「つながる力」を育むためには，友達との関わりを充実させていく過程を大切にすることが必要と考えた。そこで，関わり合いの最小単位である二人を意図的に編成し制作活動を行う授業を実践することにした。友達と一緒に課題を解決し最後までやり遂げる経験の積み重ねをさせたい。新しい友達と向き合って活動することを通して，自分や相手の考えを知り，認め合い，相手との接し方や距離感等について学んでほしいと考えた。

２　実践例

学習の形態	生活学習〈余暇と私〉	学習グループ	中学部１年
題材	友達を作ろう		〈総時数６時間〉
本時	『１の１すごろく』を作ろう		〈５／６時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・友達と一緒にすごろくのお題を考えることができる。 ・友達と一緒にお題カードを制作することができる。	◆自分でお題を考える姿　自己理解 ◆友達の意見を聞き，自分の意見との違いに気付く姿　他者理解 ◆二人でお題を決め，制作する姿　他者との協働
学習活動の展開	**○指導上の留意点　●「つながる力」との関連**
１　挨拶 ２　学習内容の確認	○本時の学習内容を呈示し，活動の見通しをもたせ，安心感をもって取り組めるよう配慮する。
３　すごろくのお題カード作り ・二人組になって，みんなができそうなお題を意見を出し合って決める。 ・お題が思いつかないようなときには，下記の「～する」カードから二人で考えて選ぶ。 ○○さんと握手をする。 ○○さんとじゃんけんをする。 みんなと手をつないでｽｸﾜｯﾄを５回する。　など。 ・お題カードを協力して制作する。 ４　振り返り ・本時の感想を発表する。	○前回の制作で，協力して作ったことなどを想起させることで，今回も同じ二人で取り組む意欲を高めさせたい。 ●すごろくのお題でやってみたいと思うことは何か考えるよう投げかける。思いつかない生徒には，自分ができるアクションなどにどんなものがあるか，問いかける。　自己理解 ●相手の考えを知り，二人の意見をどうすり合わせるのか，みんなができそうなものという視点で考えるよう，机間指導する。　他者理解　他者との協働 ●二人で一緒にカードを作れるよう見守り，制作に必要な素材や道具を自分たちで選べるように用具コーナーを設置しておく。　他者との協働 ○完成したすごろくは，自分たちが作った世界で一つだけのすごろくであることを強調し，みんなで作ったという気持ちを共有できるようにする。 ○二人組で協力する態度にも目を向けるよう促す。
５　次時について ６　挨拶	

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）関わりを深めるための工夫

どっちの模様がいい？

・本実践においては，二人組を固定し，互いが向き合う時間を多く設定することで，互いの性格や心地よい接し方などを知る機会を増やす。

・二人組を編成する際には，感覚の過敏さに配慮し，互いの刺激が強すぎないようにしたり，それぞれの生徒の目指す「つながる」姿との兼ね合いを考慮したりする。また，相手の意思を推し量ったり，相手の投げかけに応じたりする活動場面を設定し，「つながる」姿に迫れるようにする。

（２）二人で課題解決できるようにするための工夫

・選択する場面を多く取り入れる。二つの選択肢から，徐々に選択肢の数を増やし難易度を上げていく。自分が選んだものの押しつけではなく，必ず相手の意見を確かめるよう促す。

・教師の出した選択肢から選ぶだけでなく，自分たちで考えてもよい場面を設定する。

・二人で制作する中で生まれる疑問や葛藤を大切にし，それぞれの課題解決場面を注意深く見守り，二人で出し合った考えが最大限に作品に生かせるように支援する。

・生徒の主体的なやり取りを尊重し，考えを一つに絞れないときや思いを伝え合う場面での，適切な助言や方向性を教員間で共有しておく。

４　実践のまとめ

（１）生徒の姿

・実践当初は，選択場面で自分の意見を通そうとしたり，相手とどのように関わったらよいか分からず戸惑い，意見を交わさずに一人で活動し始めてしまったりする生徒もいたが，二人組での活動経験を積み重ねるにつれて，相手を意識し二人で課題を解決するという意識が高まった。

・相手の考えを聞こうと聞き方を工夫したり，相手と自分の考えが異なったときには，自分の気持ちを伝えて受け入れてもらおうとしたりする姿が見られた。

・友達の意見を受け入れつつ，自分の意見を出せるようになった。

・相手が出来ることは相手が行った方がよいと分かり，関わりの程よい距離感を意識できていた。

・振り返りでは，「〇〇さんと一緒にやれて楽しかった。うれしかった。」という発言があった。

・他の二人組が作った作品にも興味をもち，良いところを伝えることができていた。

（２）まとめ

二人組を固定することで，活動する毎に互いをよく知り，認め合い，安心感が生まれ，生徒の成長を促進することができた。普段の生活の中でも変容が見られ，聞き方や伝え方を工夫したり，仲間の課題ばかりを指摘することが減り，良いところを伝えたりする姿があった。これは二人組での活動を通して身に付いたことが活かされたと考えられる。また，関わり合いが苦手な生徒にも変容が見られた。自分から誘う行動や友達の言動を待つ姿である。これは，相手が自分の意見を聞いてくれることや，その意見に対して考えてくれる，自分の出来ることをやれるということを体験し，相手が自分を認めていることが分かり，友達に安心感や信頼感といった気持ちをもったからだと考える。以上のことから，今回の二人組での活動は，自分や相手を認める言動を増やし，人との関わり方が広がり，「つながる力」が高まる上で有効であったと考えられる。今後も，生徒にとってより良い関わり合いが学べるよう，試行錯誤しながら授業作りに取り組んでいきたい。

実践Ⅲ－３　自分の役割を果たしながら仲間を意識できる授業作り

１　実践のねらい

二年生に進級し，先輩になったという意識から，何事にも意欲的に取り組もうとする様子が見られる。しかしながら，学級集団としては個々の活動が目立ち，意欲的に活動しているものの，そこに「仲間のために・仲間と一緒に」という集団への意識は薄いように感じられた。

本学級の生徒には，自分の係活動を全うし，学級の一員としての自分を感じることができ，互いに支え合いながら過ごしてほしいと考えている。そのためには，自己理解を深めることができるように，日々の係活動の取組を振り返ったり，友達から客観的に評価されたりする場面を取り入れるとともに，一単位時間の授業の中でも役割分担をしながら，一つの目標に向かって全員で作り上げていくような協働する場面を繰り返し経験できる授業作りを実践したいと考えた。

２　実践例

学習の形態	生活学習	学習グループ	中学部２年
題材	二学期の係活動を確認しよう		〈総時数５時間〉
本時	給食の係活動一覧表を作ろう		〈４／５時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・自分の役割が分かり，取り組むことができる。 ・友達と一緒に係活動一覧表を制作することができる。	◆自分の役割を果たす姿　自己理解 ◆仲間と協力しながら，一つの物を作ろうとする姿　他者との協働

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
1　挨拶 2　学習内容の確認	○本時は，給食時の係活動一覧表をそれぞれの役割に分かれて作成することを伝え，目的を明確にする。
3　給食時の係活動を再確認する。	○どのような表ができればよいのか，見本を示す。
4　係活動一覧表を制作するために，本時の役割を自分たちで決める。 ・線・文字書き ・顔写真等の切り取り ・それぞれの場所に分かれて制作する。 教室前方（線・文字書き） 教室後方（写真の切り取り） ・各役割が終わったら，教室前方の大テーブルに集まる。 ・全員で確認しながら，顔写真等を模造紙の表に貼る。	●制作するときに，誰と何をするのか役割が分かるように取り組む内容や写真を呈示する。自己理解　他者理解 ●顔写真を使用して，自分のやりたいことを伝えたり，友達のやりたいことを聞いたりしながら，生徒同士で役割を決めるように促す。　他者との協働 ○はさみを使用するときは，扱いに留意するよう伝える。 ○振り返りのときに，生徒の発表と併せて映像を見ることで，生徒同士の良い関わりが分かりやすいように，取組の様子をタブレット端末で録画しておく。
5　掲示	●全員で係活動一覧表を貼るように促し，完成を全員で喜び合えるようにする。　他者との協働
6　振り返り 7　挨拶	●友達と一緒に取り組んだ感想を発表するように促す。発表内容が録画してあるものは，電子黒板に映し，その様子を全員で共有できるようにする。 自己理解　他者理解

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）自己理解を促すための役割の明確化

・分かりやすい活動内容と分担を設定し，生徒の見やすい場所に掲示することで役割を明確にする。

・振り返りの場面では，写真や動画を活用し，自己の評価だけでなく，仲間からも評価される場面を設定し，それぞれが分担された役割を果たしていくことが学級のためになっていることを実感できるようにする。

・日々の係活動は，個人目標を立て，係を意識して活動できるようにする。

役割分担の明確化

（２）関わり合いながら，他者理解を深めるための工夫

・活動内容に応じて学習集団を小集団から大集団へ変化させ，個々の密な関わりと仲間を意識した関わりを繰り返し経験できるようにする。

・友達の良さに気付いたり，良い取組を取り入れたりしやすくするために，互いの様子が見えるような座席配置や活動内容を設定する。

・友達と関わりやすい状況を作るために，道具を友達と共有したり，友達と協働することで役割を果たせるような活動内容を設定したりする。

学習集団の変化

４　実践のまとめ

（１）生徒の姿

・係活動の目標や振り返りを全員で共有することで，友達が取り組んでいることを尊重し，友達が係活動を忘れているときは，名前を呼んでやるべきことを伝えるようになった。

・仲間と活動するときには，一緒の役割になった友達に声を掛けるようになり，友達と関わろうとする姿が見られるようになった。また，友達に「やってみる？」と聞いて譲り合ったり，友達が困っているときには，「手伝うね。」と声を掛けたりして，互いに支え合いながら活動できるようになってきた。

・友達が手際よく制作している姿を見て，模倣しようとしたり，道具を共有することで，友達と道具を貸し合い，「どうぞ」「ありがとう」のやりとりが自然に見られるようになったりした。

（２）まとめ

これまで個々に活動をしていた生徒が上記のように変容してきたのは，授業で積み重ねた経験の中で，自分の行動が仲間にどう影響するのかが分かり，「学級の中で自分が役に立っていること」を実感できたからであると考える。この自己肯定感の高まりが，学級への所属意識へとつながり，「仲間のために」行動しようとするきっかけになった。

日々の生活や係活動の場面でも，友達の様子を敏感に察知し，困っていたら手助けをするようになったり，困っていることを自分から発信した生徒は，受け入れてもらえた，助けてもらえた嬉しさを経験することで，自ら「手伝って」と友達に言うことができるようになったりした。

このように，学級の一員としての自覚が芽生えたことで，仲間を大切にできるようになり，互いに支え合える学級集団へと発展したと考えられる。これまでの授業での経験が，授業の中だけではなく，日々の生活の中でも活かされ，好循環が生まれていると言える。

実践Ⅲ－４　互いの良さを伝え合い，関わりを広げる授業作り

１　実践のねらい

本学級の生徒は，互いの存在を意識し，一緒に活動する仲間であるということを認識して学習に取り組むことができる。しかしながら，積極的に友達に関わり，活動を進めることはまだ難しく，教員の仲介が必要な場面が多い。そういった背景には，自分には得意なことがある，自分の良い所は〇〇だという自信がもてないことや，友達に自分の気持ちを直接伝える経験の不足があるのではないかと考えた。そこで，本学級の生徒の実態から，友達同士で良い所を伝え合う中で自分の良さに気付いたり，友達の良い所を見ようと他者に関心をもったりできるようになってほしいと考えた。そういった姿を目指すことで，関わり合いながら活動に取り組む学級を目指したいと本テーマを設定した。

２　実践例

学習の形態	生活学習	学習グループ	中学部３年
題材	校内実習を頑張ろう		〈総時数４時間〉
本時	作業の取組を振り返ろう		〈２／４時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・友達の作業の様子を見て，良い所を見付けることができる。 ・友達の良い所を，友達に直接伝えることができる。 ・自分の良い所，友達の良い所に気付くことができる。	◆友達の作業での取り組みを見て，良い所を見付ける姿 他者理解 ◆友達からの意見を受けて，自分の取り組みを改めて考える姿 自己理解

学習活動の展開	〇指導上の留意点　●「つながる力」との関連
１　挨拶 ２　学習内容の確認	〇本時の学習は，友達の良い所をたくさん見付けることが目標であることを伝える。
３　友達の取り組みを見て，どのような良い取り組みをしているのかを考える。 ・作業中の映像を見て，友達が頑張っている所や，工夫している所，見習いたい所を挙げる。	〇友達の課題ではなく，良い所を見付けるという観点で考えていくことを伝える。 ●「すごいな」「上手だな」という言葉が出た際には，どの場面のどこがそう思うのか具体的に挙げさせ，生徒それぞれが理解できるよう，話を付け加えるようにする。 他者理解
４　友達に良い所を伝える。 ・短冊に，気付いたことを具体的に書き込む。 ・書いた短冊は，本人の所に持って行き，読み上げてから渡す。 ・短冊をもらったら，自分のワークシートに貼る。	●友達の様子を見て，感じたことを短冊に書いて，その友達に渡す。また，書いてある内容を読み上げながら渡すことで，自分の思いを言葉で伝える経験ができるようにする。 自己理解
５　自己評価と他者評価を比較し，違う所があることに気付く。 ・これまで自分が気付かなかった内容に印を付ける。	●友達から見た自分の良い所を確認し，新たな自分を発見し，自分にはたくさん良い所があるから，今後頑張って行こうとする気持ちをもてるようにする。 自己理解
６　次時について ７　挨拶	

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）自分や友達の良さに気付けるようにするための工夫

映像を活用する場面

・生徒が頑張って取り組んでいる姿や，頑張った結果できるようになったことを，随時取り上げ学級全体に紹介する。
・写真や動画を活用し，客観的に捉えられるようにする。必要に応じて活動する姿をその場ですぐに振り返り，教員と一緒に確認する。
・教員は，生徒のモデルになることを意識し，生徒の良い面を積極的に認め称賛する姿勢で支援にあたる。

（２）自分の思いや考えを友達に伝えるための指導の工夫

・「～しよう」，「～してくれてありがとう。」，「～した方がいいよ。」等の言葉を使って，言葉に出して伝える練習を行う。言い方や声の大きさ等について教員と一緒に練習を繰り返し，表現の仕方を具体的に学べるようにする。
・伝える側と聞く側の両方を日常的に経験できるよう，学級の日直活動の中に，教員から示された指示書の内容を学級全体に伝える役割を位置付けた。
・友達に伝えるべきことを教員に伝えてきた際には，踏み出せない気持ちを受けとめつつ，まずは自分の言葉で友達に伝えることを促す。様子を見守りながら，必要に応じて言葉を補うなどして仲介する。

４　実践のまとめ

（１）生徒の姿

修学旅行にて，
友達と一日の感想を伝え合う

・学習を始めた当初は，友達の良い所と聞くと，「すごい」「かっこいい」などの決まった形容詞しか出てこなかったが，具体的な場面や自分との比較で友達を評価する発言が出るようになってきた生徒がいた。
・友達への言葉が強くなってしまったり，上手く伝えられずに乱暴になってしまったりする生徒がいたが，自分の気持ちを分かってもらおうと，様々な表現を使い関わろうとするようになった。
・伝える経験を積む中で，自分で友達に思いを伝えらえられたという実感を得たり，伝わるように話そうと努力したりする姿が見られるようになった。また，相手からの言葉を聞こうとしたり，内容を理解しようと注意を向けて聞いたりする姿も同時に見られるようになってきた。

（２）まとめ

今回の実践で，自己理解を深めていくことで，友達の良い所も認めることができるようになり，相手のことを考えた伝え方を身に付けることができた。そして，「伝わった」「分かってもらえた」という経験ができ，さらに友達に「分かってほしい」，「伝えたい」という意欲につながり，学級内や他の場面でも関わりを広げることができた。

また，教員が仲介する場面と生徒同士で解決する場面を意図的に設定することで，生徒が自分で考えたり，周りの様子を感じたりしながら関わろうとする姿を引き出すことができるという点が有効だった。今後も実践を継続し，場面の設定や教員の関わりについて具体的に考えていきたい。

実践Ⅲ―５
「つながる力」の視点を加えた〈体育〉の授業
～準備運動を中心に～

１　実践のねらい

中学部では，全学年で〈体育〉の授業を行っている。〈体育〉において「つながる力」をどのように育んでいくかを考えると，毎時間取り組んでいる準備運動を工夫することで，友達と関わり合いながら楽しく運動する経験を確実に積み上げていけるのではないかと考えた。そこで，準備運動に必要な運動動作を踏まえた上で，ペアや小グループでの運動を取り入れ，体を動かす楽しさやできた喜びを共感できることを目指して，実践を行うことにした。

２　実践例

学習の形態	体　　育	学習グループ	中学部１～３年
題材	ボール運動		〈総時数４時間〉
本時	ボールを使っていろいろな運動をしよう		〈１／４時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・ペアや小グループで，ボールを使ったいろいろな運動（投げる，蹴る，対面パス，ドリブルリレー等）をすることができる。 ・ペアやメンバーの動きをよく見て，運動することができる。	◆互いの動きを見合いながらタイミングを合わせて運動するなど，ペアや小グループでの活動に意欲的に取り組もうとする姿 集団参加　他者との協働

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
１　挨拶 ２　学習内容の確認	
３　準備運動 （１）ラジオ体操	○ラジオ体操の曲や号令に合わせて体操するよう指示する。 ○対面で示範したり，体を支えたりするなど，生徒の実態に応じて支援する。
（２）ペアによる運動 ①対面で両手をつなぎ，体をくぐらせる。 ②対面で両手をつなぎ，床に付くように手を伸ばす。	○各運動について教師が示範をし，どんな動きをするのか，注意点は何か等，分かりやすく伝える。 ●相手やグループ内のメンバーの動きをよく見てまねたり，かけ声をかけ合ったりするとタイミングが取りやすいことを伝え，互いの動きに注目を向けるよう促す。　集団参加　他者との協働
（３）小グループ（学年毎：６名）による運動 ①手をつないで円を作り，教師の合図に合わせて，ジャンプ→しゃがむ，の動作をする。 ②教師の合図にタイミングが合ってきたら，生徒同士でかけ声をかけたり腕を振ったりしながらタイミングを合わせ，ジャンプ→しゃがむ，の動作をする。 ③手をつないで円を作り，足踏みゲームをする。	●ゲーム性のある運動を取り入れるなど意欲喚起を図り，楽しみながら相手や周囲の動きを意識して運動できるようにする。集団参加　他者との協働
（４）小グループ（学年縦割り：６名）による運動 ・（３）①②③に同じ。	●３年生をリーダーに据え，生徒が主体的に活動に取り組むようにする。　集団参加　他者との協働 【以下省略】

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）相手の動きを意識して，運動できるようにするための工夫

息を合わせて

・相手の動きをよく見て，自分の動きを合わせる運動を様々なバリエーションで設定し，繰り返し取り組んでいく。
・個々の生徒の身体や動きの特性を把握し，相手の動きを意識した運動が効果的に行えるようなペアやグループ編成をする。
・生徒による示範を行い，生徒同士が互いにモデルとなりイメージをもって運動できるようにする。
・互いの動きがよく見えるような生徒の配置にする。

（２）生徒が興味をもち，意欲的に運動できるようにするための工夫

周りをよく見て手つなぎジャンプ

・動きが単純で，誰にでもできる運動を取り入れる。
・様々な発達段階の生徒に対応できるよう，難易度の調整がしやすく，また，発展性のある運動を取り入れる。
・自分の掛け声によって相手も一緒に動くという場面から，自分の思いが相手に伝わる実感をもてるようにする。また，教員は生徒の姿を肯定的に受け止め，安心感のある中で運動できるようにする。

４　実践のまとめ

（１）生徒の姿

・相手の動きをまねようとしたり，掛け声を大きくしたり，つないだ手を大きく振ったりするなど，タイミングを合わせるために仲間と工夫し，楽しく活動する様子が見られた。
・タイミングが合った時に喜び合ったり，動きがずれてしまう友達に「がんばれ」などと言葉かけをしたりする様子が見られた。
・手をつなぎジャンプの動きから座る動作に変化させる等，誰もができる簡単な動きを取り入れることで，できることを喜び合い，楽しんで取り組む様子が見られた。

（２）まとめ

中学部全体での授業という特性から，学年の枠を超えた様々な関わり合いを引き出すことができた。特に，運動課題を達成するという共通の目的に向かって，それぞれの生徒が息を合わせて身体を動かしたり，声を掛け合ったりして協働し，達成感や満足感を共有できたことは，「つながる力」を育む視点での授業として成功だったと考える。また，異学年の仲間と，グループで運動したことで，結果として新たな人間関係作りができ，関係性を広げていくことができたことも成果と言える。また，本実践を通して，教員の助言や支援によって活動の深まり方が大きく変化するという場面を体感でき，「つながる力」を育む上で，教員が重要な役割を担っていることにも気付くことができた。一方で，教員の関わり方やそのタイミング，程度などについては改善の余地があるため，実践を積み上げる中で探求していきたい。

本実践での友達と一緒にできたという経験が，〈体育〉への興味・関心や意欲を高め，運動能力の向上といった本来のねらいの達成を促進させるだけでなく，学校生活のあらゆる場面に良い影響をもたらすことを願い，今後も取り組んでいきたい。

実践Ⅲ－６　仲間と一緒につくることを楽しむ音楽の授業

１　実践のねらい

音楽は日常の様々な場面で触れる機会があり，曲を聴いたり，演奏したり，歌ったりと様々な形態で思い思いに楽しむことができる。音楽は一人で楽しむこともできるが，年齢や言葉などに関係なく誰もが親しめるものであるため，様々な人と共有して楽しむこともできる。だからこそ，〈音楽〉の授業においては，音楽を媒介として集団で活動する中で，仲間と一緒に活動して楽しいという気持ちや，仲間と一緒にやってみたいという気持ちを育みたいと考えた。また，音を作るときにはできるだけシンプルにして，音を心地良いものとして感じられるような活動を設定することも重要と考えた。仲間と一緒にタイミングを合わせて音を出したり，音楽を聴いて音と動きを合わせたり，仲間と一緒に楽しみながら歌ったりすることで，自ら仲間と音楽活動をしたいと思えるような活動を目指して授業を実践することとした。

２　実践例

学習の形態	音　　楽	学習グループ	中学部　１～３年
題材	音や声を合わせよう		〈総時数９時間〉
本時	身体で音を出してみよう		〈２／９時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・自分のパートを歌うことができる。 ・３拍子のリズムを感じることができる。	◆仲間と一緒に声を出すことを楽しむ姿　集団参加 ◆仲間と一緒にリズムを作ろうとする姿　他者との協働 ◆仲間とともに自分の役割を果たそうとする姿　他者との協働

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
１　挨拶 ・ハンドベルを使って挨拶の和音を作る。 ２　学習内容の確認	●３人でタイミングを合わせて音を重ね，和音の響きが感じられるようにする。　他者との協働
３　歌唱「あの青い空のように」 ・声出し当番が前に出てスライドを見ながら発声練習をする。 ・様々なグループに分かれて追いかけながら歌う。	●当番学年が前に出る。前に出る学年の声を真似て発声練習を行い，当番学年の意欲をかき立てられるようにする。　集団参加　他者との協働 ○声の大きさ，長さはスライド上で視覚的に伝える。 ●歌うときにはグループごとに向かい合って歌い，互いの顔を見ながら他のグループの歌声を聴いたり、真似たりして楽しく歌えるような雰囲気作りを心掛ける。　集団参加
４　表現「ボディパーカッション」 ・３拍子のリズムを手拍子でたたく。 ・身体部位のカードを見ながらたたきたい部位の組み合わせを考えて，３拍子のリズムを作る。	○季節感があり，馴染みのある「海」の曲に合わせる。 ●全員で手拍子をたたき，合わせたときの一体感を味わう。　集団参加 ●視覚的なカードを用意し，実態に応じてカードを使用しながらリズムを作ったり，やりとりしたりする。　他者との協動
５　振り返り ６　次時について ７　挨拶	●頑張ったこと，楽しめたことを前で発表することで，頑張れたことを友達と共有できるようにする。　自己理解　他者理解

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）仲間との協働活動に主体的に取り組む工夫

・楽器を使っての挨拶当番，声出し当番等を設定し，活動したことが友達に伝わることが体感できるようにする。
・使用する楽器を厳選し，心地よい音や心地よい響きを作る。
・音の長さは線の長短，大きさは円の大小で表し，視覚的に示す。
・曲のイメージを喚起するため映像を流したり，イメージ画を作成したりする。

ハンドベル演奏での挨拶

（２）学習活動の目的に合わせたグルーピングの工夫

・歌唱では，集団で行うことで個人の力が引き出されるように，大きな集団を利用する。活動の楽しさが引き出されるように向かい合って歌ったり，映像に撮って歌った様子を見たりする。
・表現活動では，一人一人の自由な思いを反映しながらも一緒に活動することの充実感が味わえるよう２～３人の小グループで活動する。
・合奏では学年ごとにパートを決める。一つのパート毎に鳴らして音の一体感を味わったり，パートを組み合わせて音の響きや広がりを感じたりする。

小グループでの表現活動

４　実践のまとめ

（１）生徒の姿

・小グループで協力して挨拶や声出し当番を繰り返し行う中で，自分の役割が分かり自ら楽器を鳴らしたり，大きな声で声を出したりするなど主体的に活動する姿が見られるようになった。
・歌は一部の生徒だけが楽しんでいる様子が見られたが，向き合って一緒に歌うことで，友達の歌う歌に合わせて身体でリズムを取ったり，一緒に大きな声で歌ってみようとしたりする生徒の姿が見られるようになった。
・音に過敏な生徒もおり，音が鳴ることに嫌悪感を示す生徒もいたが，音を合わせたり心地良い和音の音を作ったりする活動では，音の響きを楽しむ様子が見られるようになった。

（２）まとめ

〈音楽〉では，一人で楽しんでいる生徒も多かったことから，生徒が仲間とともに音楽活動をやりたい，やってみようと思えるように活動内容を整理していった。仲間との活動に主体的に取り組むために，分かりやすく見通しがもてることに加えて，挨拶当番や声出し当番といった当番活動を設けた。自分が声や音を出すことで，仲間がそれを認めて動いてくれるという経験は，仲間に認められたことが実感でき，自ら仲間と同じ活動に参加しようとする姿となった。

また，グルーピングを工夫して音の一体感を味わえるようにしたり，和音を利用して異なる音が重なる心地よい響きを味わえるようにしたりして，音が心地良く感じられるように教材を工夫した。活動から離れてしまいがちな生徒においても，仲間の音を聞いて一緒に合わせようとしたり，心地良い音を一緒に作ろうと主体的に音を出したりする姿が見られるようになった。このことから，環境を整えた上で生徒からの主体的な動きを待つことが大切であることが分かった。

今後も自由で楽しい活動を確保しつつ，一緒に活動する楽しさが共存できる授業を今後も目指していきたい。

６　まとめ

今年度は様々な学習の形態で行った実践であるが,授業作りの方針をもとに実践を重ねたところ,それぞれの実践において様々な成果が見られた。これはこれまでの研究を活かしながら各自が実践を行った結果と言える。以下に３年間のまとめとして，これまでの研究から見いだせた生徒の「つながる力」を育むために有効な取組や生徒や教員の姿から明らかになったことを示す。

（１）各実践から見いだせる有効な取組

ア　自分や相手を認める活動（「自己理解」や「他者理解」につながる活動）

授業中の活動や振り返りなどで，**自分や仲間を認め合う活動を多く取り入れた**。〈作業〉においては**「気付きカード」を活用**したり，**映像を見て相手の取組や自分の取組を振り返って評価**したり，**他者に評価されたりする**ことを通して，自己の取組を改善・向上させようという意欲の高まりが見られた。また，自分や相手を意識できるように，学級の中での自分の役割や仲間の役割について表を作成しながら再確認した実践では,互いの役割を意識し認め合うことで,自分が役に立っているという実感をもつことができ，「仲間のために」ということを意識した行動につながった。

これは，**自己による評価と他者からの評価が一致し**，**自分が活動したことに対して相手に認めてもらえた喜びから達成感を味わうことができ**，**自己肯定感を高めることができた**ためと言える。また，自分を認めてもらえたことは**自分への理解を深める**ことにもつながったと考えられる。

仲間の良さを認め，認められるという活動を通して，互いに自分を向上させようという関係性を構築することができてきた。**自分や相手を認める活動を各々の授業の形態に応じた形で位置付けたことで**，**自信や自己肯定感が高まり**，**次の学習活動への意欲にもつながった**。

イ　グループでの協働活動（活動の共有）

生徒が複数で活動するときには，**主体的に活動**できるように**生徒の興味・関心に基づく活動**を設定し，その**活動を仲間と共有**できるように，グループで**一つの目的に向かって協働する活動**を多く取り入れた。

〈体育〉や〈音楽〉では，仲間と同じ活動を行う中で，仲間と一緒にやると楽しいという気持ちを育んだ。この活動は，同じ空間の中にいるだけではなく，仲間と一緒に素早く動くことができたり，３人で一つの和音を奏でることができたりするなど，**仲間と共に行うことで目的が達成できるという活動**だからこそ，一緒にやったら楽しい，またやってみたいという気持ちを学習の中で育み，仲間と一緒に学習することへの意欲を喚起することができた。

また，〈生活学習〉の表作りなどの制作活動に見られたように，**グループで役割分担し**，**協力して一つの表を完成させるという活動**は，その中での自分の役割や他人の役割を意識したり確認したりできる機会となった。役割分担しながら一つの目的に向かって協力して活動することを様々な実践で行ったことで,**相手の役割に目を向け**,**仲間の活動に注目できるようになり**,授業以外の場面においても**相手を意識するような行動**が増え，仲間と関わり合う姿へとつながった。

さらに，**仲間と一緒に観察し自分の気付きを伝えるような場面を設定**したことで，観察の観点を友達の意見の中からも確認でき，**一人で学ぶよりも多くのことを知ることができる活動**に

なった。このように，**学び合いの中で気付きを共有できるようにする**ことは，その**題材本来の目的の達成**にも効果をもたらす有効な手立てであることが確認できた。

ウ　自分の思いを伝えたり，相手からの言葉を受け止めたりする活動

グループの意見をまとめるような学習場面で，自由度のある活動を設定し，**仲間とやりとりしながらグループとしての結論を決めていく活動**を多く設定した。工夫点として，小グループで意見を出し合って結論をまとめる活動のときには，**意見がまとまりやすいように興味・関心が近い仲間同士で活動**したり，意見を出してまとめることが難しい段階のグループでは，**いくつかの中から選択すれば決められるような活動**を意図的に用意したりした。そうすることで，活動の中で自分のやりたいことや使いたい物などについての**自分の思いを伝えたり**，**他人の思いを聞いて受け止めたりすること**ができやすくなり，相手と関わりながら学習を進める状況を作り出すことができた。

その結果として，**自分の思いが相手の思いと同じとき**には，その活動を一緒に更に進めていこうという気持ちが生まれ,**目的への行動が促進されて学習に主体的に取り組む姿**が見られた。また，**他人と自分の思いが異なったとき**には，自分の考えと相手の考えを照らし合わせ，自分の思いも相手の思いも大切にし，**気持ちを整理しながら行動する様子**が見られた。仲間と活動をするために，一方的に伝えるのではなく，相互にやりとりし，自分や相手の思いを尊重しながら活動する姿が見られるようになってきたことから，仲間との関わりが広がり，関わり合う力が育まれたと考えられた。

（２）生徒や教員の変容

以上のような取組を重ねた結果，生徒だけではなく教員にも変化が見られた。以下に実践後の生徒の姿と教員の姿について記す。

ア　生徒の姿

自己理解や他者理解の相互作用によって，生徒はこれまで以上に自分を理解し，自分の良さを学習に活用しようとするだけではなく，学級や学部の仲間にも目を向け，仲間の良さを伝えて**互いの取組を認め合ったり**，自分と相手の違いを感じながらも**相手の存在を尊重**し，自分とは違う意見を受け入れたりしながら相手との関わりを広げてきた。

具体的なケースとして，ある生徒は入学当初，友達との関わり方が分からず，自分の思いも教師にだけ伝えるという実態があった。しかし，１年次の〈生活学習〉や２年次の〈作業〉で自分の活動を振り返ったり，友達の活動を認めたりすることを繰り返し行う中で，自分の得意なことに自信をもって意欲的に取り組んだり，友達の前で自分の意見を伝えたりできるようになってきた。３年次には１，２年次の成果を活かしながら〈生活学習〉でも「自己理解」と「他者理解」を深められるような学習活動を積み重ねたことによって，自分への自信をさらに高めて，〈作業〉で班長として班の仲間の前で発言したり，後輩を気にして話しかけようとしたりするなど仲間と関わる力が高まった。学習以外でも児童生徒会活動に挑戦し，他の学年の児童生徒と協力して行事の進行を行ったり，全校生徒に伝えられるように前に出て大きな声で発表したりするなど，自ら様々な仲間と関わろうとする姿が見られるようになってきた。

このように，それぞれの学級で生徒の「互いを認めて仲間と関わろうとする力」が育まれたことから，他者への関心が広がり，学部全体でも，先輩が後輩の手本となろうとしたり，先輩から学ぼうとしたりする姿が見られた。

イ　教員の姿

授業検討会で，生徒の変容について意見交換を重ねる中で，個々の教員が**「つながる力」の視点を取り入れた授業作りの有効性を実感し，生徒同士の関わりの変容を敏感に感じ取れる**ようになってきた。授業実践の場においてだけではなく**学校生活全般を通して**生徒の姿を丁寧に見取って**多面的・多角的に捉えよう**とするなど**「つながる力」を意識**するようになった。日常の様々な場面で生徒が関わりたいと思える状況を作り出すために，どのような活動を設定すべきかを考え,教員間で情報交換しながら有効だと思われる取組については積極的に取り入れた。

また，**自ら仲間との関わりをもちにくい生徒**に対しては，**生徒の行動をよく観察し，生徒の思いや願いを推し量った上で，生徒同士をつなげるような役割**をした。このような生徒に対しては，教員が直接的な支援をしてしまいがちだったが，個々の生徒の「つながる力」とは何かを考えた結果，**生徒一人一人の「つながる力」を生徒同士の関係から育もうとする視点をもつ**ことができるようになり，生徒同士をつなげるような工夫や状況設定をした上で，**生徒からの発信を待つ**ようになった。

（３）考察

「つながる力」の視点を取り入れた授業実践を様々な学習の形態で行った。結果，どの授業においても，**仲間を認め，認められる関係性を構築**することの有効性や重要性を確認することができ，「関わり合う力」を育む実践をすることができた。それは，生徒が仲間とともに活動をし，活動を共有する中でやりとりをしながら，生徒たちは互いに認め，認められることを繰り返し，相手と関わりをもちたいという気持ちを育んできたということである。そして，自分や相手に認められ**自己肯定感が向上**するからこそ,**学習への意欲も喚起**された。このことから**「つながる力」の視点で授業を行うことは，学習活動を促進するものである**ことが分かる。また，相手との関わりが広がることで，自分の知らなかった気付きにも触れることができ，学習の中でより多くの事柄に触れることができたことから，**学びを深めることにも効果的**であった。

また，上で述べたように「つながる力」の視点で様々な授業作りを行ったことは，**教員の生徒の見方に変化**をもたらした。教員の意識が高まり，**生徒の自発的な活動を待つという姿勢が，生徒が安心してやりとりできる基盤となり**授業以外の遊びや給食場面においても仲間と一緒に協力したり，活動内容を仲間と決めようとしたりする姿につながった。同時に，PDCA サイクルにより有効な指導・支援の在り方を検証しながら繰り返し授業作りを行ったことは，どのような活動が生徒にとって良い効果をもたらすのかということを考えながら様々なアプローチで授業を組み立てたり，「つながる力」の視点を他の学習の形態での授業に活かそうとしたりするなど**教員の授業力を向上**させることとなった。

このように中学部では，３年間を通して「互いを認めて仲間と関わり合う力を育む授業作り」を行い，授業作りを通して様々な成果を実感すると共に，様々な場面で生徒の成長を感じることができた。今後も成果を活かした実践を継続し，関わりを引き出すのに効果的な題材や教材を工夫しながら生徒の「つながる力」を育んでいきたい。

Ⅳ　高等部研究

1　高等部研究主題

自信をもって，社会に踏み出す力を育む授業作り

2　高等部研究主題設定の理由

高等部では，平成23年度からの４か年の研究において，「自己を見つめ，自分の良さを発揮できる授業作り」という主題の下，生徒の自立や社会参加を推進していくことを目的として，「キャリア教育」の視点を活かした学習内容の再検討，より良い指導・支援の在り方，環境調整についての研究を重ねてきた。その結果，自分の得手不得手，適性や課題を考えながら進路を選択したり，自分の将来の生活をイメージしたりするなどの生徒の変容を見ることができた。

高等部は，将来の自立と社会参加に向けて小・中学部で培われた力の充実を図り，更に発展させて行く段階である。本校の高等部生は，素直で穏やかであり，友達に対して温かく接することができる。しかし一方で，自分の思いや考えを相手に思うように伝えられずにいたり，初めてのこと，分からないことには自信がもてず，自分から積極的に関わろうとせずに教員や支援者からの指示を待っていたりする様子が見られる。

近年の社会は，急速なグローバル化や情報化，金融・経済環境の激変，18歳選挙権導入など，目まぐるしく変容している。そのため，今まで以上に，多様化した価値観やトラブルを回避する方法を知ること，自分の意見をもつこと，公共人として行動することが求められている。

それらを踏まえて，高等部では，３年間で社会に巣立っていく生徒たちに自分から意欲的に周囲と関わり，自信をもって，主体的に生活できる力を育てたいと考えている。研究主題の「つながる力」に着目したとき，高等部段階では，**「自分の考えをもって気持ちを相手に伝えること」，「仲間の考えを認め合いながら協力して活動すること」，「知識を習得することで，より社会に目を向けることができるようになること」**という三つの力の育成が大切であると考えた。それらの力を育てるため，自分の意思を形作るために必要な知識や自分の意見を正しく相手に伝える方法を身に付けさせたい。また，その身に付けた知識を，実際に活用できる力や，実生活で活かそうとする意欲を育てたい。そのような力を育成することで，自分に対して自信を深め，社会へ踏み出すことができる生徒を育てることになると考える。

以上のことから，本主題を設定した。

3　研究目的

「つながる力」に着目し，自信をもって社会に踏み出す力を育むために必要な学習内容や指導・支援についての検討や実践をすることで，高等部３年間での効果的な授業の在り方を明らかにする。

4　研究内容及び方法

年次	研究内容	研究方法
1年次	高等部における「つながる力」の整理・分析	・「つながる力」に含まれる要素について整理・分析を行い，高等部段階で育てたい「つながる力」を明確にする。

1年次	「つながる力」に着目した授業作り	・社会生活と密接な〈生活学習〉の学習内容を「くらし」「いきる」「行事」の３分野へと見直し，整理する。 ・他者（相手，社会）とのつながりを築き，自分らしく社会参加できるよう，実生活に直結している内容を扱う「くらし」分野の各題材に着目し，生徒個々の発達段階に応じた指導内容，指導方法の見直しを行いながら，授業を実践する。 ・授業研究会を通して，学習内容，指導・支援方法がより有効なものとなるように，改善・工夫する。
2年次	社会とつながることを意識した「くらし」分野の見直しと授業実践・授業評価	・〈生活学習〉の「くらし」分野を取り上げ，高等部段階で身に付けたい学習内容の再検討と，行事等を考慮した学習時期，学年間の系統性を考え，３年間で体系的に学習できるよう，題材配列を見直す。 ・生徒が実態に応じて社会とつながり，自分らしく社会参加していけるようにするために，指導方法の改善や工夫を行いながら，授業を実践する。 ・授業評価表による評価や授業研究会等を通して，「つながる力」を育む上で有効な学習内容，指導・支援方法について検討する。
3年次	〈生活学習〉における「つながる力」を育むための授業実践・授業評価	・「つながる力」を育む上で有効な指導・支援の在り方について協議し，授業作りの方針としてまとめる。 ・〈生活学習〉における「くらし」分野に加え，「いきる」「行事」分野の題材の一部を取り上げ，各教員がテーマを設定して授業作りの方針に基づいた授業実践をする。 ・授業評価表を活用した授業研究会を通して，「つながる力」を育む上で有効な学習内容，指導・支援の在り方について整理する。

５　研究経過

（１）１年次

１年次の研究では，生徒の学校生活の様子だけではなく，産業現場等における実習等の様子や本校卒業生の現在の生活の様子を踏まえながら，「つながる力」の内容について協議した。先に述べた本校高等部生の実態や，社会に出た卒業生の悩みや不安等からも検討を重ね，高等部段階での「つながる力」は，「社会とつながるための力」と言い換えることができると考えた。その中で，特に大切にしたい「つながる力」を，**〈自分から意思伝達する力〉**，**〈他者と協働する力〉**，**〈社会に参加する力〉**とした。

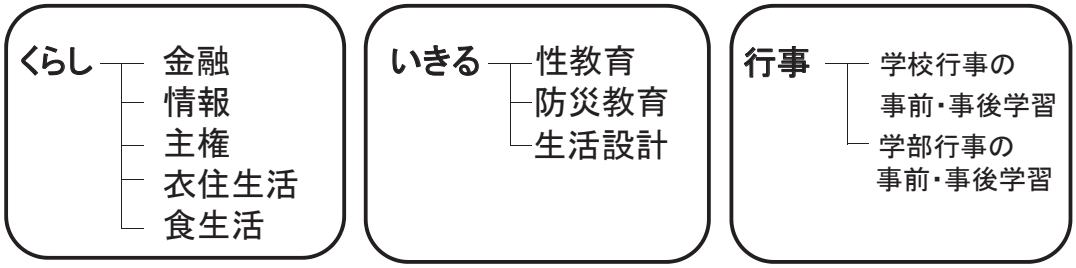
期待する姿
・自分の考えをもって相手に伝える ・互いの考えを認め合いながら，協力して活動する ・知識の習得により，社会に目を向けている

高等部で目指したい「つながる力」

自信をもって，社会に踏み出す力

・自分から意思伝達する力
・他者と協働する力
・社会に参加する力

これらの力を育むために，現代社会の変化等を考慮した学習内容の見直しが必要不可欠であると考え，社会生活に密接な〈生活学習〉における**学習内容の見直しと整理**を行った（図Ⅳ-1）。



図Ⅳ−1 「生活学習」における分野と枠組み

〈生活学習〉の学習内容を**「くらし」「いきる」「行事」**の３分野に大別し，更に実生活に直結している内容である「くらし」分野について再構成した。具体的には「くらし」分野を**「金融」，「情報」，「主権」，「衣住生活」，「食生活」**の五つの枠組みに分類し，**学習内容の精選**，及び**学習構成表の作成**を行った。学習構成表とは，学習の目的，各学年の学習内容，題材名，関連する他分野の題材等を記入したものである。そして，１年次は五つの枠組みの中から「主権」を取り上げ，指導内容・指導方法の見直し，授業の実践，授業の評価・改善を行った。

１年次の成果と課題は以下のとおりである。

成果	・「つながる力」について共通理解をし，社会とつながるための力を育む**指導・支援の方向性**を新たに捉え直すことができた。 ・学習構成表の内容を効果的に指導するためには，**生徒の知識や考え方等の実態に即して，題材計画を作成する**ことの重要性が明確になった。 ・生徒自身が考えたり，社会への関心を高めたりできるような学習場面を設定し，その中で**自分の意見を伝えたり，相互に認め合ったりする活動を取り入れる**ことの重要性を確認した。 ・教員自身が**生徒の意見を受け止めたり，つなげたり，深めたりする指導・支援**を意識することの大切さを改めて認識できた。
課題	・学習構成表の学習内容を更に検討を加え，改善する。 ・生徒が学習内容をより効果的に習得できるよう，他の学習の形態や行事等と関連させて，指導計画における学習の流れを検討する。 ・「つながる力」を育む観点から，各授業での指導方法や展開の工夫の有効性について検討する。

（２）２年次

１年次における一つ目と二つ目の課題を踏まえ，２年次は生徒がより効果的に学習を進められるような学習内容の構成を協議した。具体的には，〈生活学習〉の「くらし」分野の五つの枠組みを対象に，既存の年間指導計画を基に，**学習内容のつながりや関連付けが図れるものを組み合わせ，各学習構成表や各題材計画における題材の配列や学習内容の見直しを行った。**

また，２年次研究では「金融」を取り上げ，授業実践を通して有効な指導方法や授業展開の工夫を行った。その中で，各学年での系統性を考えた題材計画を作成したり，実態に応じたグループ別の学習内容を設定したりした。その結果，「金融」で**学習した内容が卒業後の生活にどの程度活かすことができるかという視点で，生徒達の課題を捉え直した授業実践**を行うことができた。

また，「くらし」分野の他の枠組みである「主権」や「情報」，「衣住生活」についても，指導内容・指導方法の見直し，授業の実践，授業の評価・改善を行った。

２年次の成果と課題は以下のとおりである。

成果	・生徒の実生活において必要なことや大切なこと，現実度の高いことについて話し合い，題材計画として学習内容をまとめることができた。 ・知識の活用を考えたとき，知識を教えるだけでなく，**活用の仕方や活用しようとする意欲も含めて育む工夫**が重要であることを再確認できた。 ・協働や意思表示の場面を設定し，実践する中で，**伝える方法，自分の考えをまとめて表現する方法を指導していく**ことの大切さを再確認した。
課題	・教員が指導すべきと考える内容と生徒にとって現実度が高い内容に隔たりがあることを意識して，学習内容を更に精選する必要がある。 ・**生徒にとって必要な知識**や**知識の活用，活用しようとする意欲**を関連付け，授業時間数との調整を図りながら各授業を計画すると共に，活用する力や活用しようとする意欲を育む手立ての工夫を継続して考えていく。

（３）３年次

これまでの研究を踏まえ，学部研究主題に掲げた「自信をもって，社会に踏み出す力」は，以下のような学びの過程を経て育つと捉えた。

・生徒は，日々の授業の中で，多くの知識を習得し，その活用の仕方を学ぶ。

⬇

・共に学ぶ仲間と協働しながら学習を進めることで，得た学びを確かなものにしていく。

⬇

・確かな学びから生まれる「分かる・できる」安心感を土台にして，このような一連の流れを様々な場面で繰り返すことがやがて生徒の自信となり，社会に踏み出す力につながる。

以上の捉えから，高等部においては，**「活用できる知識」，「活用しようとする意欲」，「協働」**という三つの視点を基盤とした授業作りを行うことで，「つながる力」を育むことができると考え，３年次における授業作りの方針を以下のように設定した。

① 実際の生活場面で活用できるような現実度の高い知識や技能を扱うこと
② 知識や技能を学ぶことの楽しさや意義を実感できるようにすること
③ 他者と協働したり，他者に意思表示したりする経験を積むことができるようにすること
④ 学習集団の編成を工夫すること

①実際の生活場面で活用できるような現実度の高い知識や技能を扱うこと

この方針は「活用できる知識」という視点に関するものである。卒業後の家庭生活・職業生活場面で不可欠と思われる，**現実度が高い活動**を行える基盤となる「知識」及びそれを扱うための「技能」を確実に身に付けられるようにするため，**学習内容の精選・焦点化を徹底する**というものである。

また，この考え方は，**学校教育という限られた授業時数の中で，確実に身に付けられる有効な指導を行っていくためにあるべき教育課程の編成**にも，直接的に関連してくるものである。

②知識や技能を学ぶことの楽しさや意義を実感できるようにすること

この方針は「活用しようとする意欲」という視点に関するものである。上記①の方針で述べたような「知識・技能」が確かな力として身に付くだけでなく，それを十分に発揮することができるようにするため，生徒の内面に着目し，学ぶことに対する興味・関心を高めるために効果的な手立てを工夫し，生徒の意欲を引き出すというものである。

上記①の方針において，「将来の生活に必要」という観点からの学習内容の精選について述べたが，人の「意欲」とは「必要性」からだけでは湧きにくいものである。そのために，学習内容に関して，生徒自身が**「分かる・できる」を実感できる**こと，**学んでいることが「面白い・楽しい」と感じられる**授業作りを推進することで，**生徒が自然に「やりたい・やろう」という気持ちになりやすい状況を作り出したい**と考えた。そのことが「必要だから」という観点も受け入れやすい心理を生み，それらが相乗的に作用して，本当の「意欲」が湧いてくることにつながることを期待している。

③ 他者と協働したり，他者に意思表示したりする経験を積むことができるようにすること

この方針は「協働」という視点に関するものである。**あらゆる課題に対し，自分で考え，判断するとともに，その考えを相手と伝え合いながら，共に解決を目指す「協働」**を授業に取り入れることで，「知識・技能」の定着をねらえると考えた。また，「協働」を通して，相手との関わり方を具体的に学べるという点でも期待できる。

さらに，自分の考えを認識したり，相手の意見を受容したりする経験は，相手を通して自分自身を認めることにつながり，自己肯定感が高まり，意欲・自信を生み出すことができると考えた。

④学習集団の編成を工夫すること

この方針は，上記の三つの方針をより効果的に進めていくために必要なものである。生徒一人一人の各題材における実態に応じて，グループ分けを行い，学習集団の編成を工夫することで，生徒一人一人の課題により迫ることをねらうものである。

以上の授業作りの方針について共通理解を図り，３年次は，〈生活学習〉の３分野（図Ⅳ－１）の中で，「くらし」の分野を中心に，「いきる」，「行事」の分野においても授業実践を行った。次ページからの授業実践では，「くらし分野」の金融と情報，「いきる」分野の性教育，そして「行事」分野の事前事後学習（修学旅行）を題材として取り上げている。

実践Ⅳ－１　働くこととお金のつながりに興味・関心をもって活動する力を育む授業作り

１　実践のねらい

卒業後の社会生活や職業生活を目前に控えている高等部では，社会に参加する力や意欲を育てることが重要である。生活に必要不可欠な「お金」についても，それを媒介として，個に応じた様々な社会参加の仕方が想定できる。本実践の対象である比較的障害が重い生徒たちにも，働いてお金を得ること，得たお金を自分で使うということに興味・関心をもち，生活の中で「自分でやってみよう！」という気持ちや態度を育てたいと考えた。そこで「働く→給料をもらう→電子マネーで買い物をする」という体験的な学習を積み重ねながら，意欲をもって活動しようとする姿を目指した実践を行うこととした。

２　実践例

学習の形態	生活学習〈くらし分野／金融〉	学習グループ	高等部１～３年Ｂグループ
題材	給料を使ってみよう　〈総時数４時間〉		
本時	働いて給料をもらおう②　〈２／４時間〉		

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・「働く」「給料をもらう」「好きなものが買える」という労働と賃金のつながりを確認することができる。 ・前時とは異なる仕事に，友達と一緒に取り組むことができる。	◆仕事をして給料をもらうことを経験することで理解し意欲をもって仕事をする姿。 知識の活用　社会生活への関心 ◆昨年度の経験を思い出したり，先輩の写真を見たりすることで，給料を使うことを楽しみに思ったり，何を買うか考えたりする姿。 社会生活への関心

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
１　挨拶 ２　学習内容の確認	
３　労働と賃金についての学習 ・「働く」のイメージ 前時の仕事をしている写真を見る。 ・「給料をもらう」のイメージ 給料袋と現金，貯金箱を確認する。 ・「好きな物を買う」のイメージ 昨年度の買い物をしている写真を見る。	●前回の授業写真等を利用して，働くことのイメージをもてるようにする。また，自分が頑張って仕事をして得たお金で，楽しみを得られることも理解できるようにする。 知識の活用
４　仕事をして給料をもらう練習 ・前回とは異なる仕事内容を確認し，各班に分かれて作業に取り組む。 １班：Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｅ，Ｆ（T1） ２班：Ｇ，Ｈ，Ｉ，Ｊ，Ｋ，Ｌ（T2, T3）	○各班でリーダーを決めて指示書を渡し，教師と確認しながら進められるようにする。 ○職員室には２班とも行くように設定し，職員室にいる教員に依頼して，称賛してもらえるようにする。 ○「お給料をもらう」ことがモチベーションになる生徒には意図的に励ましの言葉かけを行う。
５　まとめ ・給料を受け取る。 ・給料を貯金箱に入れる。	●給料を受け取ることで，「働く」と「給料」を結びつけて考え，好きなものを買いに出かけることや社会人としての生活への期待感を高められるようにする。 社会生活への関心

3　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）「仕事」と「給料」のつながりを実感できるようにするための工夫

・生徒たちにとって分かりやすく，取り組みやすい作業を基本として，福祉事業所で取り組まれている内容を取り入れたり，他者の役に立つ実感や感謝される経験を得られるような場面を設定したりする。

【例】・キーホルダーを袋から出して５種類に弁別する作業

・チラシ入れ作業（用紙を三つ折りにする班・封筒に入れる班）

・ごみ回収作業

（２班に分かれ，指示書に従って班長のリーダーシップの下，作業する）

・給料はチャージできる最低金額（1,000 円）を作業回数や作業内容によって割り，袋に入れて現金で手渡しをする。もらった給料を貯金箱に貯めていくことで，自分で働いて得たお金を大切にする気持ちを育て，貯まったら何を買うかを考える楽しみも味わえるようにする。

ごみ回収の指示書（班長用）

（２）電子マネーの学習について

・チャージや支払いの方法については，事前に映像資料で学習する。

・「チャージ，お願いします。」，「nanaco でお願いします。」という台詞の確認や，お金とカードを自分で準備する練習を行う。

・実際の店舗では，教員がチャージや支払いをする様子を見せ，一人ずつ自分のカードへ給料をチャージする。

・教員は本人が困ったら聞けるように見守り，カードを置く位置等，必要に応じて支援する。

・教員に頼まれた物を買うことで支払いの練習を一人ずつ実施し，その後に自分の好きな物を選んで，買い物ができるようにする。

チャージの様子

・電子マネーの保管方法や他人に貸さないこと等，注意点についても視覚的に分かりやすい教材を使用し，全員で確認する。また，実態に応じてレシートの見方や「残高」の意味，電子マネーの仕組みについても学習を取り入れる。

4　実践のまとめ

（１）生徒の姿

・昨年度も学習をしている２，３年生が率先して仕事に取り組んだり，昨年度の様子を思い出しながら，電子マネーについて発言したりする姿が見られた。

・貯金箱にもらった給料を入れて，振った音で確認する生徒や，金額を計算する生徒等，お金に対する興味を示す様子が見られた。また，買い物を楽しみにしており，「1,000 円たまったら・・・」と，楽しそうに話す姿も見られた。

（２）まとめ

グループの中で数名は家庭でも nanaco カードを使用しての買い物経験があった。初めて nanaco カードを使用する生徒も，光っている場所にカードをかざし，音が鳴るのを聞いたらカードは財布にしまうという流れが分かりやすい様子であった。比較的障害が重い生徒達にとって，自分で商品を選び，電子マネーをかざすことで商品が手に入り，買い物ができることは，主体的に取り組める社会参加の仕方であろう。仕事を頑張って得た給料を楽しみに，大切に使って生活すること，「お金」を媒介として職場と家庭以外の社会へ参加しながら生活していくことを目指して，学校で積み重ねられる学習に今後も取り組んでいく。

実践Ⅳ－２　金銭を使うことに興味・関心をもち，計画的に使う力を育む授業作り

１　実践のねらい

本実践の対象は，卒業後に一般就労や就労移行支援を希望し，将来自分で給料を管理できることを目指す，高等部１・２年生のグループである。

高等部卒業後の生活を見据え，自立した生活を送るために必要な「お金」について，１・２年段階では，計画的に金銭を使う方法を身に付けさせたいと考える。具体的には，生徒にとって身近な小遣いを用いて，レシートの見方や小遣い帳をつけ，お金の使い方を振り返ったり，予算内でのやり繰りの方法を身に付けたりすることなどである。生活経験や家庭環境によって，お金の使い方や考え方は個人差が大きいため，グループでの話し合い活動を取り入れ，他者の考えや意見から学んだり，気付いたりすることによって，生徒の行動範囲や可能性の広がりをもたせていきたい。

２　実践例

学習の形態	生活学習〈くらし分野／金融〉	学習グループ	高等部１・２年Ａグループ
題材	お金の使い方を考えよう		〈総時数４時間〉
本時	予算について考えよう		〈２／４時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・予算を立てることができる。 ・予算計画を立てる活動を通して，「やりくり」について考えることができる。	◆グループ活動を通して，自分の考えを述べ，友達の意見に興味をもつことができる姿　意思表示 ◆互いが意見を出し合い，協力してグループの意見としてまとめていこうとする姿　他者との協働

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
１　予算計画書の作成 ①グループに分かれて，話し合いながら作成する。 課題　日曜の午前中にＴＯＨＯシネマの映画を観に行くことになりました。 ・集合場所　宇都宮駅　・小遣い 3500 円 ・ベルモールで昼食をとる　・４時に店を出る この条件で予算を立ててみよう	●生徒の実態を考慮したグループ編成を行う。意思表示 ●グループの友達と意見を出し合いながら，班で協力して模造紙に記入できるようにする。意思表示　他者との協働
②想定外の出費や対処法について考える ・教師から課題が書かれている紙を引き，それについて話し合い，必要があれば計画書の加筆・修正をする	●自分と友達の考えを踏まえて，意見をまとめる経験を積めるようにする。意思表示　他者との協働 ○話し合いの様子を見守り，必要に応じて誘導したり，仲介したりする。
２　計画書の発表をする	●互いの発表を聞いて，いろいろな意見や考え方があることに気付けるようにする。他者理解
３　まとめ，振り返り ・予算を考える際の，押さえるべきポイントを確認したり，感想を発表したりする。 「外出時には財布に余裕をもつ」 「友達同士でお金の貸し借りをしない」 「困ったら大人に相談する」	○予算を立てる際に必要な項目を再確認する。 ●やりくりの方法を考え，今後の実生活に活かせるようにする。知識の活用

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）実生活に関連した学習内容の設定

・小遣い帳の記入方法について学習した後，家庭生活の中で実践し，それを基に更に授業を展開する。

・1/4 時では，「お金の使い方を知ろう」をテーマに，「needs（必要なもの)」と「wants（ほしいもの)」に分ける学習を行う。この際分けるものは，今まで自分が小遣いで買ったものにし，イメージしやすくする。

・2/4 時では，「予算について考えよう」をテーマに，友達同士で「映画を観て，その後ベルモールで遊ぶ」という，近い将来や卒業後を見据えた内容で行う。

「needs」と「wants」に
仕分ける様子

（２）話し合い活動を充実させる工夫

・日常生活の中でどれだけお金を使ってきたかは個人差が大きい。また，使い方も様々であるので，経験豊富な生徒から学んだり，他者の意見を聞いて気付いたりできるよう，お金に関する生活経験の異なるメンバーでグループを構成することで，自分とは違う使い方があることに気付けるようにする。

・教師の発問や仲介を入れながら，ねらいに迫れるようにする。

①映画を観ているときに家族からのメール
「お好み鯛焼き」買ってきて
何個でもいいよ(^^)/
②ゲームセンターにいたら、ジュースを持っていた子どもが
自分めがけて体当たり！
自分の靴下がぬれちゃった！
③昼食後、ベルモール店限定のスイーツ（600 円）を発見！
これ，家族の大好物なんだよな・・・
④バスに乗るとき，メンバーの一人が側溝にお金を落とした！
マズい，バス代が足りない・・・

「想定外の出費や対処」の課題

４　実践のまとめ

（１）生徒の姿

・「needs」と「wants」に分けた授業では，多くの生徒が「wants」に集中していた。限られた予算で買い物をする際に何を優先するのか，本当にそれを買うのか，一度立ち止まって考えてから買う習慣が身に付けられるようにしたい。

・グループでの話し合いでは，生徒にとってイメージしやすい課題であったため，主体的・意欲的に取り組むことができた。実際に同じような場面に遭遇した際に，友達と相談しながら解決できるように，話し合い活動の充実を図っていきたい。

・話し合いの中で，昼食代や靴下一足のおおよその値段の見当をつけることが難しかった。物の値段やお金の価値など，金銭感覚がまだ不十分である。日頃の学校生活や授業の中で，引き続き継続して学習していく必要がある。

（２）まとめ

高等部に入学し，社会との関わりが広がり始めた１年生段階では，自分でお金を使う経験がまだ少なく，家庭との協力が不可欠であった。例えば，家庭ではスーパーで一人で買い物をしたり，小遣い制にしてもらって小遣い帳をつけたりする経験を積み，学校ではそれを基に学習を展開して，経験の意味付けをしたり，お金に対する意識や関心を高めたりしてきた。そのようにして経験を積み上げ，知識を広げてきた２年生は，金銭感覚が養われていることが発言からも感じられる。また，自分の経験を１年生に伝えたり，アドバイスしたりすることを通して，学びを深めていく様子も見られた。

金融の授業は，家庭との連携が大きく関わってくる。家庭でお金を使い，学校ではそれを基に自分の使い方を振り返り，知識を得る。そして家庭に戻ってお金を使う際に得た知識を活かす。今後もこのサイクルを繰り返していくことで，卒業後に適切な金銭管理ができるようにしたい。

実践Ⅳ－３　金銭の使い方に考えをもち，計画的にお金を使う力を育む授業作り

１　実践のねらい

働いて得た給料を使い，自分らしい生活を実現するためには，計画的な金銭利用や金銭管理ができる必要がある。生活の中で，実際に計画的にお金を使ったり管理したりしていくためには，知識，技能の習得に加え，その大切さや活用の仕方を学ぶことが重要である。そこで，お金の使い方を考えたり活用の仕方を体験したりする学習を取り入れ，計画的な金銭利用や管理の大切さに気付くことや活用の仕方の習得を目指した実践を行うこととした。

本実践は，一般就労，又は就労継続支援Ａ型事業所を目指す高等部３年生徒を対象としている。

２　実践例

学習の形態	生活学習〈くらし分野／金融〉	学習グループ	高等部３年Ａグループ
題材	計画的な金銭利用と安心なくらし		〈総時数４時間〉
本時	修学旅行での小遣いの使い方を振り返ろう		〈２／４時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・小遣いの使い方について，費目ごとに分けることで特徴を見つけることができる。 ・小遣いの使い方の特徴について意見を発表したり，友達の意見を聞いたりすることができる。	◆既習知識を活用し，自分のお金の使い方を振り返る姿　知識の活用 ◆自分の意見をもち，理由や根拠を含めて発表する姿　意思表示 ◆友達の意見を聞き，自分の意見との類似点や相違点を考えながら，多様な考え（お金の使い方）に気付く姿　他者理解

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
１　挨拶 ２　学習内容の確認	
３　三つの費目の色分けの確認 ・三つの費目と三つの色分けを知る。	○生徒が記録した小遣い帳の支出項目を，下記のように費目ごとに色付けし，裁断したものを配布する。 「費目」：色　①「食事」：赤色　②「土産」：黄色　③「遊び」：青色
４　修学旅行での自分のお金の使い方の振り返り （１）小遣いの支出項目を三つの費目に分け，ホワイトボードに貼る。 （２）費目ごとの支出数，支出金額を計算して記入する。 （３）自分の小遣いの使い方の特徴を考える。 （４）次回旅行に行くとしたら，どのようにお金を使いたいか（以下，「次回の希望」）を考える。 （５）小遣いの使い方の特徴や「次回の希望」を発表する。 （６）教師の発問を聞き，意見を発表する。 （７）いろいろなお金の使い方を知り，これからのお金の使い方について意見を発表する。	○ワークシートを配布し，学習の流れを説明する。 ○生徒個人のスマートフォンの計算機機能を利用する。 ●費目ごとの支出数の比較や，一番多い金額等，特徴的な内容への注目を促す。　知識の活用 ○「次回の希望」について理由を含めて考えることを確認する。 ○小遣いの使い方の特徴が事実に関連した内容か確認する。発表内容を端的に板書する。 ●小遣いの使い方について生徒同士で類似点や相違点があるか発問する。　他者理解 ●次回の旅行で真似したいお金の使い方があるかを質問し，理由を含めた発表を促す。　意思表示
５　まとめ	

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）実生活に関連した学習内容の設定

・生徒の理解を促すため，実生活と関連付けた内容を取り上げる。本実践では，修学旅行で生徒が実際に使ったお金，生徒が実際に記録した小遣い帳を取り上げ，お金の使い方を振り返った。

・お金の使い方を考えるための方法や流れを具体的に説明し，生徒が実際に行いながら，お金の使い方を考えるための手がかりを見つけられるようにする。本実践では，小遣いの使い方を考えるために，支出項目を内容（費目）によって「分ける」作業を行い，費目ごとの支出数，金額等を明確にした。

・費目ごとの支出数の比較や，一番多い金額，少ない金額など特徴的な内容への注目を促し，その点について考えていけるようにする。

支出項目を「分ける」作業の様子

（２）自分の意見をまとめたり，多様な意見に気付いたりするための工夫

・「『食事』の支出数が一番多かった（赤色の費目が一番多かった）ので，私は食事にお金を使う傾向があります。」のように具体的な支出内容を使って意見をまとめるようにする。また，生徒の発表が正しい内容かどうかを教員や友達と一緒に確認する。

・小遣いの使い方について友達の意見を聞くだけでなく，教員が生徒同士で小遣いの使い方に類似や相違があるかについて発問する。生徒が類似や相違を見つける過程を通して，多様な意見（お金の使い方）を知ることで，自分のお金の使い方を振り返えることができるようにする。

４　実践のまとめ

（１）生徒の姿

・全員の生徒が，支出項目を内容によって「分ける」作業を理解し，修学旅行での小遣いを三つの費目に分けることができた。その後，特徴的な内容を探し，その内容を手がかりに自分のお金の使い方の傾向を考え，自分の考えを発表することができた。

・次に旅行するときに，自分はどのようにお金を使いたいか，お金を使うときにどのような点に気を付けたいかという問いに対し，全員の生徒が発表することができた。事前に買う物や値段を調べたいという発表が多く，計画利用の大切さに気付きが見られた。また，発表内容の理由を質問すると，自分のお金の使い方の傾向と関連させた内容で答えられる生徒もいた。

・生徒同士のお金の使い方の類似や相違を見つける学習では，土産にお金を使う傾向である２名の生徒の支出内容を見比べ，「一人は自分への土産が多く，もう一人は家族への土産が多い」ことを生徒同士で話し合って相違を見つけることができた。その後，「修学旅行で，もっと自分のためにお金を使えばよかった。」という意見や，「次の旅行では，私も自分以外の人へ土産を買いたい。」という意見があり，他者のお金の使い方を参照し，自分のお金の使い方を振り返る姿があった。

（２）まとめ

支出項目を内容によって「分ける」学習を手立てとし，お金の使い方を考える学習を継続して行ったことで，お金の使い方を費目に分けて考えられるようになった。また，修学旅行で実際に自分が使った小遣いの使途を振り返ることで，事前に買う物や値段を調べる大切さや必要性に気付くことができた。さらに，生徒同士互いのお金の使い方を見比べ，考えることは，いろいろなお金の使い方への気付きに加え，自分の考えをもつことにつながったように思う。

これまで，お金の使い方について支出を中心に学習を進めてきたが，今後は，貯金の必要性を学び，計画的な金銭利用や管理する力を深められるようにしていきたい。

実践Ⅳ－４　情報機器の使用に関心をもち，生活の中で活用する力を育む授業作り

１　実践のねらい

現代の情報社会の中で，様々な情報機器と生徒たちの暮らしは切り離せないものになっている。そのため，情報機器を安全に楽しく活用しながら，自らの暮らしを豊かにしていくことを目的とした学習が求められていると考えた。具体的には，情報機器の使用に関わるトラブルに巻き込まれないような正しい知識を身に付けたり，実際に情報機器を活用できる操作能力を高めたりする学習を行う。また，自分が分からないことは周りに相談し，自分が分かることは周りに積極的に伝えることのできる力を育むことが，社会に溢れる様々な情報を取捨選択し正確に活用するためには大切な力と捉え，本実践に取り組んだ。学習グループは，携帯電話やスマートフォンを現在持っているあるいは将来持つであろう生徒を対象にしている。

２　実践例

学習の形態	生活学習〈くらし分野／情報〉	学習グループ	高等部１～３年Ａグループ
題材	わたしたちのくらしと情報機器 ～パソコンや携帯電話を使おう～		〈総時数４時間〉
本時	スマートフォンを使おう		〈３／４時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・スマートフォンの音声入力機能を知り，使うことができる。 ・時計と地図アプリの操作方法を知り，実際に操作することができる。	◆スマートフォンを実際に操作できる姿　知識の活用 ◆スマートフォンの操作で困ったことを，周りの人に伝える姿　相談・問題解決 ◆グループ全員が同じ操作ができることを目的に，リーダー中心に操作方法について教え合う姿　他者との協働

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
１　挨拶・学習内容の確認 ２　スマートフォンアプリの操作実践 ・グループメンバーの確認とリーダーの選出をする。	●グループごとにメンバーを確認したり，リーダーを決める話し合いを行ったりすることで，グループ内で互いに話しやすい状況作りのきっかけにする。 相談・問題解決　他者との協働
・スマートフォンアプリとは何かを知る。 ・Siri との会話を通して，音声入力機能について知る。 ・音声入力でインターネット検索をする。 ・地図アプリの操作方法を知り，実践する。 ・時計アプリのアラーム機能の操作方法を知り，実践する。	●スマートフォンの画面と学習課題のスライドを電子黒板に映し出すことで，「何を使って何を学ぶか」を分かりやすく提示する。　知識の活用 ○各アプリの操作実践ごとに，操作を練習する時間を十分確保する。 ●グループ内全員が同じ操作ができたかどうか，確かめ合うというルールを，活動前や活動中に確認する。 相談・問題解決　他者との協働
３　まとめ，振り返り ・学習したアプリの操作に，一人で取り組む。	●各操作の類似課題を生徒たちが解く場面を設けることで，「できた」という達成感を味わい，スマートフォン操作の更なる定着と実生活で活用してみたいという意欲につなげる。　知識の活用
まとめプリントを見て学習内容を確認する。	○本時で学んだこと一枚のプリントにまとめ，視覚的に捉えやすくする。

3　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（1）実生活を想定した学習課題の設定

スマートフォンを操作している場面

・情報機器の中で，生徒に一番身近な情報機器であるスマートフォンを主な学習の教材として取り上げる。
・スマートフォンアプリの中で，地図アプリやインターネット検索，時計アプリといった身近な使用場面が想定できる教材を取り上げる。
・実際にスマートフォンを操作する時間を十分に確保し，アプリ操作の学習課題を解決できるようにする。
・インターネット上のトラブルを中心としたスマートフォン使用に関連するトラブルへの対処方法について考え，理解を深められるようにする。

（2）友達と話し合ったり，伝え合ったりする状況作り

学習課題に一緒に向かう場面

・スマートフォンの機種や日頃からの使用頻度に応じて，ペアやグループメンバーの編成をする。
・学習課題にいつでも注目できたり，同じグループのメンバーに分からないことを聞き，自分の分かることは周りに話すことができたりするように，グループの座席の配置を工夫する。
・グループ内で話し合ったり，伝え合ったりする活動が活発になりやすいように，グループリーダーの役割を設ける。

4　実践のまとめ

（1）生徒の姿

・生徒の多くにとって，初めはスマートフォンが特定の人へ電話したりメールしたりするためだけのツールであったが，他に便利な機能があり自分でも使うことができるという実感がもてた。
・授業後には，スマートフォンのアラームを使い始めたり，分からないことをスマートフォンでインターネット検索していたりする姿が見られたと家庭から報告を受けた。
・生徒に身近なネットトラブルについて知り考える機会を活動中に設けた。ネットトラブルの種類を知り，スマートフォンを使用するときには危険が潜んでいることを理解できる生徒がいた。その一方で，トラブルへの対処方法を具体的に考えて判断する材料が少なかったため，対処方法が思い浮かばない生徒も見られた。

（2）まとめ

小グループでの学習の積み重ねは，情報機器の操作能力の向上だけでなく，分からないときや困ったときには周りに聞こうとする生徒の姿につながった。また，自分のできたことを周りに伝えることで，生徒は学んできたことを再整理しながら，その操作を「確実にできる」という実感が高まり，別の場面でも活用してみようとする意欲の喚起につながったのである。

生徒の実生活や卒業後の生活を見据え，「何をどのように学習するか」という課題は常に考えなければならない。その課題を解決するヒントとして，より明確に生徒の実態把握を進めることが求められる。生徒の情報機器の使用実態を細かく調査した上で，生徒のニーズをより丁寧に把握し，学習課題を工夫することを今後の改善点として取り組んでいきたい。

実践Ⅳ－５　話し合い活動を通して「適切な行動」を考える力を育む授業作り

１　実践のねらい

今，交通機関や情報機器の発達，生活様式やマナー等の考え方の変化により，生徒たちの活動範囲は広がり，複雑になっている。今回の学習グループは，自主通学が可能であり，余暇に自分たちなりの楽しみ方ができ得る生徒を対象としており，彼らが，その中で常に適切な行動がとれるようにするために，すべての状況を想定して学習していくことは難しい。

そのため，自ら照らし合わせて考えられる基準をもち，場面や相手に応じて考え，判断する力を育む必要があると考えた。そこで，発問に対する解答について全員で話し合う活動を軸に展開し，多様な立場や視点と出会い，一つの事象に対して様々な意見があることを知ることと，その様々な情報から自分なりの判断をする力を養うことの二つをねらいとして実践することとした。

授業では，正解か不正解かではなく，生徒たちが話し合いの中で自分の意見をもち，考え，悩む時間を大切にして取り組んでいく。その結果として，適切な行動についての自分なりの基準をもつことができれば良いと考え実践していく。

２　実践例

学習の形態	生活学習〈いきる分野／性教育〉	学習グループ	高等部１～３年Ａグループ
題材	適切な行動を考えよう　〈総時数４時間〉		
本時	プライベートとパブリックについて知ろう　〈１／４時間〉		

本時の学習目標	本時で目指す「つながる」姿
・様々な項目におけるプライベートとパブリックの違いを知る ・日常生活におけるルールやマナーに対する関心を高め，実践しようとする意欲をもつ。	・意見交換をする場において，自分の意見に自信をもち，相手の意見に興味をもつ姿　ルールやマナー ・対人関係におけるマナーを知ることで，安心して意欲的に社会に参加しようとする姿　他者との協働

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
１　挨拶，学習内容の確認	
２「プライベート」と「パブリック」の学習 （１）言葉の意味を確認する。 （２）様々な項目について「プライベート」と「パブリック」に分ける。 （３）分類したものから，改めて言葉の意味を考える。 《プライベート》 例:「自分だけの」「触らせない」「見せてはいけない」 《パブリック》 例「みんなの」「触ってもよい」「見せてもよい」 （４）簡単な事例について是非を考える。 考える事例：公園での行動，食事中の行動	○（１）における言葉の意味については，生徒の発言を採用し，分類していく中で訂正，追加をしていく。 ●「プライベート」か「パブリック」か，総意を決める形で進め，活発に意見が出る状態にする。他者との協働 ○パワーポイントには教員が考えた正解を示し，生徒の総意と食い違うときには，その理由について教員と意見交換し，考えを深める機会とする。 ●「プライベートなもの」と「パブリックなもの」で，それぞれの共通点を確認する。ルールやマナー ○全員が答えられるよう簡単な事例を取り上げ，日常生活で考えていく練習の場とする。　【以下省略】

3　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（1）話し合い活動における留意点

・何について話し合うべきかを明確にするために，分かりやすいテーマを設定する。

・話し合う前に，自分の意見や立場を明確にしておき，他者の意見に対する賛否を前提に話を聞くことで，自分の考え方の変化や相手の考え方の変化に気付きやすくする。

・生徒全員の総意を決めることで，話し合いの着地点を明確にする。また，意見の折り合いがつかない場合，様々な立場や意見を知り，その中で何を感じ，考えるか，が大切であることを伝える。

話し合い前の意見の確認

（2）生徒の意見の扱い方の留意点

・生徒の意見が正しいかどうかではなく，話し合いの中で，「なぜそう思うか」に着目し，話し合うよう促す。

・教員の考えた「正解」を用意しておき，生徒たちの総意と一致しない場合，教員の考えを示し，自分たちで決めた総意の根拠を振り返ったり，さらに考えを深めたりするきっかけの一つとする。

・課題となるスライドは，ある一場面を絵にしたものや写真なので，生徒それぞれのイメージが異なるため，どのように捉えたかを確認する。いくつかの場面解釈があれば，一つずつ考えていく。

課題呈示のスライド

4　実践のまとめ

（1）児童生徒の姿

・初めは意見を自ら発言する生徒も少なく，教員の指名により発言をしていたが，同じ形式の展開で授業を繰り返し行うことで，自発的に発言する生徒も出てくるようになった。

・教員が多数派とは違った発言することで，「間違った意見はない」ということを知り，発言することに安心感を得られていたが，それでも最後まで教師や友達からの指名を待つ生徒もいた。

（2）まとめ

今回，目標とする授業での生徒像は，友達と話し合ったり，自分とは違う意見と出会ったりすることで，最後まで考える姿であった。そのため，小グループに分けずに，総意を決めるという形式をとることで，様々な意見と出会い，話し合いを深めることができたが，発言に自信の無い生徒にとっては小グループに分ける方が話しやすかったであろうという反省もある。課題の呈示については，ストーリーのない絵から読み取る事柄が生徒によって違うため，様々な「もし○○なら」を考えることができた反面，ストーリーのある具体的な場面で，正解のある課題を考えることで，正しいマナーとその理由について考えて行くという展開も考えられた。

「なぜ」という問いに慣れておくことは判断力を養う上で必要であると考える。卒業後，自分で判断すべき場面に出会ったとき，彼らが自ら考え，自分なりの答えを出し，社会と上手く関わり合っていくためにも，今後も，考える時間を大切にした授業を展開していきたい。

実践Ⅳ－６　写真を活用し，行事に主体的に参加する態度を育む授業作り

１　実践のねらい

行事は日頃の学習の成果を発揮する場であり，多くの生徒にとって学校生活の楽しみとなっている。自分の役割に精一杯取り組んだり，友達と楽しい時間を過ごしたりした経験が自信や思い出になり，社会に踏み出す後押しになると考える。そこで，より主体的に行事に参加できるようになってほしいと考え，写真を活用した活動を展開することとした。写真は容易に撮影や編集，加工ができ，生徒の実態に応じた使い方ができるとともに，卒業後の余暇につながる可能性がある。身近な機器を使って生徒自身が写真を撮ったり，互いに被写体になったりすることで，友達と関わりを深めながら行事への関心や活動への意欲を高められるのではないかと考えた。また，行事当日の写真を見て経験したことを想起したり，他者に伝えたりすることで，思い出がより深く心に残ることが期待できる。

２　実践例

学習の形態	生活学習〈行事〉	学習グループ	高等部３年
題材	修学旅行に行こう		〈総時数 19 時間〉
本時	修学旅行の思い出をまとめよう　～報告会の準備をしよう～		〈17／19 時間〉

本時の学習目標	本時で目指す「つながる姿」
・「修学旅行報告会」における自分の役割が分かり，進んで取り組むことができる。 ・グループの友達と協力して，発表の練習をすることができる。	◆グループの友達と関わり合いながら，役割を果たす姿　他者との協働 ◆修学旅行当日の写真を手がかりに，分かりやすく伝えることを意識して説明を考えたり，練習をしたりする姿　知識の活用 ◆他のグループの発表に関心をもち，感想や意見を伝え合う姿　意思表示

学習活動の展開	○指導上の留意点　●「つながる力」との関連
１　挨拶 ２　本時の学習内容の確認	○修学旅行の写真や映像を使って１・２年生に当日の様子を紹介するという，報告会の趣旨を伝える。
３　グループごとに発表の準備，練習 ・修学旅行当日の自由行動のグループに分かれ，担当する日にちの写真についての説明を考えたり，修正したりする。（前時の続き） ・発表の練習を行い，流れを確認する。	●１・２年生に活動内容が分かるような説明を考えたり，感想を交えて発表したりするよう伝える。　知識の活用　他者との協働 ●声の大きさや話す速さが適切かどうかをグループ内で確認したり，発表とパソコンを操作するタイミングを合わせたりするよう促す。　他者との協働
４　全員で通し練習 ・報告会の流れを確認する。 ・１日目，２日目，３日目の順に，グループごとに前に出て発表の練習をする。また，互いの発表を聞く。	○パソコン担当の生徒が自分で操作できるよう，使用するキーに目印を付けたり，指示棒を活用して，原稿を読むのが難しい生徒も発表に参加できるようにしたりする。 ●他のグループの発表を聞いて，良かった点や改善した方がよい点があれば意見を言うよう伝える。　意思表示
５　本時のまとめ，次回の活動の確認 ６　挨拶	○活動の中で自分の役割を果たしていた様子や，協力が見られた場面を取り上げて称賛する。

３　「つながる力」を育む授業作りのポイント

（１）友達と関わりながら，意欲的に活動に参加するための場面や役割の工夫

・修学旅行の事前学習において，友達と「記念写真」を撮る活動を設定し，写真を撮ることへの関心と，修学旅行への期待感を高める。

・撮影する役と被写体の両方を経験することを条件とすることで，友達を意識し，相互の関わりがもてるようにする。

・修学旅行当日は，各自のカメラ等を使って写真を撮る機会を作り，旅程や印象に残ったもの，友達との思い出を記録できるようにする。

・１，２年生に向けた「修学旅行報告会」（以下，報告会とする）を実施し，グループの中で役割を分担して発表することで，友達と協力できるようにする。

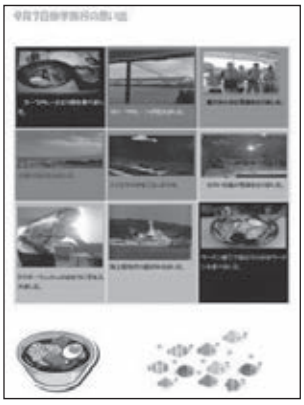
タブレット端末を使っての写真撮影

「修学旅行報告会」の様子

（２）自分の経験や気持ちを伝える方法の工夫

・報告会の準備において，グループごとに後輩に見せる写真を選んだり，紹介のコメントを考えたりする。必要に応じて教師が話し合いを仲介したり，リーダー役の生徒に話し合いの進め方を助言したりする。

・思い出の作品作りにおいて，選んだ写真に添えるコメントを自分で，または教師とやり取りをしながら考える。すべてパソコンで制作するか，手書きでコメントを記入して仕上げるかを選べるようにする。



パソコンで制作した作品

４　実践のまとめ

（１）生徒の姿

・タブレット端末やデジタルカメラ等を使って，全員が写真を撮ることができた。風景や展示物を進んで撮ったり，友達を誘って記念写真を撮ったり，教師の言葉かけを受けてカメラを持ち，興味をもった物を撮ったりする姿が見られた。

・事後学習では，言葉で詳しく伝えることが難しい生徒も，写真を見て見学先や食べた物の名称を言ったり，そのときの気持ちを伝えたりする様子が見られた。

・報告会の発表の練習では，他のグループの良かった点に目を向けることは少なかったが，本番ではグループ内で自分の役割を進んで果たしたり，声をかけ合って発表を進めたりする姿が見られた。

・作品作りでは，文字の色や大きさ，写真の配置などを工夫する様子が見られた。また，画像を検索して挿入する方法などを教え合ったり，友達のやり方を取り入れたりする姿も見られた。

（２）まとめ

写真を様々な形で活用したことで，生徒自身が修学旅行の思い出を記録したり，実態に応じた振り返りをしたりすることができた。行事の学習の充実には一定の効果があったと考えられるが，事前学習の段階から写真を撮る目的を明確に伝えていれば，「友達のために写真を撮ろう」，「みんなの記念になる写真を撮ろう」という意欲や役割意識をより喚起できたのではないかと考える。

写真の撮影や加工が余暇につながるよう，他の行事等でも繰り返し取り組めるとよいが，限られた時数の中でどのような内容を扱うかは，今後検討する必要がある。生徒のニーズに応じて発展的な内容を取り上げるなど，卒業後の生活を充実させる一助となるよう，実践を続けていきたい。

６　研究のまとめ

３年次は，〈生活学習〉において，授業作りの方針をもとに実践を重ねたところ，それぞれの実践を通して，有効な支援・指導の在り方が整理され，「自信をもって，社会に踏み出す力を育てる授業作り」という学部研究主題に迫ることができた。以下より，３年間のまとめとして，各授業実践から見いだせる有効な取組，生徒や教員の変容について述べることとする。

（１）各実践から見いだせる有効な取組

ア　学ぶ意欲を高める工夫と実際の生活を想定した学習活動の設定

指導内容の設定にあたっては，生徒の現在から将来にわたる実際の生活に必要な内容を扱うこととした。しかし，生徒がその必要性を認識するだけでは，動機付けが弱く，意欲の喚起に結びつきにくい。生徒が学習した内容を実際の行動に移すには，「学んだことを実際に活かそう」という生徒自身の内面の成長が不可欠なのである。生徒が学習した内容に対して，**「分かる」「できる」「面白そう」「便利そう」といった実感を得られるような学習活動**を積み上げることによって，「これだったらやってみよう」という気持ちが高まり，**生徒の意欲喚起**につながるということを再確認した。

そのような意欲の喚起を意図した学習活動を設定するために，普段の買い物経験や情報機器を扱う頻度など，金融や情報などに関わる生徒の実態を本人や保護者，担任から聞き取りを行い，実態把握に努めた。その上で，**実際の生活で使えるような教材の活用**を積極的に行った。具体的には，金融の授業では電子マネーのカードや小遣い帳，行事や情報ではタブレットやスマートフォンを活用するなどした。

また，実生活に基づく状況により近付けられるような，**体験的な学習の充実**を図った。例えば，仕事をして給料をもらい，電子マネーにチャージする学習，実際のレシートを見ながら小遣い帳に記入する学習，タブレットで写真を撮ったり動画を見たりする学習，スマートフォンで時計アプリや地図アプリを操作する学習などである。

イ　他者と協働したり，意思表示したりする経験を積み重ねられるような工夫

授業の中で，**目的に応じた小グループの編成**を行った。２人組，３人組，４人組などそれぞれのねらいやその役割分担に応じて柔軟に小グループを編成した。相手の存在を意識しやすくしたり，話す・聞く立場が明確で確実に発言の機会を設けたりするときには２人組，多様な考えの交流をねらい，他者の考えと同じところや違うところに気付かせたいときは３人や４人の小グループとした。さらに，**話し合い活動の充実**を意図して，自分の意思表示をしやすくするために，話し合いのテーマに対する答えを選択肢にして設定したり，他者の意見に気付けるような発問にしたりした。あえて答えが一つではないテーマについて話し合いを行い，自分の意見を導き出す過程に重点をおくことも有効であった。

また，グループの活動において，**役割分担を明確にすること**も有効な取組であった。誰が何をするのかグループの中で決めてから活動をすることで，生徒は自分や相手の役割を把握することができ，誰と何をすればよいかが分かるため，活動しやすくなった。

さらに，生徒同士で考えを伝え合う経験を積み重ねるためには，各授業における**振り返りの場面が有効に活用できる**ことを共通理解した。教員から示された話し方や伝え方のモデルを参

考にして，生徒が自分の評価を述べたり，写真や動画で相手の活動を見てから相手の評価を言ったりする中で，互いの評価を伝え合う経験を積み上げることができた。

（２）生徒や教員の変容

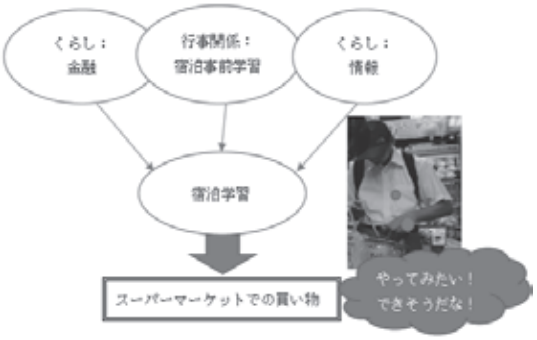
ア　生徒の姿

生徒Ａ「知識・技能の習得から活用へ」の具体事例

生徒Ａは，スマートフォンを携帯しているが，その使用は家庭との連絡用であり，電話機能の利用に限られていた。くらし分野の「情報」において，時計アプリのアラーム機能の使い方を学んだことで，その機能に強い興味・関心をもち，自分から繰り返し試す中で使い方を覚えた。ある校外学習で，現地解散のため帰宅報告を学校に電話で連絡するように指示されていたが，生徒Ａは自分の判断で連絡を指定された時刻に時計アプリのアラームをセットし，その機能を活かして，定時に学校に電話連絡できたことが確認された。

生徒Ｂ「複数の学習内容の意図的な関連付け」による効果

生徒Ｂの事例では，くらし分野の「金融」における予算に応じた計画的な支出方法の学習や，「情報」での計算機アプリの使い方の学習で学んだことが，行事分野の「宿泊学習」における食材購入という活動で，予算に応じた購入計画の立案や実際の購入場面での計算機アプリの活用という形で集約され，生徒Ｂの主体的な行動として発揮された。また，この成果は家庭生活においてスーパーマーケットでの買い物場面でも同様に見られ，学習成果の定着が確認された。



生徒Ｃ「協働を通して，自分の考えを吟味・判断し，意思表示する」具体事例

３年生である生徒Ｃは，これまでも多くの学習場面で，他の生徒との話し合い活動を通して，自分の考えとは異なる他の生徒の意見を踏まえて，自分の考えを再考・判断して自分の意見として意思表示する学習を積み上げてきた。

様々な生活場面での適切な行動を考える学習において，話し合いを通して友達と意見交換をする中で，「市民プールの更衣室で着替えをするときに床に座って着替えることはふさわしいか」という問いがあった。他の生徒は，更衣室の床に座ることは不衛生である，他の客のスペースを奪い，動線の邪魔である等，迷惑であるという理由からふさわしくないという意見がほとんどであった。しかし，生徒Ｃは，床に座ることで衣服の着脱ができる人もいるからふさわしいと考え，意見を述べた。他の生徒の意見をよく聞き，自分が多数派ではないことが分かると自分の意見に自信をもてないような様子も見られたが，自分の中で考え抜いた結果，他の意見も受け入れつつも，最初に抱いた自分の意見を最後まで表明することができた。

生徒D「実際の生活で使える教材の活用」による効果

生徒Dは比較的障害が重く，支援度が高い生徒である。二つの具体物から好きな方を選ぶことはできるが，買い物場面において現金での支払いは難しかった。電子マネーを取り入れた学習を重ねる中で，チャージや支払い時の音とカードをかざすレジの一部が光る様子に興味をもち，映像資料や教師がチャージする姿をよく見ていた。実際の買い物では，好きな菓子を選びレジまで持ってくると，レジの光る場所に注目しカードをかざすことができた。カードをかざすと音が鳴り菓子をもらえることを知っていた生徒Dは，音を聞くと笑顔が見られ，店員から菓子を受け取ることができた。

イ　教員の姿

「つながる力」に着目した授業を実施した後には毎回授業研究会を行い，生徒の「つながる力」を伸ばすための指導の有効性について様々な意見交換を行った。特に，授業で扱った学習内容が生徒の実生活に活かすことのできるものであったかについて，十分に時間をかけて協議した。そうした過程を経て，「社会とつながる」ための指導内容について共通理解が深まり，議論を重ねた。**教員が教えたい指導内容が生徒の実生活にとって必要な学習内容となっているかという視点**を常にもって，指導計画の見直しとともに授業作りを進めることができるようになった。

また，授業者が提案した授業のポイント（授業評価表）について，授業研究会で協議し整理するとともに，**他の授業の活動場面でも有効に働くかという視点でも評価・検証**し，各授業における「つながる力」の指導の在り方について考えを深めることができた。授業研究会を積み重ねることで，一授業の授業評価に留まらず，そこで得た有効な視点をより具体的にその他の授業に活かそうとする教員の姿が見られるようになった。

（３）考察

平成 27 年度からの取組では，高等部における「つながる力」を明らかにし，「つながる力」を育むという視点で「生活学習」の整理・見直しをしながら，各授業での適切な指導内容と指導方法について及び題材間での関連付けの有効性について，検証を進めてきた。特に，**学習内容を整理・精選し，その関連付けについて明記した学習構成表を作成できた**ことは，大きな成果である。

生徒たちが「自信をもって社会に踏み出す」ために，何をどのように教えるか追求してきた中で，授業作りで押さえるべき観点や指導上の留意点を教員間で共有できた。そして，それらが様々な授業に取り入れられ，生徒の「つながる力」を確実に育むことができたからこそ，前述の生徒の姿となって表れた。

本研究を通して，**様々な学びが有機的に結びつき，知識の習得と活用**が繰り返されることにより，「分かる・できる」，「こうすればいいんだ」という安心感と自己肯定感がもてるようになることが分かった。そして，そのような内面の成長に裏付けられた「自信」が，社会に踏み出す力を後押しすることを実感することができた。

Ⅴ　研究のまとめ

平成 27 年から始まった３か年の研究では，「共に生きる力を育む教育の実践～『つながる力』に着目した授業作り～」という研究主題の下，**「つながる力」の内容の明確化**と**「つながる力」に着目した授業作り**の２点を柱として取り組んできた。これまでの取組の成果について述べ，**「つながる力」を育てるためには，「何を」，「どのように」指導するか**ということを追究してきた３年間の研究のまとめとする。

成果１：「つながる力」の内容を明確化した。
【「つながる力」の構成】及び【「つながる力」の段階表】の完成

「つながる力」は，前研究において定義付けをしているものの，本研究を進めるにあたっては，その内容について更に詳しく検討し，明確にする必要があった。そこで，現行の指導内容から，「つながる力」に含まれる要素を分析し，**「つながる力」を４区分 16 要素で構成した**（図Ⅰ－２）。その上で，**「つながる力」の段階表**（13 ページ，資料１）を作成し，小学部入学から高等部卒業までの 12 年間で指導すべき内容を６段階で表した。

図Ⅰ－２「つながる力」の構成図

これらを指標として，具体的な指導内容を題材毎に設定し，指導場面としての学習活動を考案するなど，「つながる力」に着目した授業作りの土台として活かすことができた。また，児童生徒の実態把握の資料としても活用することができた。

成果２：授業作りにおける PDCA サイクルを丁寧に追うことで，教員一人一人の授業力の向上につながった。

授業の計画･立案→授業実践→授業評価→授業改善といった，PDCA サイクルに基づいた授業作りの手法はごく一般的であるが，本研究においてはこれらの一つ一つの手順を丁寧に追うことを重視した。

特に，**授業評価表**（16 ページ，資料４）**を活用することによって観点をそろえて記録し，可視化したことは，授業を分析的に評価し，確実に改善するために有効であり，結果として授業作りのサイクルを力強く推し進める原動力となった**。また，教員にとって，他の教員の授業を参観し，評価することは，同時に自身の取組を振り返り，評価することでもあった。日々の教育活動の営みの中で繰り返し行っている授業作りについて，一度立ち止まって振り返ることは，教員の授業力向上に必要不可欠である。そのための方法の一つとして，授業評価表の活用は有効であったと言えよう。

さらに，授業検討会等において，改善策について協議を重ねることは，自身の取組へのヒントを得られる機会となっただけでなく，**教員間の支え合う関係作りの一助**にもなった。チームティーチングによる指導において，教員間の連携の重要性は言うまでもない。互いの教育観を尊重しつつ，率直に意見を交換しながら共により良い授業を目指す過程は，互いの授業力を高め合うことであり，結果として，児童生徒の成長によい影響をもたらした。**教員自身が「つながる力」を発揮することで，児童生徒の「つながる力」を引き出すことができる**と言っても過言ではない。

成果３：授業実践を通して，「つながる力」を育むための有効な取組を見いだすことができた。

これまでの各学部における様々な実践から，「つながる力」を育むための有効な取組を見いだすことができた(表Ｖ－１)。これらの取組を踏まえ，「つながる力」を育むためのポイントを３点に集約して提案する。

表Ｖ－１　各部における有効な取組

小学部	**夢中になって取り組める学習内容及び活動設定の工夫** 興味･関心に基づく活動　ストーリー性　シンプルさ　面白み
	相手と関わろうとする意欲を高める授業展開の工夫 具体物を介した活動　ペア･グループでの活動
	相手と関わりをもてるようにするための教員の支援 丁寧な見取り　適切なタイミング
中学部	**自分や相手を認める活動** 自信や自己肯定感の向上　学びへの意欲
	グループでの協働活動 活動や気持ちの共有　役割の遂行　達成感・満足感
	自分の思いを伝えたり，相手からの言葉を受け止めたりする活動 実態に応じた場面の設定
高等部	**学ぶ意欲を高める工夫と実際の生活を想定した学習活動の設定** 「分かる･できる･面白そう･便利そう」という実感　実物教材の活用
	他者と協働したり，意思表示したりする経験を積み重ねられるような工夫 目的に応じた小グループ編成　振り返り場面の活用

ポイント１　児童生徒にとって魅力的な学習活動を設定する

「つながる力」を育てるために必要な指導内容を，具体的な学習活動として授業で展開する際には，児童生徒にとって魅力的なものであることが重要である。**魅力的であるということは，興味･関心を高めることに直結し，学習への主体的な参加を促す**ものであるからである。このことは，「つながる力」を育む授業に限定されるものではなく，障害の有無や種別を超えた全ての子どもたちに当てはまるものであることは言うまでもない。しかしながら，知的障害を有する児童生徒においては，この点に最大限考慮し，活動を支える意欲を育てるという視点での授業作りが求められる。

魅力的な学習活動とは，児童生徒が自然とやりたくなる活動でもある。本研究における「大切にしたい授業作りの視点」(8 ページ)の一つに掲げた，「分かる・できる・考える授業」とも関連付けながら，各実践において様々な工夫がなされた。具体的には，身近なキャラクターや興味のある事柄を教材に反映させたり，実際の生活で使用しているものを教材として採用したりといった，**児童生徒の興味･関心に寄り添った教材**が目立った。活動にストーリー性をもたせたり，競い合う形を取り入れたりすることで，**児童の内面に直接訴えかけるような面白みのある学習活動**や，児童生徒自身に選択･決定が委

ねられている場面が豊富に設定されている**自由度の高い学習活動，友達とやり取りをしながら様々な課題を解決していく学習活動**も，それぞれの発達段階に合わせて設定することで，有効に作用した。

以上のような工夫によって，意欲が育まれ，主体的に学習に取り組む姿が随所で見られた。その積み重ねが「できた・分かった」経験となり，自信や自己肯定感を高めることにもつながっていった。そのようにして自己の確立が進み，自己理解が進んでいくのと同時に，他者に目が向くようになり，気付きや理解が深まっていった。

写真Ⅴ－１　外出の計画を立てよう(高等部)

児童生徒にとって魅力的な活動を設定するためには，前述の「大切にしたい授業作りの視点」にある，**「児童生徒の内面に着目する」ことが不可欠**であった。行動となって表れる姿だけでなく，その内面の動きも丁寧に捉えていくことは，「つながる力」を育む上でも大変重要な視点であることが分かった。

ポイント２　ペアやグループによる活動の良さを活かす学習展開を設定する

「つながる力」を育むために学習グループを工夫し，関わり合いながら活動することの良さを味わえるようにすることは有効である。しかしながら，ペアやグループによる活動を設定しさえすれば，自然と「つながる力」が育つのではない。上記のポイント１で挙げた**「魅力的な学習活動」の流れの中に，ペアやグループによる活動が無理なく組み込まれ，自然な文脈の中で相手と関わり合いながら活動できるような学習展開**にする必要がある。これは，児童生徒にとって，「やらなければならない」,「せざるを得ない」状況ではなく，「やりたくなる」状況をいかに作っていくかということでもある。

これまでの実践では，ペアやグループで勝敗を競い合う**ゲーム的な要素の強い学習展開**や，友達と協力して**ひとつの物を作り上げていく学習展開**，グループで意見を出し合いながら**協力して課題を解決していく学習展開**等において，児童生徒が活き活きと活動する姿や自分から相手に関わろうとする姿が見られ，ペアやグループによる活動の良さを存分に味わい，相手と関わる経験を着実に積み上げていくことができていることが感じられた。

ペアやグループの編成にあたっては，児童生徒一人一人の発達段階を考慮することはもちろんのこと，その授業のねらいに応じて柔軟に組み替えることも重要であった。それにより，児童生徒一人一人の課題に迫りやすくなり，学習効果も高まった。また，ペアやグループでの活動の良さを最大限に引き出すためには，分かりやすく，自信をもって取り組める活動であることが前提であり，**児童生徒自身が活動そのものに余裕をもって臨めるということが，相手に意識を向けることや相手への直接的な関わりを後押しする**ことが分かった。

写真Ⅴ－２　販売会を成功させよう(中学部)

さらに，**座席配置や活動場所の動線等の物的な教育環境についても考慮した**，児童生徒が活動しやすい環境作りも重要な視点であった。

ポイント３　児童生徒同士をつなぐ意識をもって関わる

「つながる力」を育むためには，教員の支援の在り方も重要なポイントである。魅力的な学習活動を設定し，ペアやグループによる活動を展開しても，最終的には，教員が児童生徒同士をどのように結びつけるか，ペアやグループ活動の良さをどのように意味付けして児童生徒に還元するかという点が大きく影響した。

様々な実践の中で，児童生徒と一緒に活動そのものを楽しむ姿，関わり方のモデルとしての姿，児童生徒の思いを代弁して他の児童生徒に伝える姿，周囲に目を向けられるような促しをする姿など，奮闘する教員の姿があった。そのどれもが，**児童生徒同士をつなぎ，他者と関わることの良さを味わえること**を目指して，それぞれの児童生徒と向き合いながら試行錯誤を重ねたものである。教員の関わりをきっかけに，授業の流れが良くも悪くも大きく変わっていく場面にも多く遭遇し，教員が与える影響の大きさに直面した。

写真Ｖ－３　バスごっこ(小学部)

実践を通して，言動だけでなく，表情やしぐさなどからも，児童生徒の内面をくみ取ることの大切さに気付き，積極的に児童生徒の発信を受け止められるようになっていった。また，授業の中だけでなく，学校生活の様々な場面でも同じように見取る力が発揮され，児童生徒をより多面的･多角的に理解することにつながった。そうすることで，より魅力的な学習活動などを展開したり，より個々に応じた支援を考えたりすることが可能となった。

３年間を通して様々な実践に取り組んできたが，結果として，**「つながる力」を育む視点はどの授業にも組み入れることができ，三つのポイントを押さえることで児童生徒の「つながる力」を伸ばすことができた**。加えて，**「つながる力」を育む視点は，意欲を育む視点でもあり，授業本来の学習目標の達成の助けとなるもの**であったことは特筆すべき点である。また，授業作りにじっくり取り組んできたことで，教員の授業力を向上させることができたことも大きな成果と言える。

本研究で育んだ「つながる力」が，実際の家庭生活・地域生活及び社会生活でどのように発揮されたのかによって，研究の本当の評価が決まる。児童生徒一人一人が，自分らしく，周囲の人と関わり合いながら活き活きと生活していけるよう，今後も謙虚に授業改善を続けていきたい。

写真Ｖ－４　空き缶を高く積もう(全校集会)

《参考文献》

○　宇都宮大学教育学部附属特別支援学校，『平成 28 年度　研究報告』，2017.

○　宇都宮大学教育学部附属特別支援学校，『平成 27 年度　研究報告』，2016.

○　宇都宮大学教育学部附属特別支援学校，『研究紀要第 30 号』，2015.

○　宇都宮大学教育学部附属特別支援学校，『研究紀要第 29 号』，2014.

○　宇都宮大学教育学部附属特別支援学校，『研究紀要第 28 号』，2013.

○　宇都宮大学教育学部附属特別支援学校，『研究紀要第 27 号』，2012.

○　宇都宮大学教育学部附属特別支援学校，『研究紀要第 26 号』，2011.

○　宇都宮大学教育学部附属特別支援学校，『研究紀要第 25 号』，2010.

○　宇都宮大学教育学部附属特別支援学校，『研究紀要第 24 号』，2009.

○　宇都宮大学教育学部附属特別支援学校，『研究紀要第 23 号』，2008.

○　宮城教育大学附属特別支援学校，『平成 28 年度研究紀要（第 50 集）』，2017.

○　宮城教育大学附属特別支援学校，『平成 27 年度研究紀要（第 49 集）』，2016.

○　宮城教育大学附属特別支援学校，『平成 26 年度研究紀要（第 48 集）』，2015.

○　北海道教育大学附属特別支援学校，『平成 28 年度研究紀要第 29 号』，2017.

○　福島大学附属特別支援学校，『平成 27 年度研究紀要（第 37 号）』，2015.

○　福島大学附属特別支援学校，『平成 26 年度研究紀要（第 36 号）』，2014.

○　福島大学附属特別支援学校，『平成 25 年度研究紀要（第 35 号）』，2013.

○　山梨大学教育人間科学部附属特別支援学校，『研究紀要第 42 集』，2015.

○　山梨大学教育人間科学部附属特別支援学校，『研究紀要第 41 集』，2014.

○　山梨大学教育人間科学部附属特別支援学校，『研究紀要第 40 集』，2013.

○　文部科学省，『特別支援学校教育要領・学習指導要領』，2009.

○　文部科学省，『特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚園・小学部・中学部）』，2009.

○　文部科学省，『特別支援学校学習指導要領解説総則等編（高等部）』，2009.

○　文部科学省，『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編』，2009.

○　文部科学省，『小学校学習指導要領解説　家庭編』，2009.

○　中央教育審議会初等中等教育分科会，『共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）』，2012.

○　中央教育審議会初等中等教育分科会，『教育課程企画特別部会　論点整理』，2015.

○　厚生労働省大臣官房統計情報部編，『ＩＣＦ－ＣＹ国際生活機能分類－児童版』，財団法人厚生統計協会，2009.

○　村中智彦編著，『「困った」から「わかる，できる」に変わる授業づくり』，明治図書，2015.

○　藤原義博・柘植雅義監修，筑波大学附属大塚特別支援学校編著　『特別支援教育のとっておき授業レシピ』，学研教育出版，2015.
○　木舩憲幸，『そこが知りたい！大解説　インクルーシブ教育って？』，明治図書，2014.
○　村中智彦編著，『学び合い，ともに伸びる』授業づくり，明治図書，2013.
○　静岡大学教育学部附属特別支援学校，『特別支援教育のコツ　今，知りたい！　かかわる力・調整する力』，ジアース教育新社，2013.
○　鹿児島大学教育学部附属特別支援学校，『特別支援教育の学習指導案と授業研究』，ジアース教育新社，2013.
○　遠藤由美編著，『いちばんはじめに読む心理学の本②　社会心理学－社会で生きる人のいとなみを探る－』，ミネルヴァ書房，2009.
○　特別支援教育の実践研究会編，「特別支援教育の実践情報 No.173－特集：特別支援教育とアクティブラーニング－」，明治図書，2016.
○　岩﨑清隆・花熊曉・吉松靖文，『標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　人間発達学』，医学書院，2010.
○　岡堂哲雄監修，『小児ケアのための発達臨床心理』，へるす出版，1983.
○　18 歳選挙権研究会監修，『18 歳選挙権の手引き』，国政情報センター，2015.
○　全国民主主義教育研究会編著，『主権者教育のすすめ－未来をひらく社会科の授業』，同時代社，2014.
○　総務省・文部科学省，『私たちが拓く日本の未来』，2015.
○　栃木県教育委員会，『とちぎの高校生　じぶん未来学』，2016.
○　坂本綾子監修，『お金の教科書①お金を考えて使おう！』，学習研究社，2009.
○　坂本綾子監修，『お金の教科書③見えないお金の便利さ・怖さを知ろう！』，学習研究社，2009.
○　坂本綾子，『お金の教科書④進路・仕事とお金を考えよう！』，学習研究社，2009.
○　東京学芸大学・みずほフィナンシャルグループ金融教育共同研究プロジェクト，『くらしとお金　お金はゆたかなくらしのパートナー』，2008.
○　金融広報中央委員会 知るぽると，『金融教育プログラム－社会の中で生きる力を育む授業とは－』，2016.
○　鹿野佐代子・前野彩，『今日からできる！　障がいのある子のお金トレーニング』，翔泳社，2016.
○　日本ファイナンシャル・プランナーズ協会，『10 代から学ぶパーソナルファイナンス－社会人になっても役立つお金の知識－』，2016.

おわりに

「共に生きる力を育む教育の実践　～『つながる力』に着目した授業作り～」の研究テーマの下，３か年計画の実践研究を進め，３年間の成果を「研究紀要」としてまとめさせていただきました。

最終年度となる今年度は，過去２年間で蓄積してきた「つながる力」の育成を意図した授業作りの実践を通して得られた結果と，「つながる力」の内容の明確化及び「段階表」としての整合性の検討結果を基に，授業研究を積み重ねて，「つながる力」を育む授業作りのポイントとその有効性を検証し，皆様に分かりやすく提案させていただきたいと考え，取り組んできました。

「つながる力」の内容の明確化は，「段階表」の最終版を作成し一応のまとめとしましたが，もちろん完成版ではありませんし，完成版を目指す必要もないと考えています。指導内容設定のための基準であり，児童生徒の「つながる力」という視点での実態把握や評価の観点としての活用も意図していますが，同時に「たたき台」として，実践を踏まえて常によりよい修正を加え，活用しながら充実させていくものと考えています。今年度の授業実践も，「つながる力」の内容と「段階表」の整合性検証の継続的な取組であると言えます。

授業研究は，全担任・副担任が個々に主題を設定し，それに応じた学習の形態での授業を実施し，授業研究会で特にその評価と改善についての協議を通して，授業作りのポイントの明確化とその有効性について検討してきました。個々の教員それぞれの主題による授業実践は，様々な学習の形態及び題材での実践となり，過去２年間の実践とも併せて主な学習の形態での授業作りのデータを蓄積することができました。また，本研究において基本とした授業作りのPDCAサイクルのうち，Ｃ(Check＝評価)とＡ(Act＝改善)に重点を置いたことで，Ｐ(Plan＝計画)とＤ(Do＝実践)に偏ることなく，PDCAサイクルの連続する好循環が生じることも実感することができました。

それらの取組経過を経て，児童生徒の「つながる姿」を目指すための授業作りのポイントとして多くの具体的なデータが得られ，それに伴う児童生徒の様子や変容を根拠として各ポイントの有効性を実証することができたと考えています。

昨年度の研究報告でも述べさせていただきましたが，人と人との関わりを考えるとき，コミュニケーションスキルの獲得・向上という「相手とどのように関わるか・関われるか」という観点とともに楽しい，うれしい，好きといった感情や，自分を受け入れてもらえるという安心感，さらには，この人なら大丈夫，この人は〇〇が上手だから教えてほしいという信頼や尊敬といった肯定的な心理面の思いが存在します。本研究における「つながる力」の育成という観点には，コミュニケーションスキルの獲得・向上という内容も当然含まれてはいますが，人と人との出会いと関わり合いの本質とも言うべき感情や思いを重視した・・・すなわち一人一人の内面の成長に焦点を当てています。そのために，分かる，できる，考える授業を通して，「なぜ・何のために，そうするのか」を考え，理解することを重視すると同時に相手や仲間という他者の理解と，自己理解の相互作用・相乗効果といった関連を重視して，自己評価と他者評価の一致による自己肯定感から自然と湧き上がる自信を実感できるように意図することで，人と関わることに対する関心・意欲を高めることを目指してきました。

このような観点は，自立活動における「人間関係の形成」と「コミュニケーション」等の内容と大きく重なっています。ただし，本研究では，個別の指導を前提にした指導・支援ではなく，授業作りという全員を対象とした指導計画・実践であるという点で自立活動の主旨とは異なると言えます。また主体性につながる「意欲」を引き出す意図的な取組に重点を置いた点もポイントになっています。さらに，「つながる力」を育むための指導・支援が，各授業本来の目標達成にも有効であるという事例を見ていただけると，「人間関係の形成」や「コミュニケーション」等に関する指導内容を必要とする児童生徒への指導・支援の具体例としても，参考にしていただけるのではないか思います。

この度，本研究を通して「つながる」ことができた皆様からの，忌憚のない多くの御意見・御指導をいただけましたら幸いです。

最後になりましたが，今回の研究に際しまして，御教授いただきました諸先生方，並びに深い御理解と多大なる御協力をいただきました関係の皆様に深く感謝申し上げます。

副校長　粂川剛士

平成 29 年度　研究同人

校　　長　　松　島　さくら子
副 校 長　　桒　川　剛　士
主幹教諭　　岡　戸　陽　子
教務主任　〇植　野　敏　江

《小学部》
〇小松崎　信　彦
渡　邊　倫　子
伴　内　敦　子
齊　藤　由　紀
金　子　　好
大　類　陽　子
〇阿　部　正　明
◎福　田　真　琴
渡　邊　亜花理
和　知　恵美子

《中学部》
〇江　田　良　子
小　出　博　史
〇山　﨑　有　子
鎌　田　麻　恵
川　俣　和　則
加　藤　恭　子
〇五月女　智　子
下　妻　理　恵
鈴　木　裕　子

《高等部》
〇大　岩　紀　之
小　森　純　代
〇神　山　陽　啓
齊　藤　祥　平
〇須　藤　里　江
遠　藤　　茂
坂　本　綾　子
備　前　智　史
水　沼　由未子

（◎：研究主任　〇：研究部）

研究協力者

（順不同，敬称略）

宇都宮大学教授（教育学部）　池　本　喜代正
宇都宮大学准教授（教育学部）　石　川　由美子
宇都宮大学准教授（教育学部）　岡　澤　慎　一
宇都宮大学准教授（教育学研究科）　司　城　紀代美

宇都宮大学教育学部附属特別支援学校　研究紀要　第31号

発行日　平成３０年２月１６日
発行者　宇都宮大学教育学部附属特別支援学校
〒320-0061　栃木県宇都宮市宝木町1丁目2592番地
TEL:028-621-3871　FAX:028-627-4561
E-mail:tokubetsushien@cc.utsunomiya-u.ac.jp
印刷所　鈴木印刷株式会社
〒321-0901　栃木県宇都宮市平出町3751-11